



大学入試理詰め攻略本

【古文•和歌】

マスタリング

Mastering

ウェポン

Weapon

【weapon】武器・得物・対抗手段

…他者がそれを手にした時、丸腰の者に勝ち目なし。勝ちたくば、自ら求め修むべし。

authored by **之人冗悟** (のと・じゃうご: Jaugo Noto) essentially excerpt from 『扶桑語り』(ふさうがたり)

http://fusaugatari.com

Beneath Umbrella of ZUBARAIE LLC.

http://zubaraie.com

わかよには かくもむなしき ことのはを ふみてかきわく みやひへのみち

我が世には 斯くも空しき 古都の葉を 踏みて掻き分く 京日への道 *我が世には 書くも虚しき 言の葉を 文で書き分く 雅びへの道*

> Words writ in vain today, Yesteryear's gracious ways, Read with love, will make your day.

・・・今の世の中、言葉は空疎。過去の文物、読む人いづこ。 分け入って、迷わぬための道しるべ、書けば再び開けるか・・・ かつて栄えた優雅な都、人もうらやむ高貴なる道・・・

いさよはで、いで、いざよまむ—『古文・和歌 Mastering Weapon』

- 目次-**=古文の理=**

■章01)『品詞概説』■

- 0 1) (0 0 1) クッシャロコ=九品・三用・六非活 (9 つの品詞・3 つの活用語・6 つの非活用語に分かれる古語) p.11
- 0 1) (0 0 2) —古典的「品詞」区分の曖昧さ—p.11~p.14
- ■01)(003) —本当にマークすべき古典文法学習事項は何か—p.14~p.15
- 0 1) (0 0 4) ―けっこう大変な文法知識&案外単純な入試問題―p.15

■章02)『活用概説』■

- ■02)(001) 「動詞」・「形容詞」・「形容動詞」活用の見分け方—p.16
- ■02)(002) —<未然形>の見分け方—p.17
- ■02)(003) —<連用形>の見分け方—p.17
- ■02)(004) —<終止形>の見分け方—p.18
- ■02)(005) —<連体形>の見分け方—p.18~p.19
- ■02)(006) —<已然形>の見分け方—p.19
- ■02)(007) —<命令形>の見分け方—p.20

■章03)『形容詞』■

- ■03) (001) 「形容詞」の定義—p.21
- ■03)(002) ―形容詞「ク活用」と「シク活用」―p.21~p.22
- ■03) (003) 「カリ活用」の意味 p.22
- ■03)(004) 形容詞「ク活用」と「シク活用」の概括的特性—p.22~p.23
- ■03)(005) —形容詞「ク活用」と「シク活用」の原初的語頭用法—p.23~p.24
- ■03)(006) ―形容詞「ク活用」語幹と「シク活用」終止形の連体修飾用法―p.24~p.25
- ■03)(007)—形容詞「ク活用」語幹と「シク活用」終止形の文末詠嘆用法—p.25~p.26
- 0 3) (0 0 8) —体言+形容詞「ク活用」・「シク活用」語幹+「み」による「原因・理由」用法—p.26~p.28
- 0 3) (0 0 9) —体言+形容詞「ク活用/シク活用」語幹+「み」+「す(為)/おもふ(思ふ)」の動詞用法—p.28

■章04)『形容動詞』■

- ■04)(001) 「形容動詞」の定義—p.29
- ■04)(002) ―形容動詞「ナリ活用」と「タリ活用」―p.29~p.30
- ■04)(003) ―形容動詞「ナリ活用」と「タリ活用」の概括的特性―p.30~p.31
- 0 4) (0 0 4) ―形容動詞語幹の文末詠嘆用法―p.31~p.32
- 0 4) (0 0 5) 形容動詞語幹の連体修飾用法—p.32

■章05)『活用形詳説』■

- ■05)(001) 「未然形」の用法—p.33~p.36
- ■05)(002) 「連用形」という名称—p.36
- 0 5) (0 0 2 A) 連用形用法 1) 「連用法」(副詞法) —p.37

- ■05) (002B) 連用形用法2) 「中止法」その1—p.37~p.38
- ■05)(002C) 連用形用法2)「中止法」その2=「対偶中止法」—p.38
- ■05) (002D) 連用形用法2) 「中止法」その3=「対偶否定法」—p.38
- ■05) (002E) 連用形用法3) 「動詞の名詞化」—p.39
- ■05)(002F) 連用形用法4)「助動詞」・「助詞」への接続—p.39~p.42
- ■05) (003A) 終止形用法1) 文章の終止—p.42
- ■05) (003B) 終止形用法2) 「助動詞」への接続—p.43~p.44
- ■05) (003C) 終止形用法3) 「助詞」への接続—p.44~p.47
- ■05) (004) 「連体形」の定義・「連用形」の定義—p.47~p.48
- ■05) (004A) 連体形による「連体法」—p.48
- ■05) (004B) 連体形による「準体法」1) —p.48
- ■05) (004C) 連体形による「準体法」2) 「同格」用法—p.49
- ■05) (004D) 連体形による「準体法」3) 「詠嘆」用法—p.50
- ■05)(004E) 「連体形係り結び」1)係助詞「ぞ」・「なむ」呼応型—p.50~p.51
- ■05)(004F) 「連体形係り結び」2)係助詞「ぞ」・「なむ」終止型—p.51~p.52
- ■05)(004G) 「連体形係り結び」3)係助詞「か」・「や」呼応型—p.52~p.55
- ■05)(004H) 「連体形係り結び」4)係助詞「にか」・「にや」終止型—p.56
- ■05)(004I) 「連体形係り結び」5) 疑問語呼応型—p.56~p.57
- ■05) (004 J) 「連体形」に接続する「助動詞」—p.57~p.59
- ■05) (004K) 「連体形」に接続する「助詞」—p.59~p.60
- ■05) (005) 「已然形」の用法—p.60~p.61
- ■05) (005A) 已然形用法1) 「こそ+已然形係り結び」—p.61~p.62
- 0 5) (0 0 5 B) 已然形用法 2) 「已然形+ど」・「已然形+ども」の「逆接確定条件」— p.62~p.63
- ■05) (005C) 已然形用法3) 「已然形+ば」の「順接確定条件」—p.63~p.65
- ■05) (005D) 「已然形」から「仮定形」へ—p.65~p.67
- ■05)(005E) 「係り結び」の「係り捨て」—p.67~p.68
- ■05) (006) —「命令形」の用法—p.68~p.69

■章06)『動詞』■

- ■06) (001) 「動詞」の概括的特性—p.70
- ■06)(002) —動詞活用形—p.70~p.74
- 0 6) (0 0 3) —四段活用—p.75
- ■06)(004)—上一段活用—p.75~p.76
- ■06)(005) —下一段活用—p.76
- ■06)(006)—上二段活用—p.76
- ■06)(007) —下二段活用—p.76
- ■06)(008) 「カ行変格活用」 —p.77
- ■06)(009)—「サ行変格活用」—p.77

- ■06)(010) 「ナ行変格活用」 —p.78
- ■06)(011) 「ラ行変格活用」 —p.78~p.79
- 0 6) (0 1 2) —補助動詞—p.79~p.80

■章07)『音便』■

- 0 7) (0 0 1) —音便概説 —p.80~p.81
- 0 7) (0 0 2) イ音便—p.81~p.82
- 0 7) (0 0 3) 一ウ音便—p.83
- 0 7) (0 0 4) —促音便—p.84
- 0 7) (0 0 5) —撥音便—p.85~p.88

■章08)『仮名遣い』■

- ■08) (001) 「いろはにほへと」と「あいうえお」—p.88~p.90
- ■08) (002) —歴史的仮名遣い—p.90~p.98

■章09)『助動詞概説』■

- 0 9) (0 0 1) —助動詞・補助動詞の定義—p.99~p.100
- ■09) (002) —助動詞の三分類—p.100~p.101
- ■09)(003) —文中に於ける助動詞及び補助動詞の登場位置の序列—p.102~p.105
- 0 9) (0 0 4) 『未然形接続助動詞』 —p.106~p.109
- 0 9) (0 0 5) 『連用形接続助動詞』—p.110~p.112
- ■09)(006)—『終止形接続助動詞』—p.112~p.115
- 0 9) (0 0 7) 『連体形接続助動詞』 —p.115~p.116

■章10)『助動詞接続・用法詳説』■

-未然形接続助動詞群-

- ■10) (001) 「自発」の「る・らる」/「使役」の「す・さす」が「尊敬」の意になるのは何故? (未然形接続) —p.117~p.118
- ■10) (002) 「尊敬」の「す・さす」は独立した助動詞か? (未然形接続) —p.118~p.119
- ■10)(003) 「す・さす」の「使役」が「受身」になる場合(未然形接続) —p.119~p.120
- ■10) (004) 「す・さす」の「使役」が「謙譲」になるのは何故? (未然形接続) p.120~p.121
- ■10) (005) 平安末期までの「可能」の「る・らる」は疑否専表現(未然形接続) p.122
- ■10)(006) ―ジンマシンムズムズン(「じ」・「む」・「まじ」・「むず」+「べし」)の関係(未然形・終止形接続) ―p.122~p.126
- ■10)(007) —有意志/無意志の「じ」・「む」・「む」・「むず」+「べし」(未然形・終止形接続) —p.126
- ■10)(008) 「む」「むず」の「おねだり型命令文」(未然形接続) —p.126~p.129
- ■10) (009) 「む」・「むず」の「婉曲」(未然形接続) —p.130
- ■10) (010) —否定命令文「な~そ」と否定助動詞「ず」の関係(未然形接続) —p.130~p.140
- ■10) (011) 「まほし」と「まうし」と「あらまほし」(未然形接続) —p.140~p.141
- ■10)(012) 「ましかば~まし」の「反実仮想」(未然形接続) —p.141~p.148

- ■10)(013) 「願望」の「まし」(未然形接続) —p.148~p.149 -連用形接続助動詞群-
- ■10) (014) 「き」・「けり」は「過去」? (連用形接続) —p.149~p.153
- ■10)(015) 仏教説話の断定過去的「き」(連用形接続) p.153~ p.155
- ■10) (016) 「けむ」と「らむ」(連用形・終止形接続) —p.155~p.160
- ■10) (017) 「たし」 = 「甚し」(連用形接続) —p.160
- ■10)(018) 「り」と「たり」(連用形接続) —p.161~p.163
- ■10)(019) 「往ぬ」・「棄つ」に由来する「ぬ」・「つ」の特性(連用形接続) p.163~ p.164 - 終止形接続助動詞群 —
- ■10) (020) —推定助動詞「なり」と「めり」(終止形接続) —p.164~p.168
- ■10)(021) —古典助動詞中最多義語の「べし」(終止形接続) —p.168~p.170
- ■10)(022) 「べし」派生語としての中古限定表現「ベみ」と「べらなり」(終止形接続) --p.170~p.171
- ■10) (023) ―現代語とは異なる古典助動詞「らし」(終止形接続) ―p.171~p.175 -連体形接続助動詞群 ―
- ■10) (024) 「比況」の「同 (ごとし)」・「様 (やうなり)」は「格助詞」がお好き (連体 形接続) —p.175~p.176
- ■10) (025) ―断定助動詞「なり」に「たり」(連体形接続) ―p.176~p.177
- ■10) (026) 「なり」の「推量」vs.「断定」見分け法(終止形接続) —p.177~p.193

■章11)『助詞』

- ■11)(001) 「助詞」の定義と種類—p.195~p.196
- ■11)(002)—「格助詞」—p.197~p.200
- ■11) (003) 「副助詞」—p.200~p.202
- ■11) (004) 「係助詞」—p.202~p.203
- ■11)(005)—「接続助詞」—p.204~p.207
- ■11) (006) 「終助詞」—p.207~p.210
- 1 1) (0 0 7) 「間投助詞」—p.210

■章12)『巻末付録』■

- ■12)(001)—「古典代名詞一覧」—p.212~p.219
- ■12)(002)—「古典補助動詞一覧」—p.220~p.224
- ■12)(003)—「古典連体詞一覧」—p.225~p.226
- ■12)(004)—「古典感動詞一覧」—p.227~p.231
- ■12)(005)—「古典接続詞一覧」—p.232~p.234

=歌よみ心得=

■章00)『和歌概説』■

- ■00)(001) 「短歌」の形式—p.238
- ■00)(002) 「和歌」と「短歌」—p.238~p.239

- ■00)(003) 「和歌」の隆盛と「漢詩」の衰退—p.240~p.242
- ■00)(004) 「短歌」と「連歌」そして「俳句」—p.242~p.245

■章01)『和歌修辞法』■

- ■01)(001) 「字余り」と「字足らず」—p.245~p.246
- ■01) (002) 「句切れ」—p.246~p.247
- 0 1) (0 0 3) 「詞書」—p.247~p.248
- 0 1) (0 0 4) 「歌物語」—p.248~p.250
- ■01)(005) 「本歌取り」と「本説取り」—p.250~p.253
- 0 1) (0 0 6) 「歌枕」—p.253~p.256
- ■01)(007) 「枕詞」—p.256
- 0 1) (0 0 8) 「序詞」—p.256~p.262
- 0 1) (0 0 9) 「掛詞」—p.263~p.265
- 0 1) (0 1 0) 「縁語」—p.265~p.268
- ■01) (011) 「係り結び」—p.268~p.271
- ■01)(012) 「終止形」による「連体形」代用表現—p.271~p.273

■章02)『和歌技巧』■

- 0 2) (0 0 1) 「体言止め」—p.273~p.274
- ■02) (002) 「擬人法」—p.274~p.275
- ■02)(003) 「頓呼法」—p.275~p.276
- ■02) (004) 「畳み掛け」—p.277~p.278
- ■02)(005) 「倒置法」—p.278~p.280
- ■02)(006) 「対置法」—p.280~p.281
- ■02)(007) 「視差」—p.282~p.283
- ■02) (008) 「時差」—p.283~p.284
- ■02)(009) 「遷移」—p.284~p.285
- ■02) (010) 「見立て」—p.285~p.286
- ■02) (011) 「逆喩」—p.286~p.288
- ■02) (012) 「錯綜」—p.288~p.290

■章03)『和歌題目』■

- ■03)(001) 「隠し題」—p.291~p.293
- 0 3) (0 0 2) 「部立」—p.293
- ■03)(003) 「勅撰和歌集」—p.293~p.297
- 0 3) (0 0 4) 「屛風歌」—p.297~p.298
- ■03)(005) 「題詠」・「当座」・「兼題」 —p.298~p.299
- ■03) (006) 「歌合せ」—p.299~p.303

★全巻末付録: 文法理解度確認&暗記促進用 空所補充試験問題★p.304~p.372

+ (古典時代と現代とで**意味が異なる**もののみ集めた)助詞語義+例文集 p.373~p.384

古文の理

(こぶんのことわり)

一前書き一

●「習い」てのち「慣れよ」

現代の日本には「習うより慣れよ」と唱えては「文法なんていらない!」と平然と叫ぶ人々がいる。が、「英語」相手なら可能性ゼロではない(though infinitely near 0%)にせよ、「古文」相手にそれは無理だ:今や誰も喋らず書かずロクに読みもせぬ千年も昔の死んだ言葉に、どうやって「慣れよ」というのか?・・・「習う」しかあるまい?本書は、無手勝流の「読み慣れ」に依拠せずに古文を「習う」必然性を理解できる程度に知的な日本人のために、その程度の理性があれば理解可能な理詰めのやり方で、大学入試古文の主対象たる平安時代の古典文法の論理を網羅的に解説したものである。

●文法解説「古文の理」+暗記リスト+穴埋め試験&短歌用「歌よみ心得」豪華四本立て

「文法」として論理的に把握すべきものは本編で解説し、ガツガツ覚え込んでもら うべき暗記リストは本編末尾の「巻末付録」にまとめ、覚えた(はずの)文法論理の 理解度確認と暗記促進用のボーナス特訓教材「穴埋めテスト」をも全巻末に添えた。

「入試古文」の範囲内で把握しておくべき「和歌」の知識については、「歌よみ心得」という別立て本の趣で(「巻末付録」と「全巻末穴埋めテスト」の間に)添えてある。

●「英語」含みゆえの横書き本

「古文の解説なのに横書き?」といぶかる読者に対しては、「何故縦書きである必要がある?」と問うと同時に、「和文は縦横いずれの書式にも堪え得る柔軟性を有するが、本講座中に頻繁に登場する英文は横書き以外には耐えられない」という言わずもがなの事実を指摘しておけば事足りよう。なお、**出典明示なき文例は全て筆者自作**である。

●無意味な「ゲスト古文」問題、なし/完璧理解確認&促進「テスト現代文」、あり

「慣れた≒上達した」気分にさせるべく古文の一部を引っ張って訳させる無益な練習問題の代わりに、本書の文法解説の核心をまとめた要約文を作った上でその一部を《 (穴埋めテスト)》にして全巻の末尾に添えてある。昔々「山川」の本の説く歴史事象とその背後を流れる歴史の本質的意味を掴み自らの知的自我として同化するために筆者が(脳内で)常習的に行なっていた作業を、紙面上に(煩を厭わず)再現した形である。穴埋めが全て完璧に出来れば諸君の勝ち/さもなくば負け・・・満点でなければ零点も同じ:繰り返し挑み会得して古文マイスターへの道を歩むべし。

●残るは「古文単語」と「過去問」対策

本書の内容の征服後、諸君に残されることになる課題は「受験必須古文単語の暗記」と「入試問題相手の慣れ」の二つである。もっとも、本書の内容を我がものとした諸君であれば、大方の大学相手には前者(単語対策)のみでも事足りるだろう:その役割のために本書の筆者が作ったのが**『古文単語千五百 Mastering Weapon』・・**その単語集に収録の古語千五百(+助動詞 37&助詞 77 全語法)の古文の中での用例を平安調歌物語の中に織り込んだ巨大例文集が**『ふさうがたり(Fusau Sales)扶桑語り』**:本書と併用して戴きたい。東京大学・早稲田大学あたりの難関入試問題相手には後者(過去問対策)も必須だが、本書履修済の諸君にとってそれは自らの論理性の手堅さを実感可能な充足感に満ちた知的ゲーム:恐るるに足るまい・・・が、まずは本書を通して文法面の足固めをするのが先決:「習うより慣れよ、で高きに到る」は患者の夢である。

■章01)『品詞』概説■

第1章は、学習の下準備として、古文を構成する言語要素(parts of speech)である「品詞」について、4項 -01)(001)~(004) - に分けて概説しておこう。

■ 0 1) (0 0 1) — クッシャロコ=九品・三用・六非活 (9 つの品詞・3 つの活用語・6 つの非活用語に分かれる古語) —

●活用語と非活用語

古語には、前後に続く語との関係で語尾の形が変わる語=「活用語」と呼ばれるものが、次の3種類(数え方によっては5種類)存在する:

- ◆動詞 (・・・更に、助動詞・補助動詞を加えることもある)
- ◆形容詞
- ◆形容動詞

上記3種の「活用語」以外は、前後にどんな語が来ようとも常に同じ形で用いられる「非活用語」であり、その数は以下の6種類(数え方によっては7種類)である:

- ◆名詞 (・・・更に、代名詞を加えることもある)
- ◆接続詞
- ◆連体詞
- ◆感動詞
- ◆助詞
- ◆副詞

こうして9種 (or 1 0種 or 1 1種 or 1 2種) に区分されるのが古典文法上の「品詞」であること、及び、「品詞」は更に「活用語」と「非活用語」に分かれることをまず覚えておこう・・・覚え込むための強引&無意味な七五調語呂合わせも提供しようか?

《兎に角も三郎急で大丈夫。婦女子関連攻めど、けど》

とに(12)かくも、さぶ(3活用語)ろー(6非活用語)きゅー(9品詞)でだい(代名詞) じょ(助動詞)ほ(補助動詞)ぶ(←以上の品詞御三方は補欠)。ふ(副詞)じょし(助詞) かん(感動詞)れん(連体詞)せ(接続詞)め(名詞) 非活用語←/→活用語 ど(動詞) け・ど(形容詞・形容動詞)

■01)(002) ―古典的「品詞」区分の曖昧さ―

日本の古典文法の場合、(英語等とは異なり) 品詞の区分には次のようにかなり曖昧な部分が多く、受験生の悩みの種となっている:

- ●難点1)「名詞」と「代名詞」がいっしょくたである:
 - ・・・というより、日本語には厳密な意味での「代名詞」(我・彼・あなた・何某・

等々) そのものが存在しないという見方もある;が、とにかく「代名詞」を知らずに 古文を読むということは、「人物・物を指す語句」として把握すべき語句の見当も付かぬ 状態で(英語で言えば「I, we, you, he, she, they, it」の意味も知らぬまま) 文章を読み進む ことになるわけで、何とも心もとない感じである。

だが、古文業界側の立場からすれば、この「代名詞無視」の姿勢も仕方ない、とも言える:なにしろ、「代名詞」として区分され得る語句を逐一取り上げると、軽く三桁(筆者の調べでは約150語ほど)に達してしまい、「名詞」との区分の境界線も曖昧そのもので、ある人が「代名詞」と思うものを他の学者は「ただの名詞」と呼ぶ事態が平然と起こり得るのだ・・・これでは面倒でたまらないから、「代名詞」という区分そのものを廃止して「名詞」or「修飾語付きの名詞(=連語)」扱いでいい、というのが古典(and 現代)日本語文法の伝統的態度なのである。

そんな実情だから、「区分」そのものを主目的とする分類学的態度からすれば、「代名詞などという品詞は存在しない」と言い切ってしまうのも、ありだろう。が、その一方で古文業界は「連体詞」などというこれまた曖昧な品詞を別立て扱いで定義している(その数僅かに30数個:つまり少数が幸いしたわけだ)。両者とも単なる「名詞の修飾語/修飾語付き名詞」として分解的に見るより「定型句」として覚えておく方が得策という意味では本源的に変わらない;にもかかわらず、かたや「連体詞」で、かたや「名詞の一部 or 修飾語つき名詞」というのは、論理的に納得できる話ではない。

古文を研究するだけならともかく、他人に教える立場の者ならやはり、「代名詞」の「区分」はともかくその「実態」にはもっと意を用いるべきであろう ― ということで本書では、**巻末付録の形で「古典代名詞一覧」を用意した**。ざぁーっと眺めて漫然と印象に焼き付けるだけでもそれなりの効用はあるリストとなろう。英語の代名詞と違って「I, my, me, mine」などと律儀に覚え込むべき対象ではない(定格の代名詞扱いの有限語句集団ではないのだから、投じた時間と労力に見合わぬこの種の無益な労苦は払うべきでない)が、それぞれの代名詞(というか、代名詞相当修飾語付き名詞と言うべきか)が英語の「一人称(I, we)」・「二人称(you)」・「三人称(he, she, they, it)」その他の語句の何に相当するかを考えつつ、漫然と(しかしある程度以上の頻度で)この一覧表を繰り返し見ることで、それなり以上の古文慣れは可能になるはずである。

●難点2)「動詞」と「補助動詞」・「助動詞」の区分が(英語のような)機能性分類ではなく、 単なる機械的分類に留まっている:

「助動詞」(例:**る**)も「補助動詞」(例:**たまふ**)も「それ単体では意味をなさず、他の活用語の直後に付けることで特定の意味を表わす活用語」という機能から見れば全く同一である。「助動詞」と「補助動詞」の違いは、「(本)動詞としての機能」を持つ(補助動詞・・・「**たまふ**」には「尊敬」の他に「**与える**」の意もある)/持たぬ(助動詞・・・「**る**」単体には何の意味もない)という一点のみに依拠する非本質的な区分けに過ぎ

ない。

機能性を重視するなら「補助動詞」も「助動詞」と同様に重要なものなのだ・・・ が、巻頭/巻末見開きページを「助動詞」(**る・らる・す・さす・き・けり・**etc.)が 飾るのが通例の古文の本のどこを探しても「補助動詞」(たまふ・あそばす・います・ おます・etc.) の一覧表は掲載されていないのが実情である。助動詞扱いの「やうなり」・ 「ごとくなり」などは単なる連語として流しても十分であるのに「助動詞一覧表」の 中に偉そうに鎮座している・・・その一方で、「尊敬の'(補)助動詞'」として重要度抜群 の感じの「**給ふ**」が(「**与える**」意の「本動詞」としての用法をも同時に果たす、と いうだけの理由で)「助動詞」扱いを受けずに「補助動詞」として解説書の奥深くに「秘 中の秘」の如くしまいこまれてしまっている・・・こんな各種参考書紙面上の「役割 上の重要度」ならぬ「機械的仕分け」に基づく「助動詞重視/補助動詞軽視」の姿勢 に接して、大方の学習者は「本当に学ぶべき重要な(補)助動詞って何?」という点 での学習上の明確な指針を見失いがち・・・これでは受験生はたまったものではない。 従って、この点に於いても本書は学習者のための「救命具」を巻末付録として用意 した:**約70 語にのぼる「古典補助動詞一覧」のラインナップ**である。「助動詞」並み の重要度を持つ大事な古語のリストであり、助動詞と違って小うるさい「接続」を気 にする必要もなく(もっぱら「連用形接続」のみである)、ただ暗記するだけで確実に 古文読解力の向上に直結する栄養価の高い文法サプリメントたち・・なので、食わず 嫌いせずあっさり(繰り返し)丸飲みして骨太な古文読み体質涵養に役立ててほしい。

●難点3)何でこんな区分があるのかよくわからない「連体詞」:

「代名詞」が「名詞の一部」あるいは「修飾語付き名詞としての、連語止まり」の扱いを受けるならば、「連体詞」なる語句もまた、独立した「品詞」ではなく「連語」として片付けられるのが当然・・・だから「連体詞」というのは何とも恣意的な区分と言わざるを得ないし、その区分法を具体的に検証してみても、「さる」などは「動詞'然り'連体形」とも「連体詞」ともされる一方で、「さるべき」あたりの語は「連語」扱いでしかなく「連体詞」にはならない、等々、かなりいいかげんな感じである。

だが、「名詞に定型的に掛かることが保証されている表現」としての「連体詞」の リストは、ざぁーっと眺めて脳裏に引っ掛けておけば古文読解上マイナスに働くこと だけはないのだし、総数僅か30語程度と少ないのだから、これを意固地に無視する 態度は大人げないというべきだろう・・・ということで**本書の巻末には「古典連体詞** 一覧」をも(ついでに) 掲げておくことにするので、気が向いたら眺めてみてほしい。

覚え込むのが楽&数少ない、という点では「感動詞」(例:**あ・う・お・あな・**etc.) も似たようなものである;から、**巻末付録にはまた「古典感動詞一覧」も掲載する**。 人類が「言語」を手にする過程で、最初に成立したと思われる「内面の感情が音声として表われたもの」が「感動詞」だから、わかりやすい上に、まとめて眺めればそれ

なりの言語学的感慨も沸いてこようというもの・・・音に乗せて遊んでみてほしい。

●難点4)「副詞」と「形容動詞連用形」の区分が曖昧:

「副詞」として機能している「***に」形の語句(例:**しづかに**)が「形容動詞連用形」として片付けられてしまう場合(及び逆の場合)が古文学習者の混乱を誘う困った場面は実に多い。

副詞用法の形容動詞連用形は統一的に「副詞」(しづかに)とみなして「形容動詞」(しづかなり)からは切り離してしまえば問題ないのだが、語源学的に「形容動詞」はこの「副詞用法」に起源を持つので、古文業界としては両者を別物として切り離すわけにも行かず、受験生の疑問(&古文嫌い)の種がまた一つ増える訳である。

このように扱いがかなり微妙な「副詞」だが、これは基本的に単なる「雰囲気語」であり、意味の重みを担う「(代) 名詞」・「((補) 助) 動詞」・「形容(動) 詞」等とは一線を画すべき「ふわふわ語」でしかない・・・のだから、そこに過度の意味の重みを見出して誤読する危険性を減少させる意味でも、「副詞かぁ・・・ならこいつは軽く読み流してもいいな」という程度の見切りは大事である。

「副詞」の数はあまりにも膨大なので、一々巻末付録としてリストアップして覚えてもらうわけにも行かない(そんなことされても受験生としては迷惑なだけである)が、文中に於ける使われ方からして「副詞」だと見抜けた語に対しては、過度の敬意は払わず突き進む読み方を身に付けてほしい。

その代わり、と言っては何だが、**巻末付録には「古典接続詞一覧」の項目を設けた**。 こちらは、前後の文節を「順接」(例:**されば**)・「逆接」(例:**されど**)・「原因/結果」 (例:**さるから**)等の意味ある関係で結びつける交通整理のおまわりさんみたいな重要な語句揃いである(しかもその数は決して多くない)から、しっかと覚え込みスイスイ流れるような古文読みに役立ててほしい。

■ 0 1) (0 0 3) —本当にマークすべき古典文法学習事項は何か—

上述の如く、古典文法に於ける「品詞」の区分には色々問題が多いものの、古文を 学ぶ上で真剣に問題にすべき品詞は一部に限られており、受験生としては以下の3点 を重点学習すれば(大学入試用の古典文法学習としては)それでよい:

- ◆活用語(動詞・助動詞・補助動詞・形容詞・形容動詞)の活用の種類を知る。
- ◆助動詞・補助動詞の意味を知る。
- ◆助詞及び接続詞の意味を知る。

これらは本講座でも当然重点的に行なう作業であるが、「古典補助動詞一覧」及び「古典接続詞一覧」については、巻末付録を通して包括的理解の便宜を図るにとどめ

おき、それ以上の深入りはしない(&その必要もない)。

結局「古典文法」などと言っても所詮、上の考慮点のみ押さえればそれでおしまい; 実に楽なものなのである。

・・・が、「入試古文」となると事はそう簡単にはいかない:上の3点セットに加えて、次の知識が(実に、最大の比重で!)モノを言うのである:

★ (重要度の高い) 古文単語+連語・相関構文の意味を知る★

・・・語彙や連語の知識がなければ、文法だけ知っていても点数は取れないのだ; というより、「文法なんて知っていて当たり前」という前提で古文問題を作るのが大学 の(少なくとも一流どころとされるような大学の) 出題者なのだから、文法の知識は 「試験だの合格だの以前の話」なのである・・・こうした「ボキャブラリー」に属する 学習については、本講座の管轄外である(・・・同じ筆者の手になる姉妹編として提供 される「古文単語の本」の働きに乞うご期待、とだけ言い添えておこう)。

■01)(004) ―けっこう大変な文法知識&案外単純な入試問題―

「文法知識」に属するもの(非ボキャブラリー系古文力)として片付けられる事柄のうちでも、「助動詞・補助動詞・助詞」の意味・用法を深いところまで知ることは、(実際に本書を読み進んでもらえればわかるが)かなり高度な知的探求に属するもの・・・なのでこれは「語彙」と並ぶ上級難題という感じではある。

が、実際の大学入試では、そんなに深い所まで「助動詞・補助動詞・助詞」の知識を問われることはほとんどない・・・ので、大方の受験生としては「文法には深入りせず素地だけを固める」&「重要古語・連語の暗記で得点力増強を図る」のが、入試古文で高得点を取る王道と言える。

多くの受験生は思い違いをしているが、「学習段階で理解が難しい文法事項」が即ち「入試に出題される事項」というわけではない。「文章の中に於ける位置付けに誤解が生じ易い語句・表現」をこそ出題者は狙うのであって、その種の題意・狙い目になる「誤解」を生むのは「古典文法力の欠如」ではない;(よほど不勉強な受験生を除き)「文法でコケた」という事態は、「英語」では頻発しても「古文」では生じにくいのだ。実際のところ、古文でコケる最大(&最頻)の要因は次の二つである:

- 1) 古文単語・連語の理解が足りず、現代語からの安直な類推で自爆してコケる。
- 2) 前後の脈絡を照合する丹念な読解力を発揮できず、短絡的な解釈をしてコケる。 これら負の要素を取り除く「入試古文に於ける要注意事項の傾向と対策」も、コケ ようのない「文法の素地固め」に徹する本講座の仕事ではない(・・・が、「この本 の筆者の仕事」ではあるから、それを必要とする方は、別の入り口から、またどうぞ)。

■章02)『活用』概説■

ここまでは、随分と長い(が、知らずに走り出してもらっては困る)古文学習上の下準備であった・・・いよいよこれ以降が文法学習の本題である。まずは手始めに、「活用語」=「動詞(助動詞・補助動詞)・形容詞・形容動詞」に付き物である「活用=前後の語句に応じて末尾が変わる様態」を確実に識別可能にしておこう(それぞれの活用形が表わす「意味・用法」の具体的内容については、後でまた詳解する)。

■02)(001) —「動詞」・「形容詞」・「形容動詞」活用の見分け方—まず最初に、次の語呂合わせを覚え込んでもらいたい:

《ずむけりなる、。ことぞなんどもばこそいざ》

- ・・・泥酔した人が口走りそうな意味の通じぬ呪術めいた文言だが、これらの語句が前 or 後に付く形として認識すればよいのが古典活用語(動詞・形容詞・形容動詞)の「活用形」(未然・連用・終止・連体・已然・命令、の6形態)なので、以下のような文法的関連性の謎を解く呪文として、悪しからず暗記のほど、どうぞよろしく:
- 1) <ず・む>=「未然形」
- 2) <けり・なる、>=「連用形」
- 3) <。>=「終止形」
- 4) <こと・ぞ・なん(なむ)>=「連体形」
- 5) <ども・ば・こそ>=「已然形」
- 6) <いざ>=「命令形」

これらの文言との関わりから「活用形」を切り分ける具体的モデルとして登場して もらうのは、以下に記す活用語たちである(助動詞・補助動詞の活用形の仕切り方は、 動詞のそれに準ずるので、割愛する):

- ◆動詞=「行く」(いく・ゆく)
- ◆形容詞ク活用=「**良し」(よし)**
- ◆形容詞シク活用=**「悪し」(あし)**
- ◆形容動詞ナリ活用=**「愚かなり」(おろかなり)**
- ◆形容動詞タリ活用=「**呆然たり」(ぼうぜんたり)**

「ク・シク・ナリ・タリ活用」は未だ意味不明だろうが気にせずともよい。以下、6つの活用形(未然・連用・終止・連体・已然・命令)ごとの「仕切り方」の実態を示す:ここでは、あくまで「どのような形ならどの活用形か」の識別法を示すのみである;それぞれの活用形が表わす意味の詳細については後でまとめて一気に詳解する。

- ■02)(002) —<未然形>の見分け方—
 - ◆直後に否定の助動詞「**ず**」・推量の助動詞「**む**」を付けて通じる形である:
- ●「行く」= {行か} <ず>/ {行か} <む>
- ●「良し」= **{良から}** <ず>/ **{良から}** <む>
- ●「悪し」= {悪しから} <ず>/ {悪しから} <む>
- ●「愚か」= **{愚かなら**} <ず>**/ {愚かなら**} <む>
- ●「呆然」= **{呆然たら**} <ず>/ **{呆然たら**} <む>
- ■02)(003) —<連用形>の見分け方—

◆<連用形>仕切り方その1:

- ・・・直後に過去助動詞「けり」を付けて通じる形である:
- ●「行く」= {行き} <けり>
- ●「良し」= **{良かり}** <けり>
- ●「悪し」= {悪しかり} <けり>
- ●「愚か」 = 【愚かなり】 <けり>
- ●「呆然」= **{呆然たり}** <けり>
 - ◆<連用形>仕切り方その2(「形容詞」・「形容動詞」限定):
- ・・・直後に「**なる**」を付けて通じる形である(注:この「**なる**」は動詞「**成る**」 の終止形であって、断定助動詞「**なり**」や推量助動詞「**なり**」の連体形ではない):
- ●「良し」= **{良く}** <なる> (先の {良かり} と合わせて連用形は2種あり)
- ●「悪し」= **{悪しく**} <なる> (先の {悪しかり} と合わせて連用形は2種あり)
- ●「愚か」= **【愚かに**】 <なる> (先の {愚かなり} と合わせて連用形は2種あり)
- ●「呆然」= **{呆然と**} <なる> (先の {呆然たり} と合わせて連用形は2種あり)
 - ◆<連用形>仕切り方その3(動詞・形容詞・形容動詞の「中止法」):
- ・・・直後に「、(読点)」を置いて文章を一旦そこで切り、間を置いてから後へと 続けることができる形である:
- ●「行く」=外へ {行き}、・・・難に遭ふ(なんにあふ)。
- ●「良し」=お日柄も**{良く}、・・・**御愁傷様(ごしうしゃうさま)。
- ●「悪し」=折り **{悪しく}、・・・**持ち合せなし(もちあはせなし)。
- ●「愚か」=見るも **{愚かに}、・・・**無様なること (ぶざまなること)。
- ●「呆然」=ただ **{呆然と}、・・・**立ちつくすのみ (たちつくすのみ)。

- ■02)(004) —<終止形>の見分け方—
- ◆直後に「。(句点)」を置いて文章を言い切って終える形(辞書に「見出し語」と して掲載されている形)である:
- ●「行く」= {行く}。
- ●「良し」= **(良し)。**
- ●「悪し」= {悪し}。
- ●「愚か」 = {愚かなり}。
- ●「呆然」= {呆然たり}。
- ■02)(005) —<連体形>の見分け方—
 - ◆<連体形>仕切り方その1(体言接続):
 - ・・・直後に名詞の「**こと(事)**」を付けて意味が通じる形である:
- ●「行く」= **{行く**} <こと>
- ●「良し」= **【良き**】 <こと>& **【良かる**】 <こと> (連体形は2種あり)
- ●「悪し」= **{悪しき**} <こと>& **{悪しかる**} <こと> (連体形は2種あり)
- ●「愚か」 = **{愚かなる}** <こと>
- ●「呆然」= **{呆然たる}** <こと>
 - ◆<連体形>仕切り方その2(係り結び):
- ・・・係助詞「**ぞ**」及び「**なむ(なん)**」と呼応した時に文末に現われる形である。 この相関関係は「連体形」識別用というより「連体形係り結び語」暗記用知識として 覚えておこう:
- ●「行く」=我<ぞ> {行く} or 我<なむ> {行く}
- ●「良し」=これ<ぞ> **{良き}** or これ<なむ> **{良き}**
- ●「悪し」=かく<ぞ> **{悪しき**} or かく<なむ> **{悪しき**}
- ●「愚か」=さて<ぞ> **【愚かなる**】 or さて<なむ> **【愚かなる**】
- ●「呆然」=さすがに<ぞ> {呆然たる} or さすがに<なむ> {呆然たる}
- ・・・「ぞ」・「なむ」という「係助詞」以外にも、「疑問の意を表わす語句(か・や・いづこ・いつ・たれ・など・etc)」と呼応する文は末尾を「連体形」で締める;これも立派な(&ごく自然に多用される)「係り結び」である(「古文の疑問文は連体形で締めくくる」と覚えておけばよい):

- ●「行く」=君<や>**{行く**} ? (あなたは行くのか?)
- ●「良し」=<いづれ><か> {良き}?(どっちがよい?)
- ●「悪し」=<誰ぞ> **{悪しき}** ? (悪いのは誰?)
- ●「愚か」=<など>かくも**【愚かなる**】?(どうしてこんなにアホなのかなあ)
- ●「呆然」=<いかばかり> **{呆然たる**} ? (どれほどボーゼンとしたことやら)

■02)(006) —<已然形>の見分け方—

◆ < 已然形 > 仕切り方その1(逆接):

- ・・・直後に逆接の接続助詞「**ど**」・「**ども**」を付けて「逆接の確定条件(~だけれども)」の意味を表わす形である:
- ●「行く」= **{行け}** <ど(も)>空しき雨の野良(ゆけどむなしきあめののら)
- ●「良し」= **{良かれ}** <ど(も)>明日の行方は露知らず(よかれどもあすのゆくへはつゆしらず)
- ●「悪し」= **(悪しかれ)** くど(も) >他に術なし(あしかれどほかにづちなし)
- ●「愚か」= **【愚かなれ**】 <ど(も)>罪すべからず(おろかなれどつみすべからず)
- ●「呆然」= **{呆然たれ}** <ど(も) >事無しび(ぼうぜんたれどことなしび)

◆<已然形>仕切り方その2(順接確定条件):

- ・・・直後に接続助詞「**ば**」を付けて「順接の確定条件(~なので)」の意味を表わす形である:
- ●「行く」=皆人 **{行け}** <ば>、我も行く。(みなひといけば、われもいく)
- ●「良し」=顔 **(良けれ)** <ば>、好まれたり。(かほよければ、このまれたり)
- ●「悪し」=腹 **(悪しけれ)** <ば>、友もなし。(はらあしければ、とももなし)
- ●「愚か」=**{愚かなれ**} <ば>、疎まれたり。(おろかなれば、うとまれたり)
- ●「呆然」=親**{呆然たれ**} <ば>、子も泣く。(おやぼうぜんたれば、こもなく)

◆<已然形>仕切り方その3(係り結び):

- ・・・係助詞「こそ」と呼応した時に文末に現われる形である。この相関関係は「已然形」識別法というより「已然形係り結び暗記用」知識として覚えておこう(「係り結び」を「已然形」で締める係助詞は「こそ」だけ;他の係り結びは全て「連体形」):
- ●「行く」=我<こそ>**{行け**}
- ●「良し」=これ<こそ> {良けれ}
- ●「悪し」=かく<こそ> {悪しけれ}
- ●「愚か」=さて<こそ> {愚かなれ}
- ●「呆然」=さすがに<こそ> {果然たれ}

- ■02)(007) —<命令形>の見分け方—
- ◆直前に「いざ」を置き、相手に行動を促す形: 英語の命令文「動詞原型+!(感嘆符・exclamation mark)に相当する形である。古文では主に「動詞」で命令形が使われるが、「形容詞」命令形の用例は少なく、「形容動詞」に至ってはその命令形「~なれ/~たれ」を古文書の中に探すことすら不可能に近い「机上の形態」である。こうした(特殊な活用形)は、{活用表} 中では (~なれ)(~たれ)とカッコ付きで表示する:
- ●「行く」=<いざ> {行け}!
- ●「良し」=<いざ> {良かれ}!
- ●「悪し」=<いざ> {悪しかれ}!
- (「愚か」 = <いざ> 【**愚かなれ**】!)・・・・現実には用いない「理論上の命令形」
- (「呆然」 = <いざ> {果然たれ}!)…現実には用いない「理論上の命令形」
 - ・・・以上が「6つの活用形の見分け方」という分類学的作業の心得である。
 - ・・・「活用語」のパーツ(構成要素)の呼び名についても付け加えておこう:
- 1)前後の語句との対応によって様々に変化する語尾部分を「活用語尾」と呼ぶ。
- ・・・活用語尾の形に応じて、「これは命令している形だ」(命令形)とか「これは仮想の話だ」(未然形)とか、見分ける目安にすればよいわけである。
- 2)いかなる状況下でも常に変化しない語頭部分を「語幹」と呼ぶ。
- ・・・上例で言えば「行(い・ゆ)」・「良(よ)」・「悪(あ・わろ)」・「愚か(おろか)」・「呆然(ぼうぜん)」が「語幹」。食べ残しのイワシの頭みたいで何とも使い物にならない感じに見えるが、実はこの語幹部分にも大事な用法は(形容詞・形容動詞関連で)いくつかあるので、それらについてはまた後述することになる。
- ・・・以下、その6つの「活用形」(未然・連用・終止・連体・已然・命令)の具体的な「形態」を、まず「形容詞」・「形容動詞」の場合について確認して行こう(「動詞」はややこしいので、後回し)。これら二品詞の「形態」は定型的で「用法」もごく少数なので、まとめて一気に詳解することで、古文理解の足がかりを作ってしまおう。

■章03)『形容詞』■

この章では、「形容詞」について知るべき知識の全てを、まとめて一気に説明する。

■03)(001) — 「形容詞」の定義—

「形容詞」とは物事の状態や人の心理を形容する語で、その主な特性は以下の通り:

- 1) 言い切る形(終止形)は「~し」または濁音の「~じ」となる。
 - ・・・「**かなし」・「いみじ」**等が「形容詞」である。
- 2)目的語を取ることはできない。
- ・・・目的語を取るためには、形容詞の「**かなし**」ではなく、動詞の**「かなしがる」** にせねばならない(**例**:人の死は**<悲し>**/人の死を**<悲しがる)**。
- 3)活用語であり、その活用形(二通り=ク活用&シク活用)は定型的である。
- ・・・定型的なだけに、まとめて論じ、一気に理解することができるのだ(動詞・助動詞ではこうは行かない)・・・以下、その二通りの活用形「ク活用」と「シク活用」について早速詳解してしまうことにしよう。
- ■03)(002) ―形容詞「ク活用」と「シク活用」― 「形容詞」の活用形は以下の2種類であり、その見分け方も極めて単純である:
- ◆「連用形」(直後に動詞**「なる(成る)」**を続けて通じる形)が「**~く**」なら、**「ク活用」**と呼ぶ・・・例:**「良<く>**+なる**」**
- ◆「連用形」(直後に動詞「なる(成る)」を続けて通じる形)が「~しく」なら、「シク活用」と呼ぶ・・・例:「美くしく>+なる」・・・濁音連用形「~じく」となる「いみじく」等も「シク活用」の中に含む(・・・「ジク活用」と呼んだりはしない)。
 - ・・・普通の日本人なら、辞書で一々確認するまでもない区分であろう?
 - ・・・「ク活用」「シク活用」それぞれの「活用形」の具体的な形態(6種類)を、 ***** (未然・連用・終止・連体・已然・命令)** の順番に並べて示せば、次のようになる: ***** (A)** (別: 良くば) 専用
 - {(く) /から・く/かり・し・き/かる・けれ・かれ}
 - B)「形容詞シク活用」…未然形(しく)は、仮定条件「~しくは/~しくば」(例:悪しくは)専用 {(しく) /しから・しく/しかり・し・しき/しかる・しけれ・しかれ}
 - ・・・上の形容詞活用表では、次の四点に注目したい:
 - 注目点1)未然形(く)(しく)のカッコ付きは、使い道が「仮定条件」限定のせい。
 - 注目点2)「シク」活用から単純に「し」を除けば「ク活用」となる。
 - 注目点3)「ク活用」「シク活用」ともに、「連用形」及び「連体形」には2種類ある。
 - 注目点4)「未然=から・連用=かり・連体=かる・命令=かれ」(終止/已然なし)

は「連用形」の「**く**」音+補助動詞「**あり**」の結合から生まれた後発型複合語形で、「形容詞の補助活用」または「カリ活用」と呼ぶ(「シク活用」の補助活用を「シカリ活用」と呼ぶ人もいるが、区分する意味はないので「カリ活用」と総称するのが普通)。

■03)(003) — 「カリ活用」の意味—

「~**く+あり**」から生まれた「形容詞補助活用」という来歴を逆にたどれば、元来「形容詞」には「**あり**」の付かない語形しかなかったことになる。実際には「連用形(**く/しく**)・終止形(**し**)・連体形(**き/しき**)」の3つが最初からあり、やや遅れて「已然形(**けれ/しけれ**)」が生じ、最後に「~**く+あり**」の補助活用が加わる、という道筋で発展してきたのが「形容詞」の来歴である。

では、補助動詞「**あり**」を補っての「補助活用 or カリ活用」が生まれたのは何故か? 答えは「1)助動詞を後に従えるため;2)命令形を作るため」である。特に大事な のは「助動詞接続」のほう。その証拠に、「形容詞補助(カリ)活用」には「終止形」 と「已然形」がない(命令形「**~かれ**」は「**~く+あれ**」の複合形だが、よく似た形 の已然形「**~けれ**」の組成には補助動詞「**あり**」は含まれず、「カリ活用」ではない): 「~**く+あり**」の末尾を飾る「**あり**」はラ行変格活用(ラ変)動詞と呼ばれる特殊形 だが、この「ラ変動詞の終止形・已然形に接続する助動詞」はない(除「なり・めり」 の終止形撥音便接続);接続する助動詞の不在ゆえに「形容詞カリ活用に終止形・已然形 は不要」とみなされてこれらの活用形が生じなかったということは「補助活用とは、 形容詞が、後続部に助動詞を従えるために生まれた活用形」と考えてよい訳である。 ただ一つ、例外的に「終止形・已然形を持つ補助活用」を持つ形容詞として「多し・・・ 多かり(終止)·多かれ(已然)」の一語がある;が、無視してよい(···類例多からず、 どころか空前絶後の変わり種であるから、この一語を覚えること自体は楽だが、全くの孤立的 例外に過ぎず、論理的にさしたる意味をもなさぬこの種の事例は、あっさり無視してしまうの もまた学習者の心得であろう:さも重宝そうにこの「**多かり・多かれ**」を指摘するものの本も 多かれども、斯様に無意味な雑兵相手に兵力を浪費して敗軍の将となる例もまた多く

あり)。

■03)(004) ―形容詞「ク活用」と「シク活用」の概括的特性― 歴史的には、中古(平安期)以降新たに生まれた形容詞は殆ど「シク活用」である。 語形上の特性から言うと、「**はかばかし**」・「**すくすくし**」等の同一語句の繰り返し (畳語)で形成される形容詞はみな「シク活用」であることも覚えておくべきである。

その表わす意味について見ると、「ク活用」には形状・程度の客観描写に用いられる語(例:「高し」・「遠し」)が多いのに対し、「シク活用」には人間の心情を主観的に表わす語(例:「悲し」・「嬉し」)が多い。

「ク活用」・「シク活用」ともに、「形容詞」の(「補助活用 or カリ活用」以外での) 「連用形:~く/~しく」は「副詞」としての機能を持つ。この場合、「く/しく」は 「う/しう」という変則語形(=「ウ音便」)で用いられる場合が多い(例:「**はやく** →**はやう**」/「いみじく→いみじう」)。

・ ・・以上の概括的特性を例によって語呂合わせで紹介すれば、次のごとし:

《あたらシク、じょうごシクシク、こころシク、 こころなクよう、ク・シクもウ・シウ》

中古以降の新しい形容詞は「シク活用」で、同音の繰り返し(畳語)の形容詞も皆「シク活用」。 心情描写の形容詞には「シク活用」が多く、心情を伴わぬ客観描写表現には「ク活用」が多い。 形容詞連用形は「く」・「しく」がウ音便化して「う」・「しう」となることが多い。

■ 0 3) (0 0 5) 一形容詞「ク活用」と「シク活用」の原初的語頭用法― 上述した通り、形容詞には元来「終止形」「連用形」「連体形」しかなかった。更に 上代にまで遡れば、形容詞はこれらの活用形すら持たぬ「連体修飾造語成文」として、 名詞直前に付いて複合語を構成する「語頭用法」から発生したものとされる: **ク活用語頭用法**)

「高笑ひ (たかわらひ)」(・・・・<高>し) / 「遠方 (とほぢ)」(・・・・<遠>し) シク活用語頭用法)

「優男(やさをとこ)」(・・・くやさ>し) / 「徒言(あだこと)」(・・・くあだ>し)

・・・上のような複合語は、必ずしも上代のみに限ったものでもないが、形容詞の原初的な「語頭に於ける連体修飾用法」の名残が後代にもしっかり引き継がれていることが実感できる表現ではあろう。これら複合語に於ける「高」・「遠」・「優」・「徒」に、「ク」(連用形)・「シ」(終止形)・「キ」(連体形)を付けたもの・・・となれば、何か思い出さないであろうか?そう、これは「漢文」訓読時に漢字の右下端に付けるカタカナの添え書きそのものである。「官尊民卑」はそのまま「カンソンミンピ」と読めば「中国語風」、「官尊<ク>民卑<シ>(くわん<たふとく>たみくいやし>)」と読めば「漢文訓読調」を経て「古典形容詞」の出来上がり、となるわけである。

中国からの借り物文字の「漢字」には「活用語尾」(**く・し・く**等)はない。それをそのまま(中国語風に)名詞直前に置く連体修飾語として用いていただけの原初の「**遠国(えんごく)**」から、やがて「**遠<き>**国」の「連体形」が生じ、「**高笑ひ**」

が「**高笑ふ**」の動詞型を経て「**高くく>笑ふ**」の「連用形」を生み、「**遠国**」を引っ繰り返して「**国遠くし>**」と言い切る「終止形」が生まれたわけである。

■03)(006) ―形容詞「ク活用」語幹と「シク活用」終止形の連体修飾用法― 語頭に於ける連体修飾語成文として用いられた「高」・「遠」・「優」・「徒」は古典 文法上は「形容詞」としては扱われず、「高笑ひ」・「遠方」・「優男」・「徒言」とし て直後の語句とまとめて1語の扱いを受ける単なる「造語成分」でしかない。

これに対し、品詞分類上はあくまで「形容詞」である「ク活用」の語幹及び「シク活用」の終止形が、「連体修飾語」として(造語成分的に)機能する特殊用法もある:「ク活用」(例: <ったな>し)語幹+格助詞「の」+名詞)「ったなのわざ」(御粗末な芸当)「シク活用」(例<うるはし>)終止形+格助詞「の」+名詞)「うるはしのひと」(美人)

・・・「シク活用」終止形+格助詞「**の**」の用法の場合はさらに、格助詞「**の**」を介さず名詞を直後に続けての「連体修飾用法」もある:

「シク活用」終止形+名詞)「やさし蔵人」(風流な付き人)

- ・・・一般には「連体形」を用いて「**<やさしき>蔵人**」となるべき例であるが、「**の」**なしで「連体形的」に用いられるこうした例は上代(平安時代から見た奈良時代以前)にもきちんと存在したので、その感覚を踏襲したものとも言えよう: 上代の「シク活用」終止形+名詞)「**うまし**国」(・・・「**うまし**: **美し・甘し・旨し**」は「ク活用/シク活用」双方を持つ形容詞である)
- ・・・「**うましき**(美しき)国」(シク活用版)・「**うまき**(旨き)国」(ク活用版)といった「連体形+名詞」や、「**うまさけ**(旨酒・味酒)」という「ク活用語幹+名詞」などと同様、「シク活用終止形+名詞」による「連体修飾用法」が、上代にはさしたる違和感もなしに用いられていたという事実・・・このこと自体は古文学習者にとってさしたる意味も持たない:彼らが相手にする古文の年代は主として平安時代であり、上代(主に奈良時代を指す)の古い語法の多くは問題外となるからである。

が、この「**シク**活用形容詞の終止形を連体形の代用とする特殊用法」が、大きな意味を持つ場面がある・・・それが「**詩句**中での端折り(**シク**中でのハショリ)連体形」というのだから、シャレているだろう?・・・ということで、実例を見てもらおう:「さびしさに宿を立ち出でてながむればいづこもく同じ>秋の夕暮れ」良暹法師

「さびしさに宿を立ち出でてながむればいづこも<同じ>秋の夕暮れ」艮暹法師(りょうぜんほふし)

・・・この歌の中に於ける「**おなじ**」は、「**いづこもおなじ**。」としてそこで四句切れ を演じる「終止形」にも見えるであろう;「**おなじ**」は「シク活用」であるから、その 連体形は「**おなじき**」であって「**おなじ**」ではないはずなのだから・・・ところが、 この「**おなじ**」が実に(現代日本語同様)「連体形」なのである・・・でないと(= **いづこもおなじ秋の夕暮れ**」を一連の成文として続けざまに読まないと)この歌の味わいが台無しになってしまうのだ。

ではなぜこの連体形「**おなじ**」は、「**おなじき**」ではないのだろうか?・・・これは聞くだけ野暮であろう:答えは、「**おなじき**」では字余りになり韻律も乱れて聞き苦しいから、である。「詩句」はその音感的美しさが第一;文法的整合性など二の次・三の次で、四の五の言わずに「おなじ」形にするのが歌の世界の約束事なのだ・・・ロクでもない世界、と思われるだろうか?・・・だが、思い出してほしい:「シク活用終止形+名詞」の連体修飾用法は、上代にも見られた由緒正しき語法なのである。

そういう事情で、この「同じ」なる「シク活用形容詞」の「連体形」に関しては、(恐らくは、五七五七七の響きへの調和を重んじる和歌世界の約束事が飛び火する形で)、中古(=平安期)の和文脈では、詩文であろうと散文であろうと、専ら「同じ」を用いて「同じき」は用いないのが慣例となっていたのである。連体形に「同じき」を用いるのは主として男性的な漢文脈でのことであった。この事情はまた現代日本語にまでそのまま引き継がれているのだから面白い:「仰ぐは〈同じき〉理想の光」なる歌詞が(都の西北に位置する)某私立大学の校歌にあるが、その響きはいかにも男性的である。「仰ぐは〈おんなじ〉理想の光」と比べてみるとよくわかるだろうが、「同じ・おんなじ」は女字的で柔和/「同じき」は男字的で剛直という平安文物事情は、21世紀初頭の現代日本でも全く変わらないのだ。

■03)(007) ―形容詞「ク活用」語幹と「シク活用」終止形の文末詠嘆用法― 形容詞「ク活用」の語幹、及び「シク活用」の終止形を、文中の他の語句との関連 性が薄い独立的な形で、(多くの場合、直前に感動詞「**あな**」を置いたり直後に詠嘆 の終助詞「**や**」を従えたりしつつ)文末に置いて、その部分で文章を「断章」とし、 「形容詞」というよりも「感動詞」的な響きを帯びる用法がある:

「ク活用」語幹の例)「あな尊(あなたふと)」(=あぁ、有り難い)

「シク活用」終止形の例)「**やや、恐ろしや (やや、おそろしや)」**(=おお、怖い)

「シク活用」終止形の方はさしたる問題もなかろう:形も素直な上、現代日本語に も今なお消えやらぬ怨念の「**うらめしや**」みたいな表現が残っているからだ。

一方、「ク活用」語幹の方にはかなりの意外性がある。「**あなう**」だの「**あなと**」だのの変な語形を見た時、即座に「**あな憂 (し)** =おぉ、イヤだ」・「**あな疾 (し)** = う、速ッ!」へと(終止形末尾「**し**」を補って)変換する芸当は、常日頃の学習段階からしっかりとした心構えを作っておいた賢い受験生以外には困難な作業となるからだ。

・・・などと「**あなかしこ**(・・・**畏し**) = あぁ、大変だ」と言いたくなるような 脅し方をしたが、ものは考えようで、「こわ~・・・ 〈**怖 (し)** 〉」だの「さむ~・・・ 〈**寒 (し)** 〉」だの「ウザ~・・・ 〈**うざ (し)** 〉? 〈**うざった (し)** 〉? 〈**憂さ甚 (し)** : **うさいたし**〉?」だのが二言目には飛び出す現代若年層の言葉遣いはこの種の「ク活用 形容詞語幹感動詞用法」の語感との互換性高しだから、小うるさい警告なんて「**あなかま・・・〈囂 (し)** 〉=ったく、うるせぇなー!」的感じぃ~?とか何げに言ってみる。

■ 0 3) (0 0 8) —体言+形容詞「ク活用」・「シク活用」語幹+「み」による「原因・理由」用法—

●受験最重要形容詞特殊用法

上代に起源を持ち、中古以降も長く和歌の中で用いられ続けた特殊な(しかし入試 古文の観点から見て極めて重要な)「原因・理由」の相関表現がある。「名詞(A)+を +形容詞語幹+み」で「(A)が・・・なので」の意味を表わす定型句である:

「<瀬を早み>岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ」崇徳院(すとくゐん) 説明的に現代語訳すれば、「滝を下ってほとばしる水は、浅瀬の流れの速さゆえ、岩 に邪魔され分かれても、下れば一つの流れに戻る・・・そんな激しい滝川のように、 一時は別れて暮らしていても、いずれはあなたとまた逢おう、このまま一人でいる ものか、と、強く念じている私です。」となる和歌である。

<**瀬を早み**>は「浅瀬の流れが速いので」という「理由」を表わすものであるが、 理由を表わすためには通常、「**ゆゑに**」等の接続詞を用いねばならない;が、それで はあまりに散文的で、和歌の中では字数を空費するばかりの場違いな響きがある。

試しに、理由を表わすものとしては最短の接続詞「に」を用いても、「瀬の早きに」となる;主格格助詞「の」を思い切って省略し「瀬早きに」とする荒技を演じることも出来ぬではないが、「瀬を早み」に比較してかなり強引な響きがある・・・結局、優雅に響く上代語法が、散文世界では死滅した後も、長きに渡って和歌の中で用いられ続けることとなったわけである。

●助詞取り去っての「を」なし表現

このように「最小語数で原因・理由を表わす」特性こそがこの「名詞+を+形容詞 語幹+み」の生命線であったから、更なる語数節減のために「**を**」なしで用いる例も、 当然のごとく多用された:

「**<山深み>け近き鳥の音はせで物おそろしきふくろふの声」西行法師(さいぎゃうほふし)** (現代語訳)「山奥に生活している私の耳に聞こえてくるのは、親近感の湧く鳥たちの鳴き声 ではなくて、何やら無気味なフクロウの声」 ・・・この歌は、西行が、同じ歌僧の寂然法師(じゃくねんほふし)との贈答歌中で、「**山深み**」で始まる十連題として詠んだものの一つ・・・平安も終わり鎌倉期に移行せんとする時代には、「**を**」無しの「A+形容詞語幹+み」が、至極当然の語形として(五音の一句を形成するにはこれしかないでしょ?的に)認識されていたことを知ることのできる一例である。

●「を」'n'「み」の正体やいかに?

「**を**」の有/無まで含めて、上代に生まれた語法が長らく引き継がれた例として 最重要のこの相関表現は受験生として忘れてはならない(形容詞の語法としても 最重要の)ものである・・・が、その「**を**」や「**み**」の品詞&用法の厳密な把握は、 一般の大学受験生としてはさほど重要ではない。

それでも(知的好奇心旺盛な学習者専用に)一応述べておくならば、この「**を**」は「主格の格助詞」(主語<山>+**が**+述語<深い>の関係を表わす)との説もあれば、「語調を整えるだけの間投助詞」(<**山を深み**>→<**山深み**>の省略でも何ら意味が変わらないから)との主張もある。

一方、「み」の方の位置付けははっきりしない。「理由」を表わすものとみるならば、これは「接続助詞」か「格助詞」であるべきだが、文法上は単なる「接尾語」の扱いである。そうなるとこれは、「親しみ」だの「凄み」だのといった「形容詞を名詞化する成文」に近い感じになる。「瀬を早み→浅瀬の流れの〈速さ〉」や「山深み→山の〈奥深さ〉」といった「体言止め」にすることで、そこに「理由」の響きを宿らせようというもので、「この〈苦み〉!・・・だからビールはうまいのだッ」に近い感覚である・・・が、そうなると助詞の「を」は「所有格」として機能するのが妥当である・・・が、「瀬〈の〉早み・早さ/山〈の〉深み・深さ/ビール〈の〉苦み・苦さ」に於ける「の」に相当するような響きを「を」が有しているとは感じられず、上述した通り、「主格」とも「(かなり無意味に近い) 間投語」とも感じられる中途半端な「を」と「(名詞化成文としての) み」との取り合わせは、どうもあんまりしっくり来ない。

ひょっとしたら、「瀬**〈の〉早み/山〈の〉深み**」としたのでは後続部との関連性を断ち切るほどの独立性が生じてしまうので、これを嫌って、敢えて「**の**」を「**を**」に置き換えたのかもしれない。そうなると、「**を**」の位置付けは当然「間投助詞」であって「格助詞」でないことになる・・・が、この説にもいまひとつ説得力がない。

もしかしたら、上の説をやや発展させて「瀬**〈の~ぉ〉早み/山〈の~ぉ〉深み**」の「**の~ぉ**」が「**を**」に化けたのだ、との想像も、ありかもしれない・・・が、まぁ、いずれにせよ「**み**」については定かなことはわからぬので、想像の域を出ないのだが。

●さしたる用もなくて深みにはまるは、あしきわざ。

・・・などと、「**を**」「**み**」の意味についてはあれこれ想定可能だが、そこまで深く 考察する必要は受験生にはない;「**AをBみ**=AがBなので」を公式的に覚え込めば それで済む話である。そもそも学術的に定説が定まっていない以上、正解も一定せぬのだから入試でその語源学的事情が出題される道理もない;ともなれば、深入りしても無駄であろう?この種の事柄に想念を巡らす「頭の体操」も悪くはないが、深入りせずにほどほどでやめておく頭の柔らかさもないと、他にも色々やることが多い受験生活はとてもやってられないはずである(もう一、二年受験期間を積み足して勉強してもいいというなら話は別だが、そんな物好きな勤勉さ、世間はあまり尊敬してはくれない)。

■ 0 3) (0 0 9) —体言+形容詞「ク活用/シク活用」語幹+「み」+「す(為)/おもふ(思ふ)」の動詞用法—

「形容詞語幹+み」による名詞化表現を目的語とし、直後に「為(す)」や「思ふ(おもふ)」等の動詞を続けて、実質的に「1語の動詞」の役割を演じる連語を形成する用法がある。いずれも上代から平安初期にかけての古い用法で、中古の古文では一般的ではない:

「<うるはしみ>我が<思ふ>君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも」『万葉集』 二〇・四四五一・大伴家持(おほとものやかもち)

「**くうるはしみ>わがくおもふ>**」の部分は、「我が**くうるはしく>く思ふ>**」として解釈すべき内容を倒置形で表わしたもの;つまりこの**くうるはしみ**>は実質的に「形容詞連用形:**うるはしく/うるはしう**」に相当するのである。しかし語形から言えばこれは純然たる「名詞(**=麗しさ**)」であるから、直訳調で解釈すれば「**くその美しさ**>を私が愛しく思うあなたは、ナデシコの花のようだなぁと思いながらいくら眺めても見飽きることがない」となる。万葉の時代らしい、何とも素朴な歌である。

「梓弓ま弓槻弓年を経てわがせしがごとくうるはしみ><せ>よ」『伊勢物語』二四 (現代語訳)「アズサユ<u>ミ</u>・マユ<u>ミ</u>・ツキユ<u>ミ</u>等等等、いろんな弓があるけれど、長年私が そうしたように、新しい男にも君をウルハシ<u>ミ</u> (かわいがり) させるといい」

この歌では、「**<うるはしみ>+<す>**」は「**うるはしく+す/うるはしう+す**= 愛しい存在として扱う」であり、やはり「形容詞語幹+み」が「形容詞連用形相当」である。同音つながり以上の意味はない<<u>ミ・ミ・ミ・ミ</u>四連攻撃>はただの駄洒落。

この種の「形容詞連用形+す」が定型句として用いられた例も平安期には(数こそ少ないが)存在した。「かなしくす/かなしうす (=可愛がる)」や「かたじけなくす/かたじけなうす (=過分の恩恵に浴する)」など、用いられる形容詞は「対人関係に於ける心理語」に限定される点に注意したい。誰かに対する心情を何らかの行為に乗せて表わす表現であるから、「宝を**く多くす**>」とか「身を**く危ふくす**>」のような「形状語としての形容詞+す」による行動を表わす表現とは全く異質である。

■12)(003)—「古典連体詞一覧」—

・・・以下に掲げる「連体詞」は、直後に続く「名詞」に一定の意味を添える形容 詞的修飾語である。特に重要な品詞でもないが、数は少ないので一気に覚え込むに難 もあるまい(例によって**意味ごとに類型分け**したリストで示す)。

========

--《時間(WHEN)系の連体詞》--

あくる【明くる】(時を表す語の上に付いて)明けて翌・・・。

ありける【有りける】先程の。例の。以前の。

ありし【有りし・在りし】(1) いつぞやの。その昔の。 (2) (現存せぬ人・物について)

生前の。 (3) 先述の。例の。先の。

ありつる【有りつる・在りつる】先程の。例の。

いにし【往にし】過ぎ去った。去る・・・。

いぬる【往ぬる・去ぬる】過ぎ去った。去る・・・。このあいだの。

いんじ【往んじ】過ぎ去った。去る・・・。

くだんの【件の】(1)前述の。例の。あの。 (2)いつもの。毎度おなじみの。

さんぬる【去んぬる】過ぎ去った。去る・・・。先の。

はじめたる【初めたる・始めたる】最初の。初めての。

- 《程度・様態(HOW)系の連体詞》-

あらゆる【所有】ありとあらゆる。すべての。

ある【或】(人や物や場所などを漠然とさす語)とある。さる。某・・・。

いかな【如何な】(近世語) どんな (・・・でも)。たとえどんなに (・・・でも)。

おなじき【同じき】同一の。他ならぬその・・・。

さる【然る】(1)(前の内容を受けて)そのような。 (2)しかるべき。立派な。

・・・にふさわしい。 (3)(漠然と)とある。かくかくしかじかの。誰それとかいう。某・・・。ちうせい【小せい】(一説に、「中勢」という漢語由来ともいう)小さい。少々低めの。

とある【とある】とある。ちょっとした。ごくふつうの。なにげない。何ということもない。

一《価値判断を含む連体詞》—

あたら【惜】惜しむべき。せっかくの。

あったら【惜】惜しむべき。せっかくの。

あらぬ【あらぬ】(1)違った。別の。他の。 (2)思いがけない。意外な。異常な。 (3) とんでもない。望ましくない。不都合な。

いな【異な】変な。妙な。おかしな。思いもよらない。予想外の。

いはゆる【所謂】(1)世間一般にそう言われているところの。俗に言う。 (2)誰もが ご存じの。周知の。言わずと知れた。

きこゆる【聞こゆる】有名な。名高い。噂の。評判の。

きはめたる【極めたる】はなはだしい。非常な。この上もない。

ここな【ここな】ここにある。ここにいる。このあたりの。

さしたる【さしたる】(1)(下に打消の語を伴って)たいした・・・でもない。 (2)心に強く期するものがある。格別な。

させる【させる】(多く下に打消の語を伴って)これというほどの。たいした。さしたる。

そこな【其処な】(多く、人を表す語の上に付いて)そこにいる。そんじょそこいらの。

そんぢゃう【そんぢゃう】(「その」「それ」「そこ」「たれ」などの上につけて)(内容を不明確に言う語)誰それの。どこそこの。

なでふ【なでふ】(1)(疑問の意で)なんという名の。どのような。どんな。 (2)(反語・

否定表現を伴って) どれ程の (・・・でもない)。 たいした (・・・でもない)。 (3) (具体名を伏せて) これこれという。何々という。何とかいう名の。

なんでふ【何でふ】(多く打消の語を伴い、軽んじて)なんという。どういう。どうという。

- ■12)(004)—「古典感動詞一覧」—
- ・・・以下に「感動詞」の、その発話の契機となるもの+訳し方の一覧表を(例によって**類型別リストの形でグループ分け**して)示す。
- ・・・およそこの「感動詞」ほど根源的なコトバはない。ヒト(きゃ!)だろうがサル(ウキャッ!)だろうがイヌ(ウワン!)・ネコ(ンニャん!)だろうが、内面の感情が口をついて出る自然な音はみな「感動詞」なのだ。それだけにこの純朴な品詞に属する言葉たちはみな動物的に単純である。これからペットを飼おうという人や、お互い pet 並みの親愛度で馴れ合う相手との親密な言語外コミュニケーションを望む人は、以下の non-verval(言語的ならざる)音声群ぐらいは軽~く会得しておいた方が(人間的にも動物的にも)いいだろう。
- ・・・感性豊かな(&箸が転げただけでも笑い転げられる幸せな)人生の時期にある高校生の諸君なら、気の置けぬ仲間どうし、「感動詞」の内容相応と思われる「擬音」の品評会などしてみるとよいかもしれない。同じ【えいえい】の表わす「1)ワラい」・「2)リキみ」・「3)イカり」を、それぞれに異なる「ei,ei」の音で表わしてみて、「それは違うだろー?」だの「ぁ、それそれその感じ!」だのとやってみるとよい・・・他愛もないお遊びだが、そうして遊べる相手がいてくれたら、コミュニケーションの原初的な姿を感じられるこうした遊びも、わるくない・・・。

========

- 《反射的叫声(OUCH!)系の感動詞》-

あたあた【熱熱】(熱いものに触れての悲鳴)あちゃ。あっちぃー。あつうー。

あな【あな】(喜怒哀楽。多く、下に形容詞語幹を伴う)あぁ。もう。実に。とても。

あなに【あなに】(強い感動)ああっ。

あなや【あなや】(強い感動・驚嘆)あらっ。うわっ。まぁっ。

あは【あは】(感動・驚嘆)おやまあ。あわつ。

あはや【あはや】(1)(驚嘆・危険に接しての叫声)あぁっ! (2)(安堵の溜息)ほっ・・・。

あはれ【あはれ】(喜怒哀楽)あぁ・・・あれ。

あはれあはれ【あはれあはれ】(詠嘆)あぁ・・・あれ、ごらんなさいな。

あら【あら】(感動・驚嘆)あらっ。うっ。おやっ。

ここな【ここな】(驚嘆・意外) おやおや。これは。なんとまぁ。

さてさて【然て然て】(驚嘆・唖然)これはこれは。

すはや【すはや】(驚嘆・意外)あっ。うはっ。

はれ【はれ】(1)(感嘆・唖然)あれまぁ。 (2)(歌謡のはやし言葉)やれ、それ、ほれ、はれ。

- 《思い付き(OHYEAH)系の感動詞》-

おいや【おいや】(思い付き) おぉ、そうそう。あ、そう言ゃあ。うん、そうだ。

そよ【其よ】(思い付き・相槌) そうだ。うん。そうよそうよ。

そよそよ【そよそよ】(思い付き・相槌) そうそう。

そよや【其よや】(思い付き・相槌) ぁ、そぉや。そうそう。そぉゃね~。

それそれ【其れ其れ】(1)(注意喚起・催促)そらそら。それ。 (2)(賛同・思い付き)

そうそう。 (3) (はやしことば) ぁ、それそれ。

や【や】(1)(呼びかけ)やい。 (2)(驚嘆・思い付き)あっ。 (3)(掛け声・はやし言葉) やっ!よっ!

やや【やや】(1)(呼びかけ)もしもし。 (2)(驚嘆・思い付き)あれまぁ。そうそう。

やれ【やれ】(1)(呼びかけ・注意喚起)やあ。 (2)(思い付き・意外な事態への遭遇) おやっ!?ぁ、そうだ。やれやれ。

をい【をい】(1)(驚嘆・思い付き)おや。ぁ、ねぇ。 (2)(返答・納得・承諾)おお。 (3) (呼びかけ) おい。

— 《呼び掛け(HEY!)系の感動詞》—

あ【あ】(1)(感動・驚嘆・慨嘆)ああ。 (2)(呼びかけ)おい。 (3)(応答)はい。 ああ【ああ】(1)(感動・驚嘆・慨嘆)ああ。 (2)(呼びかけ)おい。 (3)(応答) はい。

いかに【如何に】(1)(呼びかけ)おい。 (2)(質問)どんなもんかね?

いなや【否や】(1)(驚嘆)これは・・・。 (2)(質問)どんなもんかね? (3) (打消) いやもう。

いや【いや】(1)(驚嘆・嘆息)いやはや。 (2)(呼び掛け)やあ。 (3)(否定) いいえ。

えいえい【えいえい】(1)(笑い)あはは。 (2)(力み)えいやっ! (3)(呼びかけ) やいやい。

おいおい【おいおい】(1)(泣く声)おいおい。 (2)(承諾・呼びかけ)へいへい。 くは【くは】(注意喚起)ほれほれ。

くはや【くはや】(1)(驚嘆) うわっ。 (2)(注意喚起・呼びかけ) そらそら。

これ【此・是・之】(注意喚起・呼びかけ)これこれ。

すは【すは】(1)(注意喚起) そら。 (2)(驚嘆・意外) あっ。

そそ【そそ】(注意喚起) それそれ。

そそや【そそや】(注意喚起・驚嘆) それそれ。おやっ。

それ【それ】(注意喚起・予想的中)ほれ。

なう【なう】(1)(呼びかけ)なぁ。 (2)(感動)あぁー。

なうなう【なうなう】(1)(呼びかけ)ねぇねぇ。 (2)(感動)ああ、ああ。

まうし【申し】(呼びかけ)もしもし。

やい【やい】(見下した呼びかけ)おいっ。やいっ。

やうやう【やうやう】(呼びかけ) やあやあ。

やうれ【やうれ】(見下した呼びかけ)おいこら。やいこら。

やよ【やよ】(1)(呼びかけ)やあ。 (2)(はやし言葉)やあれ。

http://zubaraie.com - 228 - see also 古文単語千五百マスタリング・ウェポン

よや【よや】(強い呼びかけ) おぉーい!

--《話題転換(BY THE WAY)系の感動詞》-

さて【然て・扨】(1)(発話) それにしてもまあ。 (2)(即答回避)はてさて、どうだか。

(3) (催促)で?

さては【然ては】(納得) ぁ、そうか。

さても【然ても】(発話)それにしてもまあ。

まこと【真・実・誠】(思い付き) そういえば。

まことや【真や・実や・誠や】(思い付き) そういえば。

--《勧誘(LET'S!)系の感動詞》--

いざ【いざ】(勧誘・催促) さあ。

いざうれ【いざうれ】(勧誘・催促) さあさぁ。

いざや【いざや】(勧誘・発情) さぁ、ほら。よっしゃ。

いづら【何ら】(1)(予想外)あれ? (2)(婉曲な勧誘)いかが?

いで【いで】(1)(勧誘・決心)さあ。 (2)(叱責)こら! (3)(軽い否定)いいえ。

(4) (感動) おやまあ。

なほなほ【猶猶・尚尚】(強引な勧誘)ぜひぜひ。

なんと【何と】(賛同の勧誘) どうでしょうか。

--《応諾(YES)系の感動詞》-

いかさま【如何様】(相手の発言への肯定)いかにも。

えい【えい】(1)(返答)は一い。 (2)(気合い)えいっ。 (3)(驚嘆・怒声)このぉっ!

お【応】(応答・承諾) はつ。

おい【おい】(1)(驚嘆・気付き)おお。 (2)(返答・納得・承諾)おう。 (3)

(呼びかけ)もし。 おう【おう】(1)(応答・承諾)はい。 (2)(感動・驚嘆)おお。 (3)(呼びかけ)

おい。

おうおう【おうおう】(1)(叫声)わあわあ。 (2)(承諾・相槌)うんうん。

されば【然れば】(1)(驚嘆・意外)いったい。

(2) (応答) そう、そのことですがね。

しかしか【然然】(相槌) そうそう。

しかじか【然然】(相槌) そうそう。

せ【諾】(肯定・承諾)はい。

なかなか【なかなか】(相手の発言の肯定。狂言などで用いる) いかにも。

む【む】(1)(承諾)うむ。 (2)(応答)はいはい。

よし【よし】(相手の発言への承認・決意・命令)よしつ。

を【を】(返事・承諾)はい。

をう【をう】(1)(応答・承諾)はい。 (2)(感動・驚嘆)おお。 (3)(呼びかけ)おい。

http://zubaraie.com - 229 - see also 古文単語千五百マスタリング・ウェポン

をうをう【をうをう】(1)(叫声)わあわあ。 (2)(承諾・相槌)うんうん。

- 《拒絶 (NO) 系の感動詞》-あらず【あらず】(相手の発言の打消) 否、それはちがう。 いさ【いさ】(1)(即答回避)さぁ、ええっと・・・。 (2)(相手の発言への否定的応答) さぁ、それはどうでしょうかねぇ。 いさとよ【いさとよ】(即答回避) さぁねぇ。 いさや【いさや】(即答回避) さぁ、どうでしょうかねぇ。 いでや【いでや】(1)(感動・詠嘆)いやもう。 (2)(否定・反発)いやいや。 いな【否】(否定・拒絶)いいえ。 いやいや【否否】(打消)いえいえ。 なに【何】(1)(確認) え、何ですって? (2)(詰問)何だと?! なにか【何か】(既存の記述や相手の発言への婉曲な反論)いやいゃ、なかなかどうして。 なにと【何と】(1)(確認)何だって? (2)(持ちかけ)どうだい。 なんでふ【何でふ】(反論・詰問)何ということを! --《賛嘆 (BEAUTIFUL!) 系の感動詞》--あっぱれ【天晴れ】(1)(賛美·感動)おお。 (2)(賞賛)お見事。 ばんぜい【万歳】(慶事・長久祈願) バンザイ! — 《落胆 (OH NO!)・やけくそ (WHO CARES!) 系の感動詞》— いでいで【いでいで】(溜息) いやはや、なんとも・・・。 さはれ【然はれ】(捨て鉢)ええい、もう、どうでもいいやっ! したり【したり】(1)(快哉)よっしゃ!してやったり! (2)(後悔。多く「これはしたり」 の形を取る)うっ、しまった!あぁ、やっちまったか・・・。 しゑや【しゑや】(上代)(感動・嘆息・断念・決意など)あぁ。はぁ。よしっ。ままよ。 ゆみやはちまん【弓矢八幡】(後悔)残念無念。 --《罵倒(SHIT!)系の感動詞》--おのれ【己】(罵倒) てめぇ!んなろぉ!この野郎!こん畜生! - 《誓願(BY GOD)系の感動詞》-くされ【腐れ】(誓約)(口が腐っても約束を破らないの意)断じて。 なむさんぽう【南無三宝】(神頼み)あぁ、なにとぞ神様! - 《掛け声・囃し言葉 (HURRAY!)・挨拶 (HELLO!) 系の定型的感動詞》-えさまさ【えさまさ】(物を動かす際の力み声)やっしょ、まかしょっ。えっさ、こらさっ。

おし【おし】(貴人の通行・儀式に際し、先払い役=前駆(せんぐ)が発する注意喚起の声) 「おー、しー」。

かへらや【かへらや】(はやしことば)「帰らんや→もうお帰り」。

そ【そ】(馬を追う声)し一いつ。

とうざい【東西】(芝居・相撲での観客への口上・注意喚起)とざい、と一ざい。隅から隅まで、 ずずずぃーっと。

ものまう【物申】(訪問)ごめんくださ~い。たのも一う。

やっとな【やっとな】(かけ声)よいしょっ、やっとこしょっ。

よりに【よりに】(はやし言葉)よりに、よりに。ぁ、よい・よい・よい・よい。

をし【をし】(貴人の通行・儀式に際し、先払い役=前駆(せんぐ)が発する注意喚起の声。 また、天皇から杯を受ける際の儀礼の語)「おー、しー」。

わし【わし】(上代歌謡のはやし言葉) わっしょい。

― 《お別れ (GOOD BY) 系の感動詞》 —

さらば【然らば】(別れのあいさつ)しからば、ごめん。それでは、これにて、さようなら。

- ■12)(005)—「古典接続詞一覧」—
- ・・・現代文でも古文でも英語でも、「接続詞」は、前後の文節の関係を規定する「つなぎ語」 として意味の読み解きに極めて重要なターニングポイント(分岐点)を示す語であるから、 (中古に限定せず) まとめて以下に掲げておく。
- ・・・文意の流れをそのまま後続部へと引き継ぐのか(「順接」)あるいは逆転させるのか (「逆接」)、あるいは順行も逆流も1語でこなすやつなのか、そういった観点から**類型別に** グループ分けして示すので、効率的で的確な古文読みに役立ててほしい。

========

— 《発話 (... Well, ~) 系の接続詞》 —

いで【いで】〈発話〉(改めて話を始める際に) ぁ、さて。そもそも。だいたいにおいて。 おほかた【大方】〈発話〉(新しい話題に移る際に)ところで。だいたい。およそ。そもそも。 ここに【此に・爰に】〈発話〉(言い出しや話題の転換に)そこで。んでね。

さても【然ても】〈発話〉それにしても。それはそうと。

さりとは【然りとは】(1)〈様態〉そうだとは。 (2)〈意外〉何と、これはまぁ。

さるほどに【然る程に】(1)〈経時〉そうこうしているうちに。 (2)〈発話〉ぁ、さて、

とかくするうちに。 (3) (感動) なんとまぁ。

そも【其も】〈発話〉そもそも。それにしてもまぁ。

そもそも【抑】〈発話〉そもそも。まず第一に。

それ【夫】〈発話〉そもそもの話が。だいたいにおいて。

ときに【時に】〈発話〉さて。ところで。時に。それはそうと。

— 《順接 (... and ~) &発話 (... Well, ~) 系の接続詞》—

されば【然れば】(1)〈順接〉そういうわけだから。 (2)〈発話〉ぁ、さて。

— 《順接 (... and ~) 系の接続詞》 —

しかうして【而して・然して】〈順接〉(漢文訓読体で)そうして。 しかして【而して・然して】〈順接〉(漢文訓読体で)そうして。

— 《逆接 (... but ~) &発話 (... Well, ~) 系の接続詞》 —

さるを【然るを】(1)〈逆接〉それなのに。 (2)〈発話〉ところで。

- 《逆接 (... but ~) 系の接続詞》-

かかれど【斯かれど】〈逆接〉こういうことではあるけれど。 かかれども【斯かれども】〈逆接〉こういうことではあるけれど。

さながら【然ながら・宛ら】〈逆接〉それはそうだが、しかし。

さはれ【然はれ】〈逆接〉ではあろうけど、しかし。

さりけれど【然りけれど】〈逆接〉そうではあったけれど。

さりとて【然りとて】〈逆接〉だからといって。

さりとも【然りとも】〈逆接〉そうはいっても。

さりながら【然りながら】〈逆接〉そうではあるが。

さるに【然るに】〈逆接〉それなのに。

さるにては【然るにては】〈逆接〉それにつけても。

さるにても【然るにても】〈逆接〉それにつけても。

されど【然れど】〈逆接〉そうではあるが、しかし。

されども【然れども】〈逆接〉しかしながら。

しかしながら【然しながら】〈逆接〉そうではあるが。しかし。

しかも【然も】〈逆接〉それでいてなお。

しかるに【然るに】〈逆接〉そうであるというのに。

しかれども【然れども】〈逆接〉そうではあるが、しかし。

なれども【なれども】〈逆接〉ではあるが。

─ 《順接 (... and ~) &逆接 (... but ~) 系双方にまたがる接続詞》 —

さて【然て・扨】(1)〈順接〉(前の内容を受けて)そこで。 (2)〈逆接〉(前の内容の 逆接を述べたり、話題を転換したりして)そうはいうものの。ところで。

さるは【然るは】(1)〈順接〉それというのも。 (2)〈逆接〉そうではあるが。

しかるを【然るを】(1)〈逆接〉そうであるというのに。 (2)〈順接〉そういう状態で。

-《逆接 (... but \sim) 系 $+\alpha$ の接続詞》 -

さらば【然らば】(1)〈承前〉そういうことならば。 (2)〈逆接〉(下に打消の語を伴っ て) それなのに。

ただし【但し】(1)〈逆接〉とはいうものの。 (2)〈推量・疑問の付加〉ひょっと

したら・・・か? (3) (選択) あるいは。

- 《理由 (... so ~) 系の接続詞》-

いじゃう【以上・已上】(1) 〈結末〉その結果。 (2) 〈合計〉合わせて。

かかれば【斯かれば】〈理由〉こういうわけで。

かくして【斯くして】〈理由〉こうして。

かくて【斯くて】〈理由〉さてそういわけで。

かるがゆゑに【かるが故に】〈理由〉であるから。

かれ【故】(1)(上代語)〈理由〉それゆえに。 (2)(上代語)〈事後〉それから。

さりければ【然りければ】〈理由〉そういうわけでしたから。

さるから【然るから】〈理由〉そういうわけだから。

さるにより【然るにより】〈理由〉それゆえに。

しかるあひだ【然る間】(1)〈経時〉そのうちに。やがて。 (2)〈理由〉そんなわけで。

しかれば【然れば】(1)〈承前〉(漢文訓読語。和文の「されば」に相当)そういう次第で。 (2)〈発話〉さて。時に。

そゑに【其故に】〈理由〉それゆえに。

てへれば【者】〈理由〉(・・・「と言へれば」より)という次第で。

よって【因って・依って・仍って】〈理由〉したがって。

よりて【因りて・依りて・仍りて】〈理由〉したがって。

— 《累加 (... Furthermore ~) 系の接続詞》—

および【及び】〈累加〉そしてまた。

かつ【且つ】〈累加〉その上また。

さては【然ては】(1)〈事後〉それから。 (2)〈累加〉その上また。 (3)〈承前〉 それならば。

さてまた【然て又】〈累加〉それからまた。

— 《累加(... Furthermore ~)系+αの接続詞》—

それに【それに】(1)〈逆接〉それなのに。 (2)〈累加〉その上。 (3)〈理由〉それによって。 また【又・復・亦】(1)〈並列〉同時に。 (2)〈累加〉その上さらに。 (3)〈選択〉 あるいは。 (4)〈発話〉さて。

— 《選択 (... or ~) 系の接続詞》—

あるいは【或いは】〈選択〉または。もしくは。

あるは【或は】〈選択〉または。あるいは。

ないし【乃至】(1)〈中略〉(数を列挙する際に、初めと終わりのみ提示し、中間部を略す表現)・・・から~(まで)。 (2)〈選択〉あるいはまた。

はた【将】〈選択〉(漢文訓読調の文章で)それとも。

もしは【若しは】〈選択〉もしくは。

— 《承前 (... then ~) 系の接続詞》 —

さは【然は】〈承前〉それならば。

さば【然ば】〈承前〉それならば。

しからば【然らば】〈承前〉それなら。

して【して】〈催促〉(多く下に疑問の表現を伴って)それで?それからどうした?だから? すなはち【即ち・乃ち・則ち】(1)〈換言〉言いかえれば。 (2)〈承前〉そんなわけで。

(3) 〈恒常条件〉・・・ならば、その時には常に~。

・・・おつかれさまでした・・・

…「=古文の理=」本編解説部+巻末付録、これにて、本当に、一巻の終り

(・・・とか言いつつ実は更になお本書最末尾には「理解度確認&暗記促進用穴埋め問題」 の余禄(+「暗記するに値する助詞のみ例文つき厳選リスト」)がデーンと控えてるけど・・・ その前にまず、優雅なる「和歌」の話など、いかが?)

歌よみ心得

一前書き一

●今の世の人、誰そ歌よまんや?

和歌の嗜みはもはや教養人の必須要件ではない。古典的なギリシア・ローマ神話や 聖書の物語を知らぬ人間が「教養人」はおろか「西洋人」とすら認めてもらえぬ海外 の事情に比すれば、「日本人であること」は地政学的偶然のみを前提とする実に安易な 自然的(=生得的・宿命的・排他的・非意志的・惰性的・・・) 営みに過ぎぬものらしい。

そんな現代日本にも、幸か不幸か、和歌の最低限の約束事を知らねば社会的苦境に立たされる人々がいる — 大学入試古文問題と格闘する受験生たちである。落第するのが嫌ならば、彼らは「古典文法」と「古文単語」に加えて、「和歌のいろは」をも学ばねばならぬ・・・が、所詮それは「文芸的教養のため」ではなく「心を豊かにするため」でもなく、「一生に一度の試験の場を無難に切り抜けるため」でしかないことを認めねばならぬ。

●「歌、歌」と、うたた書く本、うたてあり

そんな現状なのだから、その道の好事家による同様の好き者向けの冗長なる情調に溢れた「文芸指南書」など、受験生にとっては迷惑極まる不愉快な別世界の豪華本に過ぎない。自分がやりたいこともせずに必死の苦役に耐えているのを尻目に、悠長な言葉のままごと遊びにうつつを抜かしている lotus-eaters (時のない国の安逸遊民達)の書き散らした無駄の多い文章など、限られた受験勉強の時間と労力と自らの忍耐力とを無為に空費するだけの「てんでわかってない邪魔者」であり、見るだに不愉快な見当違いの有り難迷惑にほかならぬ、とさえ(受験生の本音としては)言えるだろう。

●「学匠の本」ならぬ「学生の本」なれば「楽勝の本」たるこそ本意なれ

そうした受験生の切迫した現実を今でも体感的に思い出せる程度の真剣で欲張りな受験生活をかつて送ったことのある著者として、そんな彼らの苦境を軽減するための大学入試対策教材作りを生業とする教育者として、ここから先の「歌よみ心得」は受験生本位に書いてある。「短歌の勧め」の本ではない;「最短距離で合格へと進め!」を合い言葉に古文入試の伴走者を務める指導者からの「和歌の世界はこう乗り切れ」の実技指導である。「受験生のための和歌の本」として本物の本を書いたつもりである。

「この程度の事柄さえわかっておれば和歌に関しては問題ない」という事項を細大漏らさず記してあるが、要領の良い受験生なら4~5日で走りきれる世界である・・・が、この程度の事柄さえわからぬままに「歌読み」(果ては「歌詠み」)気取る日本人もまた、多いのである・・・から、受験生諸君よ、恐れることはない:和歌の世界は、諸君が思うほど、深遠にして難解な神秘の魔境ではない:安心して分け入りたまえ。

筆者として唯一恐れるのは、自ら書きながら愉しみ過ぎる傾向を、どこまで自分は 圧殺し切れたか、ということである。歌を読み、かつ、詠むのが趣味の悠長な筆者の 数寄心に、好きな彼/彼女と逢う間も惜しんでとりあえず大学の門まで辿り着かねば ならぬと鬱々としてひた屋ごもりの受験勉強に明け暮れる若い諸君の敏感な感性が、 (受験生的には)無用な刺激を受けて(現代世界では)ほとんど役立たずの詩的文芸の 小宇宙に、無益にふわふわ漂い遊ぶことになったなら・・・・(ふふっ) ごめんなさい<()>

■章00)『和歌概説』■

「和歌」の中身に入る前に、それを取り巻く外形的・社会的・歴史的事情について、 概括論的に書いてみる。歌など読(詠)まぬ日本人でも、この程度の事柄は知らねば 人前で恥をかく、という程度の雑学知識として読んでもらえればそれでよい。

■00)(001) — 「短歌」の形式—

♪ 「短歌 (たんか)」は全三十一文字 (五・七・五・七・七) から成る極めて短い 定型詩で、その文字数から「みそひともじ」の異称でも呼ばれる。

♪ 「短歌」は<五句(五・七・五・七・七) >・<二要素(五・七・五=**上の句** or 本/七・七=**下の句** or 末) >から成る: *下の()は和泉式部(いづみしきぶ)の歌の例*

●発端部(上の句 or 本) = 五+七+五(全十七文字)

♪第一句(初句) = 五(あらざらむ)+第二句=七(このよのはての)+第三句=五(おもひでに)

●後続部(下の句 or 末) = 七+七(全十四文字)

第四句=七(いまひとたびの)+第五句(結句)=七(あふこともがな)

♪発端部の十七文字をまとめて「**上の句**(かみのく)」または「本(もと)」と呼び、後続部の十四文字をまとめて「**下の句**(しものく)」または「末(すゑ)」と呼ぶ。

♪本と末の二つの要素を別人が作って継ぎ足す掛け合い芸「連歌 (れんが)」では、 発端十七文字を「発句 (ほく・ほっく)」と呼び、後続十四文字を「挙句 (あげく)」 と呼ぶ。滑稽さ (=俳諧趣味) を持ち味とする場合は特に「俳諧連歌 (はいかいれんが)」 と呼ばれる。お遊び芸の「連歌」は、本式の「和歌」には含めないのが通例である。

♪「連歌」の「発句」の十七文字のみを独立させて「**挙句**」抜きで成立させれば「**俳句**」、 お遊びの色彩が濃ければ「川柳」となる。これらもやはり「和歌」には含めない。

♪五つの句(五七五七七)から成る「短歌」の全体は「一首(いっしゅ)」と呼ばれる。 一方、「俳句」の全体(五+七+五=十七文字)は「一句(いっく)」である。

■00)(002) — 「和歌」と「短歌」—

●「和歌」

♪「和歌(わか)」とは、中国伝来の漢語による「唐歌(からうた)」(=漢詩)と対照した日本固有の詩文の名称で、「大和歌・倭歌(やまとうた)」・「敷島の道(しきしまのみち)」の異称もあり、単に「歌(うた)」と言えば普通は「和歌」を指す。

♪奈良時代までは「長歌(ちょうか)」・「旋頭歌(せどうか)」・「片歌(かたうた)」など様々な形式の和歌が存在したが、平安前期の『古今和歌集』(905 年)以降は「短歌」

以外の形式は衰退し、「和歌」と言えば実質的に「短歌」を指すのが通例となった。

♪和歌の座興芸として発達した「連歌」や「俳句」・「川柳」、器楽の伴奏や舞踏と切り離せない「歌謡(かよう)・謡い(うたい)」は、「和歌」とは別の文芸扱いである。

●「短歌」(たんか)

♪元来は「**長歌**」と区分するための呼び名だが、平安時代には「**長歌**」も「**旋頭歌**」も衰退して専ら「**短歌**」が詠まれたため、「**和歌**」といえば「**短歌**」を指すのが通例。

●「長歌」(ちょうか、ながうた)

♪古い和歌の形式で、「五音・七音」の句を三度以上繰り返した末に「七音」の句で締める。これと併置する形で、直後に「短歌」を詠み添える場合が多かった。

(長歌)《天地(あめつち)の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天(あま) の原 振り放(さ)け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行き はばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺(たかね)は》 『万葉集』三・三一七・長歌・山部赤人(やまべのあかひと)

(現代語訳) 天地が分れて以来、神威の宿る高く尊い駿河の国の富士山の高嶺を、空の彼方に振り向いて見れば、あまりの高峰に日の光も月明かりも隠れ、空行く雲も行く手をはばまれ、冬に限らず季節を選ばずその頂上には雪が降っていたりする。あぁ、いつまでも人から人へ、語り継いで行きたいものだ、この富士の高嶺の見事さを。

(長歌直後の短歌)《田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽(ふじ)の高嶺に雪は降りける》

(現代語訳) 駿河湾のほとり、田子の浦の松林の廻廊を抜け、眺望の開けた海辺に出て振り仰ぐ、遙か彼方の霊峰富士。妙なる白を帯びたその山頂には、もう、雪がしんしんと降っているのだなあ。

●「旋頭歌」(せどうか)

♪「頭を旋らす(あたまをめぐらす)歌」の意を持つ古い形式の和歌で、「五・七・七」 を二度繰り返す六句構成(三八文字)を基本とする(五・七・五+五・七・七の六句 =三六文字構成となるものもある)。「双本歌(そうほんか)」の別名もある。

《白玉は人に知らえず知らずともよし知らずとも我し知れらば知らずともよし》『万葉集』六・一〇 一八・旋頭歌・元興寺の僧

(現代語訳)素晴らしき真珠も、その真価を誰にも知ってもらえない。が、知らなくてもよい。 自分自身さえ知っていれば、他人に知られずとも、それでよい。

●「片歌」(かたうた)

♪古い和歌の形式で、「五七七」のみの三句・十九文字構成。「五・七・七」を二度繰り返す「**旋頭歌**」(双本歌)の「片方だけの歌」の意味だが、奈良時代初期には衰退していたようで、『万葉集』(759 年頃)にも全く収録されていない。

■00)(003) — 「和歌」の隆盛と「漢詩」の衰退—

●漢詩文の時代

♪日本は古来、政治も文化も文字(=漢字)も、中国のそれを模倣し続けて来た。 特に、中古の日本の朝廷では公文書が漢文表記だったため、漢語・漢詩文の素養は官僚の知的・社会的優越性の象徴として重視された。この事情を反映して、平安前期に至るまで、朝廷の文化事業として編纂される「勅撰集」の主役は「唐歌(からうた=漢詩文)」であり、日本固有の「大和歌(やまとうた=和歌)」は傍流の扱いであった。

●和風文芸の時代

♪その「漢高和低」の潮流の転機となったのが、平安前期の905年に世に出た初の全編和歌による勅撰集『古今和歌集』である。この集の成立を促したのは、時の政治上の最大権威者の藤原時平(ふぢはらのときひら)であり、その編集作業に携わった編者の四人、紀貫之(きのつらゆき)・紀友則(きのとものり)・壬生忠岑(みぶのただみね)・凡河内躬恒(おほしかふちのみつね)は、いずれも優れた歌人であったが、朝廷の出世コースとは無縁の下級役人ばかりであった。

●官僚主導政治の終わり

♪時を同じくして、日本の官僚史上最大の出世頭にして日本史上最強の知的エリート(=現代受験生たちからも「学問の神様・天神様」として拝まれている)菅原道真(すがはらのみちざね)主導による、中央集権国家体制への復古的政治改革が進展しており、それが時平ら(主に藤原氏を中心とする)有力貴族の既得権益を脅かすものとして、謀略によって葬り去られたことを思い起こすと、「実力派官僚=漢籍派の巨頭」たる道真の失脚+漢詩文の衰退と、『古今和歌集』に始まる和歌の躍進+藤原摂関政治の定着は、偶然の一致以上の相関関係を有するものと見るべきであろう。時平は、「漢詩と実力派官僚」の社会的ステータスを葬り去るための政治的策略として『古今和歌集』を用いて「和歌」を盛り立て、その編纂には「朝廷では物の数にも入らず、改革派とまるで無縁の下級役人連」を用いた、との言い方が成立するのである。

●「歌徳説話」の嘘

♪この日本文芸史上屈指の主役交代劇に功のあった『古今集』編者たちが、その実績を認められてその後大いなる出世を遂げたか・・・と言えばそんなことは全くなく、彼らの官位は終生低いままであった。中心的編者の紀貫之などは、和歌の隆盛に同じく貢献した『伊勢物語』(927年頃)の作者である可能性もあり、かつまたあの有名な女性仮託仮名文学『土佐日記』(935年頃)をも著して漢詩に対する和歌の優位を決定付けた(&その後の平安女流日記文学への道をも開いた)日本文学史上最高の功労者である

にもかかわらず、生前の最終官位は「従五位上」と低いまま(享年80歳)。そもそも例の『土佐日記』は、六十代後半という高齢になってから、住み慣れた京都を離れ、 荒海を渡って土佐(現在の高知県)に赴任しての地方官暮らしの任期の果てに書かれた ものなのだ。

♪要するに、「歌の実力が身を助け、出世する」という「歌徳説話」など、中央政界に於ける官位栄達レベルでは全くのおとぎ話でしかなかったわけである。「よい歌を詠む」というだけで、「男に見初められて女性が幸せを掴む」とか、「社会の底辺を這っていた人が名のある貴族に雇われる」とか、「歌」の効用はその次元止まりで、それ以上のものではなかったのだ。

♪付言すれば、「歌徳説話」が横行するのは鎌倉時代以降の説話(『宇治拾遺物語』等)の中での話である。和歌も貴族社会も既に現実世界では衰退し、「雅びなる平安の世の思い出」となりつつあった時代に、「下々の者が成り上がるための手段・効用」として、現世利益重視の書き手の勝手な想像の中で「芸は身を助ける」型のネタとして持ち出されただけの代物なのだから、あだや鵜呑みにはせぬことである。本物の貴族世界では、和歌は「必須の嗜み」ではあっても「必殺の決め手」ではなかったのだ。

●和歌と漢詩の社会的効用

♪もっとも、和歌の贈答が貴族階層の優雅な嗜みとして定着した『古今集』以降の平安期には、男女の恋愛に付き物の恋文のやりとりに「歌」は小粋な小道具として必須の存在だったから、洒落た和歌一つ詠めぬ男女は、社会的に困った立場になったことだけは事実である。そうした無粋を避けるべく、貴人もそれに見初められることを夢見る女性たちもみな、せっせと歌詠みの修行には余念がなく、自身に才能がないと悟った貴人はまた、歌詠み名人の従者を雇ってはその代詠により身の面目を保ったものである。

♪一方、漢詩文は急激に衰退したとはいえ、朝廷の高位高官の間ではなお漢籍の知識は「知的エリートの証し」であり続けた。非主流文芸として普及度が低下した分だけ、排他的特権階層の知的アクセサリーとしての地位が逆説的に高まったとも言える。

♪その政治的エリート男子の象徴たる「知る人ぞ知る」漢籍の嗜みを、よりにもよって「女だてらに」有する希有なる存在として、平安中期、朝廷の男たちから持て囃され、日本初の「売れっ子作家」となったのがあの『源氏物語』の紫式部であり、彼女と同時代(一条天皇時代の紀元1000年前後)の女流文学者たちなのである。が、逆に言えば、「女が、自らの知性を誇示して有力貴族に目をかけてもらうための出世手段」にまで成り下がっていたのが、平安中期に於ける「漢詩文」である、との見立てもまた可能なわけだ。

♪いずれにせよ、日本の漢詩文は、あの菅原道真が醍醐天皇に献じた全作自作の漢詩 (468 首) /漢文 (159 編) 私家集『菅家文草』(くゎんけもんざふ:900 年成立) を 以てその頂点を極めて以降、衰微の一途を辿ったのである。道真が左遷先の太宰府で 失意の生涯を閉じた直後の903 年に出た漢詩文集『菅家後集』(くゎんけごしふ) と、その2年後の905年に出た『古今和歌集』との間には、日本文芸史上最も顕著な分水嶺が横たわっていたのである。

■00)(004) — 「短歌」と「連歌」そして「俳句」 —

●「心」と「躰」

♪ 「短歌」を作る者が、必ずしもみな詩情に先導される形で詩を作るとは限らない。 気の利いた文句を思い付いたからそれを生かすために三十一文字をでっち上げよう、 という作歌事情を有する和歌も、極めて多いのである。

♪人を作詩に駆り立てる「詩情」のことを、和歌の世界では「**心** (しん・こころ)」と呼び、文学的「美」を備え音感的訴求力を持つ「形式」たる「**歌体** (かたい)」・「**躰** (たい・てい)」と対照する形で用いる。

●「腰折れ歌」

♪詩情が形式美を圧倒する「躰より心」の歌もあれば、形式や音感や文言の美しさや着想の面白味が主役の「心より躰」の歌もある。そうして、「躰」のみが目当ての歌作りをする者は、往々にして「一番美味しい躰の部位」のみ作り上げては、その他の部位にさしたる生命も込めぬまま世に送り出してしまうことがある。これを俗に「腰折歌(こしをれうた)」と呼ぶ。四字熟語風に言えば「竜頭蛇尾」、人物の面相に例えて言えば「あの人、目だけ見たら大変な美人なんだけど・・・鼻や口やその他のパーツが、なんとも残念な感じだねぇ」という歌である。

●「筑波の道(連歌)」の始まり

♪出だし好調/末散々の「腰折れ歌」を作るよりも、いっそ「ここだけは自信を持って美形と言える」パーツを、誰か他の人物の眼前にポンと投げ出して、「さぁ、あなたなら、この目鼻立ちに、他のどんなパーツをくっつけて真性美人の造作を作り上げますか?」とばかり、連作要請を出す方が気が利いている・・・そう考えた貴族達が、知的遊戯として確立させたのが「連歌」である。誰かが「上の句(五七五)」だけを思い付いたなら、「末や如何に(すゑやいかに?)」と言いつつ場に投げ出して、気の利いた「下の句(七七)」の登場を待つ:逆ならば「本や如何に(もとやいかに?)」で「上の句(五七五)」待ちだ。

♪そうして、複数作者の連作が見事秀逸に決まれば素晴らしいコンビネーション・ アートである。現代世界のように「著作権」にうるさい時代でもないから、完成した 作品に対する貢献度は上の句/下の句どちらの作者が大きいか、真正著作者は誰か、 などということはさして問題にもならなかった。

♪この掛け合い芸としての「連歌」は、「筑波の道(つくばのみち)」なる換喩(かんゆ)で呼ばれることもある。日本武尊(やまとたけるのみこと)が甲斐国(かひのくに)への途上、筑波山に至ったところで詠んだ歌と、それに呼応して御火焼の翁(みびたきのおきな)が付けた歌とが「連歌」の起源、との伝説から生じた呼称で、これと対照する形で「短歌(和歌)」の呼び名「敷島の道(しきしまのみち)」も生まれることとなった。ちなみに、その「連歌の走り問答歌」は次のようなものだったとされる:

《新治筑波(にひばりつくば)を過ぎて幾夜か寝つる》(日本武尊)

《日日並べて(かがなべて)夜には九夜(ここのよ)日には十日を》(御火焼の翁)

(現代日本語訳) 筑波を過ぎてからもう幾つの夜を数えたことだろう?・・・日々を重ねて、 九夜過ぎ来て、昼はいま十日目。

♪古い歌だけに、両者まとめても「短歌形式」(五・七・五・七・七=三十一文字の「短連歌」)にはなっていない。こうしたものを「長連歌(鎖連歌)」と呼ぶ。平安の世も終わりの院政期(第72代白川帝~第82代後鳥羽帝の世)には、和歌世界の卑俗化の潮流を反映して長連歌が流行し、その構成句数も次第に多くなって行く。継ぎはぎされる句数が三十六句だと「歌仙」などと「中古三十六歌仙」なる俗称に引っ掛けて呼び、四十四句だともっとベタな駄洒落で「世吉(よよし)」と称される。更に延々ダラダラ続けると、しまいには「百韻」だの「千句」・「万句」などといった終わりなき尻取り遊びみたいなことになる。

●「俳諧連歌」

♪綺麗に決まって満座の拍手を呼ぶような名句の連携芸ばかりが「連歌」から生まれるわけでは、当然、ないわけで、中には、折角の綺麗な目鼻立ちがてんでチグハグな並べ方のせいで大笑いの福笑いみたいな滑稽な顔立ちを生むような「連歌」もある。むしろ(至芸の主どうしのインスピレーション交歓会でもない限り)その種の「腰折れ歌」が生じる場面の方が多いのが現実でもある。それならばいっそのこと、最初から「腰折れ度合いのはなはだしさ」をこそ主眼としたギャグの即興芸として「連歌」を茶化して楽しんでしまえ、という方面に走る者が出ても不思議はない。ロクな付け句も出来ぬ自らの文芸的嗜みのなさを痛感させられて、満座が萎えた気分に沈み込むよりは、頓珍漢な文言の付け合わせの滑稽さを最初から期待する座へと趣向を変えた方が、遥かに気が利いているのだから。

♪かくて、笑えるような面白味 (これを文芸用語では 「**俳諧**: はいかい」と称する)

を最初から当て込んでの「**連歌**」が生まれた:「**俳諧之連歌**(はいかいのれんが)」である。やがてその形式は、「誰かが詠んだ上の句=**発句**(ほっく)」に、他の誰かが「**下の句**(=**挙げ句**)」を「**付け句**」する形へと統一されて行くようになる。

♪「俳諧」の呼び名の起源は、『古今和歌集』の部立(ぶだて=ジャンル・分野)(巻十九「雑躰:ざってい」)の一部として滑稽な主旨の歌ばかりを集めた「俳諧歌:はいかいか(歌番号1011~1068)」に由来する;が、単独作者によって詠まれたこれらの歌は「連歌」ではない。その後、この種の面白味を当て込んでの複数作者による問答歌が「俳諧連歌」の御座敷掛け合い芸として発展したものの、一般の「短歌」とは異なり、単なる座興として詠み捨てられて、歌集の記録にも残らぬ扱いであった。

♪この「連歌」という文芸ジャンルを、初めて勅撰和歌集の「部立」の一部として 採り上げたのは、平安後期(1126年)の『金葉和歌集』(部立「雑下」に収録)である; が、こうした試みに代表されるこの集の当代重視の革新的特徴を、後代の和歌の大御所 藤原俊成(ふぢはらのとしなり or しゅんぜい)は「戯れの様(ざれのさま)」がひど すぎるとして非難している・・・当時の「連歌」の扱いがわかる話と言えるだろう。

♪連歌のみから成る歌集(勅撰でも何でもない私撰集)が初めて成立するのは、なんと、室町時代も末期の1499年の『竹馬狂吟集(ちくばきゃうぎんしふ)』でのことである・・・「狂」を含むその標題からして「俳諧連歌=戯れ芸」という作者の自嘲ぶりが面白いというか、悲しい感じである。これは1539年の『犬筑波集(いぬつくばしふ)』にも言えることで、立派な「人」が真面目くさって付け句に頭をひねる文芸的嗜みではなく、「犬・猿」芸に満座が腹をよじって笑い転げるための座興が「俳諧連歌」だったわけである。

●「俳諧連歌」→「川柳」→「俳句」

♪この「俳諧連歌」は、戦国の世も終わり、社会の安定期を迎えた江戸時代に至って、二つの支流へと引き継がれて行く。一つは「川柳」、いま一つが「俳句」である。前者は一般庶民の大衆芸として、後者は主に富裕な商人たちの間で、「俳諧連歌」の「発句」部分(=五・七・五の十七文字)のみが独立したもの(「挙げ句」の七・七を廃したもの)として発展し、21世紀の今日にまで至っている。

♪共に「五+七+五=十七文字」の世界一短い定型詩である「川柳」と「俳句」に、 形式上の相違はない。唯一の違いは、「俳句」は「季語」の織り込みを必要とするのに 対し、「川柳」にその制約はないという点である。両者ともに元来は「俳諧=こっけい で笑えること」をその根底に有していた座興芸であったが、笑いさえ取ればそれでよし とする安直な情弱さを嫌い、そこに文芸としての高みを求めるための隠し味を真剣に 追究した人物がいた:松尾芭蕉(まつをばせう:1644-1694)である。

♪短文詩とはいえ、三十一文字の「短歌」にはまだ「物語」を織り込む余地がある・・・が、十七文字の「俳句」にその余地はない:余地がない分、余情に頼らねば、ただの戯れ句に終わってしまう・・・そこに、文字の表面には表われぬ心象的後景を浮かび上がらせ読み手のイメージを豊かに膨らませるための工夫として、芭蕉が辿り着いた含蓄の仕掛け ― それが、「俳句」を「川柳」と区分する「季語・季題」なのである。

■章01)『和歌修辞法』

この章 0 1) は「歌よみ心得」の精髄。「和歌のいろは」を一気に覚え込ませるための美味しい情報てんこ盛りなので、げっぷが出るまでとっぷりと味わってほしい。

- ■01)(001) 「字余り」と「字足らず」 —
- ●「字余り」は数多し:「字足らず」は少なし

♪「短歌=五・七・五・七・七」にも「**俳句**=五・七・五」にも共通する「破格」 として、各句の長さが規定の文字数を超過する「**字余り**」と、逆に規定の文字数に 達しない「**字足らず**」とがある。

♪統計的に言うと、「字余り」はかなり多く見られるのに対し「字足らず」は実に少ない:「ほとんど存在しない」と言っても過言ではないぐらいである。これは、日本語に於ける「七五調」という魔法のフォーマットの為せる業である:「五語」と「七語」は、和語に予定調和をもたらす絶対的な枠組みなのだ。

♪五音に満たぬ「四文字」や、七音寸前の「六文字」から成る句には、極端な違和感が付きまとう。これに対し、「五音を満たした末の六文字」や「七音から勢い余っての八文字」には、不思議とさしたる違和感もない。事足りて後の余剰は問題ないが、当然満たされるものと誰もが待っている「五・七」に足らぬ「四・六」では、何とも場がもたぬのである。

♪試しに、筆者の手になる次の短歌を見ていただきたい:

《すてねこが きぞはごひき けさにひき ひとのなさけぞ けざやかなる(捨て猫が 昨日は五匹 今朝二匹 人の情ぞ けざやかなる)》(by 之人冗悟)

(現代語訳) 昨日は五匹いた捨て猫が、今朝見てみれば二匹だけ。三匹は拾われて命拾い、 二匹は見捨てられ、野をさまよう・・・人間の愛情の境界線は、何ともはっきりしたものだ。

・・・第二句(きぞはごひき)と結句(けざやかなる)を「字足らず」にしてある;が、もしこの歌が人から人へと歌い継がれるとすれば、やがてその第二句は必ずや「きぞはごひきくに>」なり「きのうはごひき」なりの形になり、「字足らず」の違和感を払拭すべく自然改変されてしまうこと、間違いない・・・日本人の「七五調希求」は、

それほどまでに本能的かつ絶対的なものなのである。

●「字足らず」許すは「結句」のみ

♪一方、結句(第五句)の「けざやかなる」の「字足らず」は、そのまま許容されるかもしれない・・・その置かれた場所が結びの位置であり、後続語句との音調的連動性を損なう難点がないからである。一方、初句・二句・三句・四句までの位置では、この種の断章をもたらす不協和音の存在は、どうにもこうにも許容し難いのである。

♪上述した「短歌(俳句)」の特性は歌詠みの経験則であるが、歌読みの人々がこれを理解するにも(その人が普通の音感を持った日本人であるならば)さしたる支障はないであろう・・・それでも敢えて自作の戯れ歌に乗せてその理を説くならば:

《字余りは歌によくある事なれど字足らず歌ぞ珍かなる》(by 之人冗悟)

・・・この自作歌を違和感なく読むために、結句の字足らずを「めづらかくン>なる・・・ 珍奇なものであるようだ)」などと「**接音便**(ン付け読み)」で無理矢理継ぎ句してまで 本能的に七音へと修正する芸当も(古典文法に通じた日本人には)ごく自然なことだ。 「七五調の磁力」になびく和語の本能は、それほどまでに強いものなのである。

■01)(002) — 「句切れ」 —

♪「短歌」及び「俳句」が、「結句(短歌なら第五句の七音/俳句なら第三句の五音)」 以外の句の部分で「断章」となる形を「句切れ」と呼ぶ。第一句で切れれば「初句切れ」、 以下順番に「二句切れ」(「俳句」ではここまで)・「三句切れ」・「四句切れ」だ。

♪松尾芭蕉に、「連体形」と「終止形」とで風情が絶妙に異なる有名な一句がある:

《<秋深き隣>は何をする人ぞ》

《秋深し・・・隣は何をする人ぞ》

♪並べてみると、連体形で後続の「隣」に続く「**秋深き**」にも、初っ端から終止形で 断章 (=初句切れ) を演じて微妙な間合いから詠嘆を呼び込む「**秋深し**」にも、それぞれ に捨て難い味がある。 芭蕉も、どちらを選ぶべきか、さぞや悩んだことだろう。

♪もしこの句を「秋深き隣」とするならば、その場合の「秋」はこの隣家に於いて殊更に「深い」のかもしれない・・・木々もまばらでろくに手入れも行き届いていないような家とは異なり、夏の間は青々として涼しげな木陰を提供していたこんもりとした森のような木々が、一斉に秋冬モードへの紅葉を遂げて、その鮮やかさが(例によって旅に出ていてたまたまこの秋の庭の隣家に滞在していたのであろう) 芭蕉の目を驚かせ、かくも鮮やかな季節感応型庭園の主はどれほどの風流心の持ち主なのかと、この俳人をゆかしがらせたのかもしれない。

★付録: 文法理解度確認 & 暗記促進用 空所補充試験問題 ★

- ●本編「=**古文の理**=」の内容を更に簡潔に要約した文章の一部を《_____》(空所補充問題)と化し、これを学習者が逐次補足することで、当該文法事項の内容理解と暗記の促進を図るためのテストを、賢明にも本書を「得物=weapon of choice」として手にした諸君への「特別な獲物・余禄=bonus」として全巻の最後に贈呈する。
- ●本編で解説されていてもその理解&暗記の重要度が低い事項はあっさり流したり、逆に新たな解説を付けたり、いくつかの学習単元をまとめてドカッと総括して問題にしてある場合もある。**正解は各単元のテスト末尾に記し、解答目安時間(??min)もその直前に添えておく**(答え合わせには正解まとめてコピー&参照できたほうが便利だろうから、重複を百も承知で、巻末にも正解一覧をドサッと再掲しておく)。
- ●本編を読む前にいきなりこちらの空所補充問題に挑んでおき、自身の知識・理解の 欠落部を事前に確認した上で、本編の解説の中にその答えを求めに行く実戦的利用法 も可能であろう・・・初学段階でそこまでの勝負に出るファイター型学習者は少ない であろうが、復習段階ではそのやり方が必須となる。試験直前には、この穴埋め確認 作業が諸君の得点力(+確固たる自信)を高めてくれること、言うまでもない。
- ●大事な本番の試験に備えて「この巻末穴埋め問題を全部やり終えるのに自分の場合どの程度の時間と労力を要するか?」まで(体感的に)把握しておくことが望ましい:【weapon】とは、そのように自らの手に馴染み使いこなしを身体が覚えてしまうほどに我がものとしてこそ、百戦百勝・効果一生の武器となる。生兵法では意味がない。得心行くまで使い倒して**古文 MAESTRO**(いにしへの和語の匠み)を目指されたし。
- ●そうして「**古典文法**&**和歌**」の世界を制した後に、残る課題は「**古文単語**」: そのための"得物"として**この筆者が著した『古文単語千五百 Mastering Weapon』**をも併用すれば、受験生は、大方の大学入試に死角なしの境地に到ることであろう。
- ★ "単語本には例文が必要"ということで、上記本の"巨大例文集"として編んだ本が『ふさうがたり(Fusau Tales)扶桑語り』。千五百もの受験重要古文単語をすべて織り込む過程で"例文集"が肥大するのを見越した上で、同書には「平安時代に使用された助動詞37&助詞77の語法の全て」と「係り結び等の重要古典文法の全て」をも"用例集"として織り込んである。全22の歌物語の読解過程で「単語+助動詞+助詞+語法」を随時学べる(&印象に焼き付ける)本=「万能教科書」を目指して書いた実に欲張りな本である・・・が、古典文法の受験対策には、歌物語を楽しんで読む道すがら自然に身に付けるやり方よりも、理詰めの手引書で集中&反復学習する方が数段効率的であることを(実際『ふさうがたり』をテキストにした総合学習講座完成後の実感として)悟ったこの筆者が、改めて書き下ろした古典文法集中学習本の究極の形が、この『古文の理』というわけである。
- ●本書読了後、『古文単語千五百 Mastering Weapon』の併用は受験生なら必須の道筋・・・『ふさうがたり(Fusau Tales)扶桑語り』の世界まで足を伸ばすのは時間と風流心次第の優雅な選択・・・何にせよ文法書→単語集→扶桑語りの手順だけは違えぬように。

☆以下、「=**古文の理**=」内容理解と暗記促進用の膨大なドリル・・・いざ**、携まれたし**!

古語は、前		_01/(001/	―古語の種別	_	
	後に続く語との関係	で語尾の形が	である語であ	る「《1)	》語」と、前後に
どんな語が来	ようとも常に同じ形で	で用いられる「	非《1)	》語」の二種類	質に大別される。
Γ《1)	》語」に属する「	品詞」は以下の	の3種(数え方l	こよっては5種)	である:
	》(・・・これに更				
♦ 《5)					
♦ 《6)					
「非《1)	》語」に属する	る「品詞」は以	下の6種(数える	方によっては7種	〕である:
♦ 《7)	》(・・・これに更	こ(8)	》を加える	こともある)	
♦ 《9)	》				
♦ 《10)					
♦ 《11)					
♦ 《12)	<u> </u>				
♦ 《13)					
語呂合わせ	としては《クッシャロコ	コ》・・・九種の			1)》語」
+六種の「非《	1)》語」。 ては十二種の《14)_				1)》は、
+六種の「非《 数え方によっ [゛]	1)》語」。 ては十二種の《14)_		:言うこともでき	.	
+六種の「非《 数え方によっ [。] これら十二	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14)	》と 》の全てを	:言うこともでき :具体的に含む	る。 語呂合わせは[『兎に角も三郎急で
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦女	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14) 子関連攻めど、けど	》の全てを 》の全てを 「』・・・とに(=	:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14)_	る。 *語呂合わせは[『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種
+六種の「非《 数え方によっ これら十二。 大丈夫。婦女 だか、数え方	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14) 子関連攻めど、けど にやや統一性を欠	》の全てを 》の全てを 「』・・・とに(= くが)、さぶ(:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14)_ =3種の「《1)	る。 *語呂合わせは 》)か 》詞	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろー(=6種の
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦女 だか、数え方 「非《1)	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14)_ 子関連攻めど、けど にやや統一性を欠 》語」)きゅー	》の全てを 「』・・・とに(= くが)、さぶ(・(=9種の《	:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14)_ =3種の「《1) 14)	る。 注語呂合わせは 》)か 》)で(基本	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろ一(=6種の \$は9種)だい(=
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦女 だか、数え方 「非《1) 《8)	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14) 子関連攻めど、けど にやや統一性を欠	》の全てを 「』・・・とに(= くが)、さぶ(・(=9種の《 》)ほ	:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14)_ =3種の「《1) 14) (=《4)	る。 *語呂合わせは『 》)か 》)で(基本 》)ぶ(「だい	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろ一(=6種の 「は9種)だい(= 「十じょ+ほ」の補欠
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦女 だか、数え方 「非《1) 《8) 品詞御三方も	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14)_ 子関連攻めど、けど にやや統一性を欠》語」)きゅー》)じょ(=《3) 付け足せば12種)。	》の全てを 「』・・・とに(= くが)、さぶ(・(=9種の《 》)ほ ふ(=《13)_	:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14)_ =3種の「《1) 14) (=《4) 》)じ	る。 *語呂合わせは 》 う》 で(基本 》) ぶ(「だい ょし(=《12)	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろ一(=6種の らは9種)だい(= ・+じょ+ほ」の補欠
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦女 だか、数え方 「非《1) 《8) 品詞御三方も 《11)	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14)_ 子関連攻めど、けど にやや統一性を欠》語」)きゅー》)じょ(=《3) 付け足せば12種)。》)れん(=《10)	》の全てを 「』・・・とに(= 〈が)、さぶ(·(=9種の《 》)ほ ふ(=《13) 》	:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14)_ =3種の「《1) 14) (=《4)))じ ()せ(=《9)	る。 *語呂合わせは》)か》)で(基本》)ぶ(「だい》)が(「だい》)め(=	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろ一(=6種の には9種)だい(= ・+じょ+ほ」の補欠))かん(= =《7))
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦え方 「非《1) (8) 品詞御三方も 《11) (←この6つに	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14)_ 子関連攻めど、けどでいかでにかい統一性を欠》語」)きゅー》)じょ(=《3) 付け足せば12種)。》)れん(=《10)は「非《1)	》の全てを 「』・・・とに(= くが)、さぶ(・(=9種の《 》)ほ ふ(=《13) 》語」) / (:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14) =3種の「《1) 14) (=《4) (=《4))じ)せ(=《9) →ここから先の	る。 *語呂合わせは》)か》)で(基本》)ぶ(「だい よし(=《12)》)め(=	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろ一(=6種の には9種)だい(= ・+じょ+ほ」の補欠))かん(= =《7))
+六種の「非《 数え方によっ これら十二 大丈夫。婦え方 「非《1) (8) 品詞御三方も 《11) (←この6つに	1)》語」。 ては十二種の《14)_ 種の《14)_ 子関連攻めど、けど にやや統一性を欠》語」)きゅー》)じょ(=《3) 付け足せば12種)。》)れん(=《10)	》の全てを 「』・・・とに(= くが)、さぶ(・(=9種の《 》)ほ ふ(=《13) 》語」) / (:言うこともでき :具体的に含む 12種の《14) =3種の「《1) 14) (=《4) (=《4))じ)せ(=《9) →ここから先の	る。 *語呂合わせは》)か》)で(基本》)ぶ(「だい よし(=《12)》)め(=	『兎に角も三郎急で くも(12種だか9種 吾」)ろ一(=6種の には9種)だい(= ・+じょ+ほ」の補欠))かん(= =《7))

	■02)—「劉詞」	*' 形谷詞] *' 形名	谷期削」活用の .	見分けカー	
古語の「活用語	込の3品詞、《1)_	》、《2)》	,((3)	》の末尾の、
前後の語句との関	関係により変化する	語形(=「活用形	幻)には、6種あ	る。	
「活用語」の末属	尾の、前後の語句と	この対応によって	様々に変化する	る語尾部分を《4))》
と呼び、常に変化	;せず一定の語頭音	『分を《5)	》と呼ぶ。		
6種ある「活用	形」を識別するた	めの語呂合わせ	±は 《ずむけり 》	なる、。ことぞな	:んどもばこそ
<u>いざ》</u> …それぞれ	れの語句を後(また	は、前)に伴った	場合に出現する	る形として暗記して	ておけばよい:
◆直後に否定助動	動詞「ず」・推量助勇	/詞「む」を付けて	通じる活用形は	\$《6)	_》形である。
	助動詞「けり」を付け				
	》及び《3)		直後に(《1)	》の)「:	なる(成る)」を
	引形は《7)				
	点)」を置いて文				ける用法(=
1(8)	》法」)が成立する》	古用形は《7)	》形でa	ある。	
	- F + E	********	- 45 = 7 = 4 /	***	\ 0.77
]点)」を置いて文 エーナス	草を言い切って	こ終える形(=	:)の沽用形は
(9))	形でめる。				
▲古悠に「−し「す	iiiのトンか「仕号	(一夕詞) はかし	+て辛吐が洛ド	ス活田取け//10	, "
形である。	[]」のような「体言	(一句詞)」を刊し	/ (忌味が通し	のは田宮は『ロ)//
	詞「ぞ」・「なむ(な/	(.) よ及び経思の	音を表わす語	句(か・わ・ハづ:	- ハつ・たわ・
	いて文末に現われ				
《10》		0.0143W.Q.BD112	(// NA O'	
◆直後に接続助	詞「ど」・「ども」を付	けて「逆接の確定	定条件:~だけ;	れども」の意味を	表わす活用形
は《12)				0_	
·	 カ詞「ば」を付けて	「順接の確定彡	条件:~なので	₹」の意味を表ネ	つす活用形は
《12)	_》形である。				
◆先行する係助詞	詞「こそ」と呼応して	文末に現われる	対殊な語形(=	=Γ 《11)	》結び」)の
	》形であ				
◆直前に「いざ」を	を置いて意味が通し	ごる、相手に行動	を促す活用形に	は《13)	》形である。
但し《3)	》に関してはこの	の活用形(~なれ	./~たれ)が用	肌られた例はほ	とんどない。
					···4min
答:《1)動詞》《2)形容詞》(3)形容	動詞》《4)活用語	吾尾》《5)語幹》	《6)未然》《7)連	頭用》《8)中止》
《9)終止》《10)連	重体》《11)係り》《12	2)已然》《13)命	令》		

=======				
	■ 03)(001) ~ (004	4)—「形容詞」概論	_	
「形容詞」とは、物事の	大態や人間の心理を形容	『する語で、その言い	い切り形(=「終止刑	肜」)は常に
Γ ~ +《1)》」	またはその濁音の「~+	《2)》」	で終わる。	
「形容詞」は《3)	》を取ることはできた	ない。《 3)	》を取るためには	ま「形容詞」
ではなく「《4)	_》」の形にする必要があ	る。		
「形容詞」の活用は2種	に分かれ、「連用形」(=i	直後に動詞の「なる	(成る)」を続けて通	配る形)の
語形が「~+《5)	》」なら「《5)	》活用」、「~	·+《6)	_》」または
その濁音の「~+《7)	》」なら「《6)	》」活用と四	乎ばれる。	
2種に分かれる「形容詞	同」の活用形(6形態)を{	未然(M)•連用(Y)•	終止(S)•連体(T)•已	└然(I)•命令
(R)}の順番に並べて示せ	ば、次のようになる:			
◆「形容詞」「《5)	》活用」の MYSTIR 沿	5用表		
{				
M=(8))/(く)・・・「くは or くば」によ	る「順接の仮定条件	∹:もし~なら」専用	
Y=《9)》及ひ	ド《10)》			
S=《11)》				
T=《12)》及	.び《13)》			
I=《14)》				
R=《15》》				
}				
◆「形容詞」「《6)	》活用」の MYSTIR 沿	5用表		
{				
M=((16))/	´(しく)・・・・「しくは or しくは	ば」による「順接の仮	⋷定条件:もし~なら	,」専用
Y=《17)》及	.び《18)》			
S=《19》》				
T=《20)》及	.び《21)》			
I=《22》》				
R=《23》》				
}				
「《6)》活用	」」の活用語尾から「《24》)》」の _ī	音を除けば「《5)	》
活用」となる。				
F=,		"		
「形容詞」本来の活用形				
形(S=止)・「き/しき」の)《27)》形(~	Γ=体)の3種のみ	であった。ここに更	にけれ/

接続助詞「ど/ども」を伴っての「逆接の確定条件:~だけれども」並びに接続助詞「ば」を伴っての
「順接の確定条件:~なので」を成立させるためである。これら「形容詞」本来の4種の活用形のこと
を「形容詞」の「本活用」と呼ぶ。
時代が進むにつれて、「形容詞」の直後に助動詞を従える必要が生じ、そのための複合型活用語
尾として、「本活用」の「《25)》形(Y=用)(く/しく)+ラ変補助動詞(あり)」の結合によ
り生まれたものが《29)》(=く+あら)/《30)》(=しく+あら)の
《31)》形(M=未)と、《32)》(=<+あり)/《33)》(=し<+
あり)の《25)》形(Y=用)、及び《34)》(=<+ある)/《35)》
(=しく+ある)の《27)》形(T=体)、更には《36)》(=く+あれ)/
《37)》(=しく+あれ)の《38)》形(R=令)といった後発活用形であり、
これらのラ変動詞補足型後発活用形を、形容詞の「補助活用」(あるいはその語形から
「《39)》活用」)と呼ぶ。これら「補助活用」の追加によって、「形容詞」の
《25)》形(Y=用)と《27)》形(T=体)には2種類が重なることとなった。
「形容詞」の「補助活用」には《26)》形(S=止)と《28)》形(I=已)がない。
「補助活用」は直後に「助動詞」を従えるために生じた語形だが、その「補助活用」を形成する「ラ行
変格活用動詞(=あり)」直後に続く助動詞に《26)》形(S=止)/《28)》形
(I=已)へと接続するものがないため(除 推量「なり・めり」終止形撥音便接続)、「補助活用」として
《26)》形(S=止)と《28)》形(I=已)を用意する必要もなかったのだ。
・・・・以下の問題への語呂合わせヒントは 《あたらシク、じょうごシクシク、こころシク、こころなクよう、
・・・・以下の問題への語呂合わせヒントは 《あたらシク、じょうごシクシク、こころシク、こころなクよう、 ク・シクもウ・シウ 》 ・・・
<u>ク・シクもウ・シウ》</u> ・・・
ク・シクもウ・シウ》··· 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的
ク・シクもウ・シウ》··· 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的
ク・シクもウ・シウ》・・・ 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。
ク・シクもウ・シウ》・・・ 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。
ク・シクもウ・シウ》 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全ては「《6)》活用」である。
ク・シクもウ・シウ》 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全ては「《6)》活用」である。
ク・シクもウ・シウ》 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全ては「《6)》活用」である。 同一語句の繰り返し(=「畳語」)から成る「形容詞」の全ては「《6)》活用」である。
ク・シクもウ・シウ〉・・・ 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全ては「《6)》活用」である。 同一語句の繰り返し(=「畳語」)から成る「形容詞」の全ては「《6)》活用」である。 「《5)》活用」の表わす意味には物事の形状や程度に関する《40)》的
ク・シクもウ・シウ》・・・ 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全では「《6)》活用」である。 同一語句の繰り返し(=「畳語」)から成る「形容詞」の全では「《6)》活用」である。 「《5)》活用」の表わす意味には物事の形状や程度に関する《40)》的描写が多い。一方、「《6)》活用」の表わす意味には《41)》の心の動きに
ク・シクもウ・シウ》・・・ 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全では「《6)》活用」である。 同一語句の繰り返し(=「畳語」)から成る「形容詞」の全では「《6)》活用」である。 「《5)》活用」の表わす意味には物事の形状や程度に関する《40)》的描写が多い。一方、「《6)》活用」の表わす意味には《41)》の心の動きに
ク・シクもウ・シウ》・・・ 2種ある「形容詞」活用形の語形のうち、古来存在した語形は「《5)》活用」、比較的後発型の語形は「《6)》活用」である。 中古(=平安時代)以降新たに生まれた「形容詞」の殆ど全ては「《6)》活用」である。 同一語句の繰り返し(=「畳語」)から成る「形容詞」の全ては「《6)》活用」である。 「《5)》活用」の表わす意味には物事の形状や程度に関する《40)》的描写が多い。一方、「《6)》活用」の表わす意味には《41)》の心の動きに関する《42)》的描写(いわゆる「心情語」)が多い。

- 308 - _{see also} 古文単語千五百マスタリング・ウェポン

http://zubaraie.com

《7)	》」は、《43)		(=「用言」を修	§飾する「連用修飾	語」としての)
機能を持つ。	この《43)	》的用法で用い。	る「形容詞」の	(25)	》形(Y=用)は、
多くの場合「《	44)	》音便形」を取る(=「《	(5)	》」の音が「《44)	
の音へと転換	する)。				
					···10min
答:《1)し》《2	2)じ》(3)目的	語》《4)動詞》《5)く(ク	7)》《6)しく(シ	ィク)》《 7)じく》《8)から》《9)く》
《10)かり》《1	11)し》《12) ह	き》《13)かる》《14)	けれ》《15)だ	かれ》《16)しか <i>!</i>	5》《17) しく》
《18)しかり》《	《19)し》《20)	しき》《21)しかる》《22	2)しけれ》《2:	3)しかれ》《24)し	,》《25)連用》
《26)終止》《2	27)連体》《28])已然》《29)から》《30))しから》《31)未然》(32)かり	》《33)しかり》
《34)かる》《3	35)しかる》《36	6)かれ》《37)しかれ》	《38)命令》《3	39)カリ》《40)客観	見》《41)人間》
《42)主観》《4	13)副詞》《44)	ウ》			
=====	====				
	■03)(005)―形容詞「ク活用」と「	シク活用」の原	初的語頭用法—	
日本語の原	初段階に於ける	る「形容詞」の用法は、	「名詞」直前に	:付いて「《1)	》語」を
形成する「語頭	頃用法」であった	5 °			
Γ《1)	》語」であ	る「高笑ひ(たかわらひ)	」の「名詞形」だ	が「高笑ふ(たかわ	らふ)」の「動詞
形」を経て「高	(2)	_》笑ふ」となった活用形	彡が「形容詞」 <i>σ</i>)((3))	形である。
Γ《1)	》語」であ	る「優男(やさをとこ)」の	の「名詞形」が「	優《4)	_》男」となった
活用形が「形	容詞」の《5)	》形である。			
Γ《1)	》語」であ <i>・</i>	る「遠国(えんごく)」 の 「名	詞形」をひっく	り返して「国遠《6)	
として言い切る	る形となった活	用形が「形容詞」の《7)		彡である。	
					···1min
答:《1)複合》	《2)く》《3)連用	》《4)しき》《5)連体》《6)し》《7)終止》		
=====	====				
	03) (006)— "	『容詞「ク活用」語幹と「	シク活用」終止	形の連体修飾用語	去—
「形容詞」の	Γ((1)	》活用」の「語幹」、	及び「《2)	》活用」の	「終止形」が、
直後に格助詞	词「の」を伴っ [⁻]	て名詞に連なり、「《3)	_》修飾語」として	機能する(=
L((3)	》形」的に用	いられる)特殊用法がる	ある。		
◆ 「《1)	》活用」語	幹+格助詞「の」+名	詞の例:		
(形容詞=「つ	たなし」)・・・《4	l)	(=拙劣な仕業	<u> </u>	
◆ 「《2)	》活用」終		名詞の例:		
(形容詞=「う	るはし」)・・・《5)》のひと(=美人)		
「形容詞」の	Γ《2)	》活用」の「終止形」	が、直後に格則	助詞「の」を伴うこと	なしに名詞に
連なって「《3)	》伯	修飾語」として機能する 原	用法もある。		

◆ Γ⟨⟨2⟩⟩	活用」終止形+名詞	詞の例:			
(形容詞=「やさし」)・	••(6)	_》蔵人(=風流な	(付き人)		
・・・この場合、中さ	5以降の語法とし	.ては「《3)	》形」を	用いるのが正し	いように
思われるが、形容詞の	の活用形が未分化	状態にあった上	代(=平安時代/	から見た奈良時代	代以前)に
はこの種の「《2)	》活用終止	・形+名詞」による	გГ《ვ)	》修飾」用法だ	が広く用い
られていた。					
◆上代の「《2)	》活用」終止]	形+名詞の例:			
(形容詞=「うまし」)・	··《7)	_》国(・・・後代の	普通の語形だと	「うまき国」/「う	ましき国」
=素晴らしき国)					
・・・この上代型特殊	株語法は、後代の	和歌にも(字数上	この制限を満たる	すための省略語	法として)
引き継がれている。					
◆中古以降の和歌中	に於ける形容詞「	《2)	》活用」終止形の)[《3)	》形化」
現象の例:					
(形容詞=「同じ」)・	・・「さびしさに宿る	を立ち出でてなれ	がむればいづこ	±(8)	》秋の
夕暮れ」・・・この場合	·´	》形」として「《	9)	》」を用いれば「	字余り」と
なってしまう。					
					···3min
答:《1)ク》《2)シク》	》《3)連体》《4)つ	たな》(5)うるに	はし》《6)やさし	》《7)うまし》《8)おなじ》
《9)おなじき》					
=======================================			TE 45 LT4 5 -1		
■03)(00)7)―形容詞「ク活				N o≡ b
■03)(00 形容詞「《1)	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語	幹」及び「《2)	》活用_	」の「終止形」を、	
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独	07)―形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、	幹 及び「《2) 直前に「あな」	************************************	」の「終止形」を、 》を置いたり	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(07)―形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従	幹」及び「《2) . 直前に「あな」等 £えたりして)文オ	》活用 等の《3) たに置き、その音	」の「終止形」を、 》を置いたり	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「	07)―形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従 「《3)》	幹」及び「《2) , 直前に「あな」等 Éえたりして)文ま)」的な響きを帯び	》活用 	」の「終止形」を、 》を置いたり	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1)	07)―形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従 「《3)》 》活用」語幹の	幹」及び「《2) . 直前に「あな」等 Éえたりして)文ま 」的な響きを帯び の文末詠嘆用法の	がある。 学の《3) 大に置き、その音 でる用法がある。 の例:	の「終止形」を、 》を置いたり 	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし:	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従 「《3)》 漢3)」 夢し」)・・・「あな《5	幹」及び「《2) . 直前に「あな」等 だえたりして)文オ 」的な響きを帯び の文末詠嘆用法の	》活用 等の《3) 大に置き、その音 ぶる用法がある。 の例: (=あぁ、有り難し	の「終止形」を、 》を置いたり 	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2)	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従 「《3)》 》活用」語幹で 尊し」)・・・「あな《5	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 だえたりして)文ま 」的な響きを帯び の文末詠嘆用法の が 形の文末詠嘆用活	》活用 等の《3) 大に置き、その音 ぶる用法がある。 の例: (=あぁ、有り難い 去の例:	」の「終止形」を、 》を置いたり 部分で文章を「断	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし:	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従 「《3)》 》活用」語幹で 尊し」)・・・「あな《5	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 だえたりして)文ま 」的な響きを帯び の文末詠嘆用法の が 形の文末詠嘆用活	》活用 等の《3) 大に置き、その音 ぶる用法がある。 の例: (=あぁ、有り難い 去の例:	」の「終止形」を、 》を置いたり 部分で文章を「断	J、直後に 育」とし、
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」。 「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし:	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」をな 「《3)》 満用」語幹の 尊し」)・・・「あな《5 》活用」終止 り 恐ろし」)・・・「やや	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 (をえたりして) 文末 (をする) 立な響きを帯び の文末詠嘆用法の (を)》」 形の文末詠嘆用法の (を)		」の「終止形」を、 》を置いたり 部分で文章を「断	リ、直後に
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2)	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を依 「《3)》 満用」語幹の 尊し」)・・・「あな《5 》活用」終止 恐ろし」)・・・「やや 3)感動詞》《4)詠	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 (をえたりして) 文末 (をする) 立な響きを帯び の文末詠嘆用法の (を)》」 形の文末詠嘆用法の (を)		」の「終止形」を、 》を置いたり 部分で文章を「断	J、直後に 育」とし、
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし: 答:《1)ク》《2)シク》《:	07)—形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を従 「《3)》 活用」語幹で 尊し」)・・・「あな《5 》活用」終止が 恐ろし」)・・・「やや 3)感動詞》《4)詠呼	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 注えたりして)文末 対な響きを帯び の文末詠嘆用法の 下の文末詠嘆用法の 下の文末詠嘆用法 下の文末詠嘆用法 「「「「「「「」」」。 「「「」」。 「「」」。 「「」。 「」。 「」。 「」。 「」。 「」。 「」。 「」。 「 」。 「 。 」 「 。 」 「 。 」 「 。 」 「 。 」 「 。 」 「 。 」 「 。 」 「 。 「 。		」の「終止形」を、 》を置いたい 部分で文章を「断 ハ)	J、直後に f章 Jとし、 ···1min
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」。 「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし: 答:《1)ク》《2)シク》《3 ====================================	07) — 形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」をな 「《3)》 満用」語幹で 尊し」)・・・「あな《5 》活用」終止が 恐ろし」)・・・「やや 3) 感動詞》《4) 詠い ニニー 本言 + 形容詞「ク活	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 注えたりして)文末 対のな響きを帯び の文末詠嘆用法の 形の文末詠嘆用 水(6) 美》《5)たふと》《6		」の「終止形」を、 》を置いたり 部分で文章を「断 ハ) 怖い)	J、直後に i章 Jとし、 ···1min i法—
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし: 答:《1)ク》《2)シク》《3 ====================================	07) — 形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を依 「《3)》 尊し」)・・・「あな《5 》活用」語幹の 尊し」)・・・「あな《5 》があれまします。 恐ろし」)・・・「やや 3) 感動詞》《4) 詠い 本言 + 形容詞「ク流 両」の用法で、中で	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 注えたりして)文末 上まりででは 一まりでは 一まりでは では では	》活用 等の《3) まに置き、その音 る用法がある。 の例: (=あぁ、有り難い 去の例: 」》や」(=「おぉ、 ら)おそろし》 語幹+「み」によっ 辛法として受け継	」の「終止形」を、 》を置いた。 部分で文章を「断 い) 怖い) る「原因・理由」用 繋がれ続けた「原	J、直後に i章 Jとし、 …1min 法— 因・理由」
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし: 答:《1)ク》《2)シク》《3 ======== ■03)(008)—(上代からある「形容 の言い回しが「A(07) — 形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を (の終助詞「や」を (の終助詞「や」を (の終助詞」がい「あな《5 》活用」語な《5 》があればいて、 ないのでは、 本言 + 形容詞「クに 本言 + で、 を記言の は、 には、 には、 には、 には、 には、 には、 には、 に	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 注えたりして)文末 対な響きを帯び の文末詠嘆用法の 形の文末詠嘆用法の をの文末詠嘆用法の をの文末詠嘆用法の をの文末詠嘆用法の をの文末詠味の をの文末。 「おの文末。 「おの文末。 「はいる。」 「はいる。 「しい。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はい。 「は、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と		Jの「終止形」を、 》を置いたに 部分で文章を「断 ハ) 怖い) る「原因・理由」用 髪がれ続けた「原 調ク活用/シャ	J、直後に i章 Jとし、 …1min 法— 因・理由」
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」(「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし: 答:《1)ク》《2)シク》《3 ====================================	07) — 形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」をな 「《3)。》	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 注えたりして)文末 対な響きを帯び の文末詠嘆用法の 形の文末詠嘆用法の をの文末詠嘆用法の をの文末詠嘆用法の をの文末詠嘆用法の をの文末詠味の をの文末。 「おの文末。 「おの文末。 「はいる。」 「はいる。 「しい。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はいる。 「はい。 「は、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と、 「と		Jの「終止形」を、 》を置いたに 部分で文章を「断 ハ) 怖い) る「原因・理由」用 髪がれ続けた「原 調ク活用/シャ	J、直後に i章 Jとし、 …1min 法— 因・理由」
■03)(00 形容詞「《1) との関連性が薄い独 「《4)》」の 「形容詞」というよりも「 ◆形容詞「《1) (形容詞=「たふとし: ◆形容詞「《2) (形容詞=「おそろし: 答:《1)ク》《2)シク》《 ======= ■03)(008)—(上代からある「形容 の言い回しが「A(《2)》+《3	07) — 形容詞「ク活 》活用」の「語 立的な形で(多く、 の終助詞「や」を依 「《3)》 尊し」)・・・「あな《5 》活用」語な《5 》が活用」がで、中で 3) 感動詞》《4) 詠い 本言 + 形容词「ク活 記句) + 《1) 名別の例:	幹」及び「《2) 直前に「あな」等 注えたりして)文式 放響きを帯び の文末詠嘆用法の 下の文末詠嘆用 下の文末詠嘆用 下の文末詠べ 下の文末 下の方 下の文末 下の方 下の文末 下の方 下の文末 下の文末 下の文末 下の文末 下の大 下の 下の 下の 下の 下の 下の 下の 下の		jの「終止形」を、 》を置いたい。 ポ分で文章を「断いかい) 体い) な「原因・理由」用 迷がれ続けた「シー・ 現である。	J、直後に (章) とし、 …1min 出来 一 は、 で は、 が は、 の に に に に に に に に に に に に に

(現代語訳)滝を下ってほとばしる水は、浅瀬の流れの速さゆえ、岩に邪魔され分かれても、下れば一つの流れに戻る・・・そんな激しい滝川のように、一時は別れて暮らしていても、いずれはあなたとまた逢おう、このまま一人でいるものか、と、強く念じている私です。

字数に制約のある和歌の中で多用されるうちに、	格助詞の「《1)	》」を取り去った略形
で用いられる例も一般化した。		
◆「原因・理由」定型表現略形の例:		
(形容詞=「深し」)・・・「山+《5)》け	近き鳥の音はせで物	がおそろしきふくろふの声」
(現代語訳)山奥に生活している私の耳に聞こえて	くるのは、親近感の漢	承く鳥たちの鳴き声ではなく
て、何やら無気味なフクロウの声。		
		···2min
答:《1)を》《2)語幹》《3)み》《4)をはやみ》《5)ふん	ハみ》	
=======		
■03)(009)—体言+形容詞「2	7活用/シク活用」語	幹+「み」
+「す(為)/おもふ(思	ふ)」の動詞用法—	
上代(奈良時代)から平安初期にかけて	用いられた連語的]表現として、形容詞の
「《1)》十《2)》」による名詞	引化表現を目的語とし	、直後に「為(す)」や「思ふ
(おもふ)」等の動詞を続けて実質的に1語の動詞の)役割を演じるものが	ある。
◆形容詞の「《1)》+《2)》	」+「思ふ」の例:	
(形容詞=「うるはし」)・・・「《3)》我が		だになそへて見れど飽かぬ
かも」(現代語訳)その美しさを私が愛しく思うあな		
いくら眺めても見飽きることがない。		
◆形容詞の「《1)》+《2)》	」+「す」の例:	
(形容詞=「うるはし」)・・・「梓弓ま弓槻弓年を		と《3) 》せよ」
(現代語訳)アズサユミ・マユミ・ツキユミ等等等、し		
に、新しい男にも君をかわいがらせる(うるはしきさ	せる)といい。	
,		
平安期にはまた(少数ながら)形容詞の「《4)	》形」+「す」	の形が定型句として用いら
れた(この場合、形容詞の「《4)》形」は		
◆形容詞「《4)		
(形容詞=「かなし」)・・・「《6) 》」の形	、または「《5)	》音便形」に変化した
「《7) 》」の形で、「かわいがる」の意味?		
		···2min
答:《1)語幹》《2)み》《3)うるはしみ》《4)連用》《5)	ウ》(6)かなしくす》(
■ 04)(001)~(003)	—「形容動詞 I概論—	-
「形容動詞」とは、物事の状態や人間の心理を形		
「~+《1)》」で終わるものを「《1)		

で終わるものを「《2)	》活用」と呼ぶ。			
「形容動詞」は《3)_	》を取ることはできた	ぶい。《 3)	》を取る <i>f</i> :	-めには
「形容動詞」ではなく「《4)》」の形にする必要	がある。		
2種に分かれる「形容」 (R)]の順番に並べて示せ	動詞」の活用形(6形態)を{未然(I せば、次のようになる:	M)•連用(Y)•終』	Ŀ(S)•連体(T)•已然	Ķ(I)•命令
◆「形容動詞」の「《1)	》活用」の MYSTIR 活用	月表		
{				
M=((5))	« به مال مال سال ۱۳۵۰ ا			
	び1文字型《7)》			
S=(8)				
T=《9》》				
I=《10》》				
R=《11》》				
	》活用」の MYSTIR 活用	中主		
▼ 「ル台到 師」07 ((2)		D4X		
M=《12)》				
Y=《13》	ðび1文字型《14) 》			
S=《15》				
T=《16》》				
I=《17》》				
R=《18》》				
}				
「形容動詞」の活用形	は、「《1)》活用」/	Γ《2)	》活用」ともに(「ナ行/
タ行」の行の違いはある	ゕ゙゛) {M=ラ・Y=リ・S=リ・T=ル・I=レ	^{,•} R=レ}と、音の	並びは全く同一(ラ行変格
活用形)である。				
	WT4 () 4 PT) 1-1 b (F // 4	\ \ \\ \\	T	,,
	》形(Y=用)には(「《1 ************************************			
	頃あり、そのうちの片方(1文字で マキ・マ・「送出表・の「Noostell		は本源的にはり	活用語」
(20)»J	であって、「活用語」の「形容動詞	[] ではない。		
「形容動詞」の最も原	初的な用法は、「状態を表わすi	돌(Δ)ιの直後に	-[《2 0)	》」を
	いう「副詞」の機能を持たせたもの			
	》形(Y=用)が、「《1)			
	/////			
<u> </u>				112 14

「《20)》」そのものである理由も、前者の活用形が「ナ行」/後者の活用形が「タ行」に
収束する理由も、この語源学的事情によるものである。
「《20)____》」そのものの(1文字形態の)「《21)____》」並びに
「《22)》」を除く「形容動詞」の6つの活用形は、その原初的な1文字型
《19)》形(Y=用)の直後に(ラ行変格活用)の補助動詞「あり」を付けて成立したもので
あるから、「形容動詞」の活用形は(「《20)》」そのものの形をとどめる
《19)》形(Y=用)の「《21)》」/「《22)》」を除いて)
「ラ変動詞」の活用形{M=ぁラ・Y=ぁリ・S=ぁリ・T=ぁル・I=ぁレ・R=ぁレ}(の語頭にナ行音/タ行音を
付けたもの)となる。
「形容動詞」の《23)》形(R=令)(「~なれ/~たれ」)は、活用表の上には(しばしば
〇や(カッコ付き)の形で)記載されているが、実際の古文の中で用いられた例はほとんどない。
「形容動詞」は上代(平安時代から見た奈良時代以前)には未発達で、中古(平安期)になって6種
の活用形が定まったが、当時用いられたのは専ら「《1)》活用」であり、もう一つの
「《2)》活用」は、中世(鎌倉時代)以降の《24)》訓読調の男性的で硬質な
語として用いられたものの、和文脈ではほとんど全く用いられず、中古女流文学中にはほぼ絶無
である。「漢語」由来の「《2)》活用」には、「様態」を表わす「~然」を付けた語形(例:
「呆然たり」)や、同一語の反復語形(=「《25)》」)(例:「堂々たり」)が多い。
「形容動詞」と「断定助動詞」とに共通の語形で現われる「《1)》」の識別法は、直前に
「《26)》修飾語」(例:いと)を付けて意味が通じれば「形容動詞」、直前に
「《27)》修飾語」(例:我が)を付けて意味が通じれば「断定助動詞」と考えればよい。
···5min
答:《1)なり(ナリ)》《2)たり(タリ)》《3)目的語》《4)動詞》《5)なら》《6)なり》《7)に》《8)なり》
《9)なる》《10)なれ》《11)(なれ)》《12)たら》《13)たり》《14)と》《15)たり》《16)たる》
《17)たれ》《18)(たれ)》《19)連用》《20)格助詞》《21)に》《22)と》《23)命令》《24)漢文》
《25) 畳語》《26) 連用》《27) 連体》
=======
■04)(004)—形容動詞語幹の文末詠嘆用法—
「形容詞」にも共通する「形容動詞」の用法として、「形容動詞」(「ナリ活用」・「タリ活用」双方とも)
の「《1)》」を、他の語句との関連性が薄い独立的な形で(多く、直前に「あな」等の
《2) 》を置いて)文末に置き、その部分で文章を「断章」とし、「形容動詞」というよりも
「《2)》」的に用いる場合がある(実際、品詞分類上も「《2)》扱い」される
場合が多い)。
◆「ナリ活用」語幹の文末詠嘆用法の例:
(形容動詞=「中中なり」)・・・「いや、《3)》」(=いや、どうして立派なものですよ)
" · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

<u>習慣無情》</u>	(せつふくけいか	くしゅうかんむじょ)	=(10)	》 · 《6)	»•
《7)		》・《12)	》•《13)	》という全部で
《14)	》の「助詞」か	「古典文法には存在す	る、と覚えておけ	けばよい。	
					···7min
答:《1)活用	月》《2)接尾語》《3)体言》(4)格助詞》((5)用言》(6)副	助詞》《7)係月	助詞》《8)文節》
《9)語》《10》)接続助詞》《11)ス	文章》《12)終助詞》《1	3)間投助詞》《1	4)六つ/6種	類》
····	あ、ここから先は「劽	要チェックの <i>女子</i> 助詞ー	-覧リスト」・・・そ	の前に少々能	書きをば:
各「助詞」	」の表わす個別に	的意味は様々であり)、「助動詞」	のようにその	意味・文中で
の登場位置	置・上接語に接絡	売する際の活用形等	等の規則性に れんかん かんかん かんかん かんかん かんかん かんかん かんかん かんか	音目して論理	体系別に把握
することは	は不可能である(=逐一棒暗記する	しかない)が、	古典時代の	「助詞」の意味
の多くは現	民代日本語の「助	詞」にもそのまま	引き継がれてい	いるので、実	践的学習法と
しては、現	代語と意味が異	なる「助詞」のみ集	中的に覚えれ	ばよく、現代	語と同じ語義
は学習対象	から意志的に外	してしまうのが得	策 である・・	・から、ここ	から先に示す
リストでは	は、「=古文の理=	=」本編と異なり、	現代日本語と	意味がカブる	語義(及び、
大学入試と	は無縁の上代や	近世の語義)は(基本的に)抹	消して 「受験	生として意図
的に暗記し	ておかないとヒ	ドい目に遭う危険	がある古典的	助詞語義のみ	」示しておく。
そうして	意図的に暗記し	てもらう助詞語義	である以上、F	暗記するため	の方便として、
この先の財	加詞リストには名	・語義ごとに1つず	つ「例文(筆	者自作の擬言	5文&詩歌)」
も付けるか	ら、そちらも覚	え込んで古典助詞	への馴染みを	架めてほしい	。暗記に値し
ない割愛語	語義に例文を付け	するのは(辞書とし	てはともかく	受験指南書と	・しては) 全く
ナンセンス	スな著作者の自己	に満足に過ぎぬから	、機ここに至ん	るまで、助詞	例文カタログ
は保留にし	ておいた訳であ	る・・・的外れな	自己主張のたる	めに頓珍漢な	:形で我を張る
人を、指弾	色や笑もせず優	しく賞賛する唾棄	すべき社会風	土が、今の日	本には根付い
てしまって	[いる・・・が、]	阿呆な頑張りはハク	タ迷惑:「我を	脹る=奥向き	の我執を臆面
もなく人前	方にさらす行為」	の図式を冷徹に自	覚しつつ、ど	うせガヲハル	ならエガオで

日本に於ける英語や古文といった「語学の達人」の少なさは、「為すべき有意の事、 為さず捨て去るべき無益な事」の割り切り(事割り=理)を踏まえて自ら為すべき事 と信ずる対象のみに全精力を注ぎ自らの地歩の確かさの確信から生じる揺るぎなき自 信の自活力を武器に目標へと邁進する頑張り屋・・・の数の少なさを証拠付ける、無 様で悲しい現象である。「**有意の努力と有益な成果は、無用な行為を見極め意志的に 背を向けることから始まる**」という単純極まる絶対の真理を本書の学習を通して体得 した諸君が価値ある成果を続々出してくれたなら、今この国が陥っている閉塞状況の 打破などさしたる難事ではない。「捨て去るべき事、為すべき事」をきちんと踏まえて 道を切り開けば、現状「出口なし」にも見える日本の将来もきちんと見えてくる筈。

ガンバリ、社会的に有意義で自他共に報われる建設的努力のみに傾注して自己実現に

励む日本人の数が、一人でも増えてほしいと願うこの筆者である。

【weapon】 =武具は既にもう諸君に供与した
・・・・FIGHT (**闘争**) or FLIGHT (**逃走**)・・・
どちらを選ぶも、あとはもう、諸君次第である。

■11)(002) — 「格助詞」の古典的語義(のみ) —

14種存在する「格助詞」(うち2つは上代語で、格助詞というより造語成分と捉える向きもあり)の全てを語呂合わせで覚えるつもりなら、《己が絵に唐よりデートにてしてとて夏》 =【を】【の】【が】【へ】【に】【から】【より】【で】【と】【にて】【して】【とて】【な】【つ】 (・・・最後の【な】【つ】は上代の造語成分)で棒暗記すればよく、各助詞の語義を、現代 日本語と同一/奈良・室町期のものは割愛して古典時代特有のもののみに絞り込み、「例文(筆 者謹製自作版)」付きで書き出せば、次のようになる:

-要暗記「古典格助詞」語義・訳語一覧-

- 【を】(2)〈(離合の対象)(「会ふ」・「背く」・「別る」などの動詞と共に用いて)接近したり離別する対象を表わす〉・・・と。(例:「世<を>背く」=俗世と離れて出家する) (3)〈(自動詞・形容詞の主格)形容詞や、他動詞的に用いた自動詞の主語を表わす〉・・・が(~であること)。(例:「猫の雀を喰らひける〈を〉恨めしければ、蹴(け)にけり」=ネコがスズメを食ったのがムカついたのでケリ入れちゃった) (7)〈(原因・理由)(後続部に形容詞語幹+接尾語「み」の付いた「・・・を~み」の形で)ある物事の特性ゆえに、後続の事態が成立する意を表わす〉・・・が~ので。(例:「山〈を〉深み人やは愛(め)でむ桜花」=奥山深〈咲いているので誰一人賞美してくれる人もいないであろう桜の花) (8)〈(同族目的語)(「寝を寝」・「音を泣く」など)意味の似た名詞と動詞の間に置いて慣用句を形成する〉ひたすら・・・する。(例:「い〈を〉ぬれど恨む人なきやもめかな」=一人ぐう~すか爆睡しても、かまってくれないことに文句を言う人もいないのが独身者・・・ああ気楽だな、さびしいな)
- 【の】(5)〈(比喩)類似性を持つ他の何かに例える形で、ある物事の特徴を言い表わす〉・・・ のような。(例:「たまくの>をのこの生まれけり」=玉のような男児が生まれました)
- 【が】(1)〈(連体格)後続の語が直前の語の所有物・従属的立場である意を表わす〉AOB。 (例:「誰(た)〈が〉為(ため)に斯〈(かく)や生ひ(おひ)けむまろ〈が〉たけ」=我が背丈、こんなに伸びたは誰のため?) (2)〈(同格)後続の語が直前の語と同じ文法的資格、類似(直後に「ごとし」・「やう」などの語句を伴う)、同程度(直前に具体的分量を示す語を伴う)の関係である意を表わす〉AというB(例:「なでしこ〈が〉花」=撫子という名の花)。BみたいなA(例:「山〈が〉宝」=山ほどた〈さんの宝物)。 およそBほどのA。(例:「みとせばかり〈が〉このかみ」=三年ほど年長) (3)〈(準体格)直後に省略されている体言が、直前の語の所有物・従属的立場である意を表わす〉Aの(もの)。(例:「いかなれば彼の歌はめでたく、吾〈が〉(わが)は悪(わろ)かるべきぞ」=一体どうして、彼の和歌は見事で、私の歌は駄目なわけ?)
- 【へ】(3)〈(対象)動作・作用の向けられる対象・相手を表す〉・・・に対して。(例:「下々(しもじも)がお上くへ>訴(うた)ふる目安箱」=一般庶民が政府のお偉いさんに請願するための投書箱) (4)〈(場所)動作の行なわれる場所を表す〉・・・にて。(例:「里に倦(う)みて山くへ>住む」 =世間に嫌気がさして、人里離れた山中に暮らす)

【に】(6)〈(原因・理由)前述の事柄が、後述の結果を招くことになる意を表わす〉・・・ゆえに。(例:「酒<に>酔ひ、色くに>惑ひて、興<に>病み、病くに>斃(たふ)るも人の世の常」=酒飲んで酔っぱらい、色欲のせいで道を踏み外し、遊興に病的にふけった挙げ句、病魔に冒されて死んじまう・・・なんてのも、どこにでもある陳腐なお話) (7)〈(手段)動作・作用を行なう上での方法・手段・材料などを表わす〉・・・によって。(例:「我が罪、この歌くに>ゆるしてよ」=悪いことしちゃったけど、この歌に免じて勘弁してくださいな) (9)〈(婉曲な主体表示)(敬うべき主語を、多くその本来の呼称の代わりに「存在する場所+には・にも」の形で表現して)主語となる人物への敬意を込めて遠回しに言う〉・・におかれましては。〈(主語の取り立て)(敬意の対象外の主語について)他の存在と対比させる形でその主語を取り立てる〉・・・については。(例:「上様くに>は御機嫌よろしう、祝着至極(しゅうちゃくしごく)に存じ候(そうろう)」=あなたさまにおかれましてはごきげんもうるわしく、まことにめでたいことにございます)(11)〈(立場)(資格・地位などを表わす語の直後に用いて)そのような存在として判断・処遇・行動する意を表わす〉・・・として。(例:「客人ざね(まらうどざね)くに>もてなしけり」=主賓待遇でおもてなしたのだった)

(【から】・・・現代日本語と同一語義=ノーマークで可)

【より】(3)〈(通過点)移動の過程で通過する地点を表す〉・・・を通って。(例:「田子の浦 <より>駿河の海へ到る」=田子の浦経由で駿河湾に到達) (5)〈(移動手段)(「徒歩」・「馬」 などの語に付いて)移動する際の手段・方法を表す〉・・・によって。(例:「輿(こし)も使はで徒 歩(かち) くより>来るか」=驚いたねえ、こし(×腰 〇かご)も使わずテクテク歩いて来るとは) (8)〈(連続動作)(活用語の連体形に付いて)直前の事態に引き続き、間を置かずに後続の 事態が連続して発生する意を表わす〉・・・するや否や~。(例:「声を聞くくより>かなしうて、 えならずなりにけり」=声を聞いた途端に心引かれて、もうどうにも我慢ならなくなってしまった) (【で】・・・現代日本語と同一語義=ノーマークで可)

【と】(3)〈(比喩)物事の様態を、他の何かに例えて表現する〉・・・のように。(例:「夜の明けて雪くと>消えぬる夢の逢瀬よ」=夜が明けたらまるで雪が溶けるみたいに跡形もなく消え去ってしまった夢のような逢い引きだったなあ) (4)〈(強調)(動詞連用形に付き、同じ動詞を二つ「と」でつなぐ形で)動詞の意味を強めたり、動作が勢いよく進行する様を表わす〉・・・ものは全部(例:「生きくと>し生くる者」=この世に生きるすべてのもの)。ずんずん・・・する(例:「食ひくと>食ひけり」=食って食いまくった)。 (5)〈(比較) 比較の対象を表す〉・・・と比べて。(例:「我もし人くと>劣らじや」=自分はひょっとして他人より劣っていたりしないだろうか?) (8)〈(自発)(「おのれ」・「こころ」・「われ」などとともに用いて)ある行為が何に発するものであるかを表わす〉・・・から。(例:「わざとならずおのれくと>浮かぶこそ歌の上手なれ」=技巧を凝らさず自然に思い浮かぶのが和歌の達人というものだ) (9)〈(資格)ある行為がどのような資格に於いて為されるかを表わす〉・・・として。(例:「道の上手くと>自ら名を流すこそかたはらいたけれ」=斯道(しどう)の達人として自分から評判を流すなんざ、ちゃんちゃらおかしくて付き合ってられねえ)

【にて】(2)〈(時点)動作・作用の発生する時間的な場を表わす〉・・・の際に。(例:「齢五十(よはひいそぢ)〈にて〉身罷り(みまかり)にけり」=五十歳という年齢でこの世を去った)(4)〈(原因・理由)前述の事柄が、後述の結果を招くことになる意を表わす〉・・・ゆえに。(例:「猫は畜生(ちくしゃう)〈にて〉人の言の葉使はず」=猫は動物なので人間の言語は使わない) (5)〈(様態・立場)その場の様子・状況を表わす。また、資格・地位などを表わす語の直後に用いて、そのような存在として判断・処遇・行動する意を表わす〉・・・状態で。・・・として。(例:「宮の乳母(めのと)〈にて〉内裏(うち)に上れり」=皇族の子の乳母という立場で宮中にお仕えしていた)

【して】(2)〈(手段)何かを作ったり行なったりする際の材料・道具・方法などを表わす〉・・・を用いて。(例:「指の血くして>したためける誓ひ」=指先から滴る血で書いた誓約の血判状) 【とて】(2)〈(目的)ある行為の動機・意図・目的を表わす〉・・・ために。(例:「院の御守り(おほんまもり)くとて>北面さぶらひたり」=上皇を御警護申し上げるべく北面の武士が控えております) (3)〈(原因・理由)前述の事柄が原因となって、後述の事態に至った意を表わす〉・・・なので。(例:「やがて散りぬるくとて>花恨む人やはある」=きっとすぐ散ってしまうからといって、桜の花に不平を言う人がどこにいるだろうか) (5)〈(地位・名称)物事の名前や人の役職名などを表わす〉・・・という名で。(例:「便乱坊くとて>いとあさましき見せ物の江戸にあなる」=べらんぼうという名のとても見苦しい見せ物が江戸にいるとかいう話である)

【な】・・・上代語(造語成分)〈(上代)(場所・状態)(位置・属性などを表わす語の下に付けて)連体修飾語を形成する〉・・の。(例:「まなこ」=めんたま)

【つ】・・・上代語(造語成分)〈(上代)(所属・状態)(時・位置・属性などを表わす語の下に付けて)連体修飾語を形成する〉・・の。(例:「沖つ白波」=沖合に立つ白い波)

14種存在する「副助詞」の全てを語呂合わせで覚えるつもりなら、《**後夕二等さえ下ばかり包まで擦らし(って)程だも(ん)して~がな》**=【のみ】【だに】【など】【さへ】【しも】【ばかり】【づつ】【まで】【すら】【し】【ほど】【だも】【して】【がな】で棒暗記すればよく、各助詞の語義を、現代日本語と同一/奈良・室町期のものは割愛して古典時代特有のもののみに絞り込み、「例文(筆者謹製自作版)」付きで書き出せば、次のようになる:

-要暗記「古典副助詞」語義・訳語一覧-

【のみ】(2)〈(強調)(他のものを除外する意を特に含まずに)文意を強める働きをする〉ただもう・・・。(例:「いかで御許(おもと)は猫のみいたはる」—「あさましくなりし人の形見(かたみ)ともおぼゆれば、いみじうかなしうてただいたはりくのみ>せらる」=どうしてあなたは猫ばっかかわいがるの?—亡くなった人の忘れ形見にも感じられるので、ひどく愛しくてそれはもう自然と可愛がりたくなるの)

【だに】(1)〈(最低限の希望)(願望・意志・命令・仮定・打消などの表現を伴って)希望する事柄の中でも、実現が最も容易だと思われる事態を想定して、願いの切実さを強調する〉せめて・・・だけでも。(例:「逢へずとも文〈だに〉おこせ」=会えな〈てもせめて手紙ぐらい送れ)(【など】・・・現代日本語と同一語義=ノーマークで可)

古文の理 ―索引―

<あ>

【あひだ】(接続助詞)

11-005 (p206)

「あらまほし」の二態

10-11 (p140-141)

<い>

イ音便 07-002(p81-82)

已然形(識別法) 02-006(p19)

已然形(概説) 05-005(p60)

已然形係り結び 02-006(p19),

05-005A (p61-62)

已然形による逆接確定条件

05-005B (p62-63)

已然形による順接仮定条件

05-005C (64-65)

已然形による順接確定条件

05-005C (p63-65)

已然形による順接恒常条件

05-005C (p64-65)

いろはにほへととあいうえお

08-001 (p88-90)

<う>

ウ音便 03-004(p23),

05-002A(p37), 07-003(p83)

<え>

婉曲 05-003B(p44),

10-009 (p130), 10-012 (p147-148),

10-020 (p165-167), 10-026 (p183)

<お>

「多かり」 03-003 (p22)

音便(概説) 07-001(p80-81)

<か>

【か】(係助詞) 11-004(p202)

【か】(終助詞) 11-006(p209)

【が】(格助詞) 11-002(p197)

【が】(接続助詞) 11-005(p204)

主格格助詞「が」・「の」の限定性

10-026 (p192-193)

係助詞(かかりじょし/けいじょし)

02-005 (p18-19)

係助詞(全用法)

11-004 (p202-203)

係り結び 02-005 (p18-19)

係り結びの係り捨て

05-005E (p67-68)

力行変格活用 06-002(p72),

06-008 (p77)

隠し題 10-008(p129)

「確述」と「完了」の相違

10-019 (p163-164)

格助詞(全用法)

11-002 (p197-200)

【かし】(終助詞) 11-006(p209)

活用(概説) 02(p16-20)

活用語 01-001(p11)

活用語尾 p20

仮定形 05-005C(p64-65),

05-005D (p65-67)

仮定条件 03-002(p21)

「がてに」 10-010 (p138-139)

【がてら】(接続助詞)

11-005 (p206)

【かな】(終助詞) 11-006(p208)

【がな】(副助詞) 11-003(p202)

【がな】(終助詞) 11-006(p210)

【かは】(係助詞) 11-004(p202)

【かは】(終助詞) 11-006(p208)

上一段活用 06-002(p71),

06-004 (p75-76)

上二段活用 06-002(p71-72),

06-006 (p76)

【かも】(係助詞) 11-004(p203)

【かも】(終助詞) 11-006 (p208)

【から】(格助詞) 11-002(p198)

【からに】(接続助詞)

11-005 (p206)

カリ活用(形容詞補助活用)

03-002 (p21-22), 03-003 (p22),

06-011 (p78)

感動詞 01-002(p13-14),

04-004 (p31)

古典「感動詞」一覧

12-004 (p227-231)

間投助詞(全用法) 11-007(p210)

「願望」の「まし」

10-013 (p148-149)

「完了」と「確述」の相違

10-019 (p163-164)

くき>

【き】(助動詞) 09-005(p110)

助動詞「き」(直接体験過去)

10-014 (p149-150)

助動詞「き」(接続の特殊性)

10-014 (p150-151)

心理的フェーズ語としての助動詞

「き」10-014(p151-153)

仏教説話の断定過去的「き」

10-015 (p153-155)

助動詞「き」(追憶・懐旧・惜別)

10-015 (p155)

疑問の表現 05-004G(p52-53)

逆接確定条件 02-006(p19),

05-003C-3 (p45), 05-005 (p60-61),

10-10-5A (p139), 10-026 (p182)

逆接仮定条件

05-003C-4 (p45-46)

禁止の表現 05-003C-2(p45)

<<>

ク活用 02-001(p16),

03-002 (p21-22),

03-004 (p22-23),

ク活用語幹連体修飾用法

03-006 (p24)

ク活用語幹文末詠嘆用法

03-007 (p25-26)

ク活用語頭用法 03-005(p23-24)

ク語法 05-001-4(p35),

10-010 (p138), 10-11 (p140),

10-026 (p178-179)

<け>

係助詞(けいじょし)→かかりじょし

形容詞・形容動詞の名詞化作法

05-002E (p39)

形容詞の定義 03-001(p21)

形容詞補助活用(カリ活用)

03-002 (p21-22), 03-003 (p22),

10-026 (p188-190)

形容動詞 01-001(p14),

04-001 (p29)

形容動詞語幹の文末詠嘆用法

04-004 (p31-32)

形容動詞語幹の連体修飾用法

04-005 (p32)

形容動詞ナリと断定助動詞ナリの

違い 04-003(p31)

形容動詞連用形副詞用法

04-002 (p30)

【けむ】(助動詞) 09-005(p110)

「けむ」と「らむ」とはうりふたつ

10-016 (p155-156)

「けむ」と「らむ」の具体的用法

10-016 (p158)

【けらし】(助動詞) 09-005(p111)

「けらし」の語源 10-023(p175)

【けり】(助動詞) 09-005(p110)

助動詞「けり」(間接体験過去) 10-014(p149-150)

助動詞「けり」(気付き・詠嘆)

10-014 (p150)

心理的フェーズ語としての助動詞 「けり」 10-014(p151-153) <=> 語幹 p20 【こす】(助動詞) 09-005(p112) 【こそ】(係助詞) 11-004(p203) 【こそ】(間投助詞) 11-007(p210) 上代の「こそ+形容詞連体形」係り 結び 10-023(p173) 【ごとくなり】【ごとし】(助動詞) 09-007 (p116) 「比況」の「同(ごとし)」・「様(やうな り)」は「格助詞」がお好き 10-024 (p175-176) 「同(こと)ならば」10-024(p176) <さ> サ行変格活用 06-002(p73), 06-009 (p77) 「尊敬」の「す・さす」は独立した助 動詞か? 10-002(p118-119) 「す・さす」の「使役」が「受身」にな る場合 10-003(p119-120) 「す・さす」の「使役」が「謙譲」にな **るのは何故?** 10-004(p120-121) させる 06-009(p77) 【さへ】(副助詞) 11-003(p201) <し> 【し】(副助詞) 11-003(p201) 【じ】(助動詞) 09-004(p109) 【しが】(終助詞) 11-006 (p208) ジンマシンムズムズン(「じ」・「む」・ 「まじ」・「むず」+「べし」)の関係 10-006 (p122-126) 有意志/無意志の「じ」・「む」・「ま じ」・「むず」+「べし」 10-007 (p126) シク活用 02-001(p16), 03-002 (p21-22), 03-004 (p22-23) シク活用語頭用法 03-005 (p23-24) シク活用終止形連体修飾用法 03-006 (p24-25) シク活用終止形文末詠嘆用法 03-007 (p25) 【して】(格助詞) 11-002(p199) 【して】(副助詞) 11-003 (p202)

下二段活用 06-002(p72), 06-007 (p76) 終助詞(全用法) 11-006 (p207-210) 終止形(識別法) 02-004(p18) 終止形による助詞への接続 05-003C (p44-47) 終止形による助動詞への接続 05-003B (p43-44) 終止形による文章の終止 05-003A (p42) 「終止形+な」による強調的否定命 **令文** 10-010(p133-134) 【しむ】(助動詞) 09-004 (p107-108) **順接仮定条件** 05-001-3(p34), 05-003C-4(p45-46), 10-010 (p137) 順接確定条件 02-006(p19), 05-001-3 (p34), 05-005 (p60-61), 10-10-5B (p139-140) 畳語 03-004(p22), 04-003(p31) 助詞 01-004(p14) 助詞の定義と種類 11-001 (p195-196) 女性仮託=虚構オカマ 10-012 (p143) 助動詞 01-002(p12-13), 01-004 (p14) 助動詞総覧(終止形接続) 09-006 (p112-115) 助動詞総覧(未然形接続) 09-004 (p106-109) 助動詞総覧(連体形接続) 09-007 (p115-116) 助動詞総覧(連用形接続) 09-005 (p110-112) 助動詞と補助動詞の定義 09-001 (p99-100) 助動詞の三分類 09-002 (p100-101) 助動詞(補助動詞)の文中での登 場位置 09-003(p102-105) <す> 【す】(さす】(助動詞) 09-004 (p107) 「自発」の「る・らる」/「使役」の 「す・さす」が「尊敬」の意になるの

「す・さす」の「使役」が「受身」にな る場合 10-003(p119-120) 「す・さす」の「使役」が「謙譲」にな **るのは何故?** 10-004(p120-121) 【ず】(助動詞) 09-004(p109) 否定命令文「な~そ」と否定助動詞 「ず」の関係 10-010(p130-140) 推量=未然形接続/推定=終止 形接続 05-003B(p44), 09-003-**IV** (p103) 「ずは・なくは」 10-010(p136-138) 【すら】(副助詞) 11-003(p201) <せ> **正格活用** 06-002(p70-72) 古典「接続詞」一覧 12-005 (p232-234) 接続助詞 01-001(p14) 接続助詞(全用法) 11-005(p204) 接尾語と助詞の相違 11-001 (p195-196) せさす 06-009(p77) せらる 06-009(p77) <そ> 【そ】(終助詞) 11-006(p209) 【ぞ】(係助詞) 11-004(p202) 【ぞ】(終助詞) 11-006(p209) 否定命令文「な~そ」と否定助動詞 「ず」の関係 10-010(p130-140) 「連用形+~そ」による否定命令文 10-010 (p131) ぞ 02-005(p18) 促音 08-002-5 (p94-96) 促音便 07-004(p84) 促音無表記 07-004(p84) **くた> 体言** 05-004(p47) 体言+形容詞「ク活用/シク活用」 語幹+「み」 03-008 (p26-28), 10-022 (p170-171) 体言+形容詞「ク活用/シク活用」 語幹+「み」+「す(為)/おもふ (思ふ)」 03-009 (p28) **代名詞** 01-002(p11-13) 古典「代名詞」一覧 12-001 (p212-219) 濁音無表記 08-001(p89), 08-002-5 (p94) 【たし】(助動詞) 09-005(p112) 「たし」=「甚し」 10-017(p160) 【だに】(副助詞) 11-003(p200) 【だも】(副助詞) 11-003 (p202)

06-005 (p76)

【して】(接続助詞) 11-005(p207)

【しも】(副助詞) 11-003(p201)

下一段活用 06-002(p71),

は何故? 10-001(p117-118)

動詞か? 10-002 (p118-119)

「尊敬」の「す・さす」は独立した助

【な】(間投助詞) 11-007(p210) 【たり:断定】【なり:断定】(助動詞) <ぬ> 09-007 (p115) ナ行変格活用 06-002(p73), 【ぬ】【つ】(助動詞) 09-005(p111) 断定助動詞「たり」・「なり」の用法 06-010 (p78) 「ぬ」「つ」の用法 10-019(p163) 【ながら】(接続助詞) 「ぬ」「つ」の語源学的相違 10-025 (p176-177) 10-019 (p164) 断定「たり」と完了「たり」の区分 11-005 (p205) 10-025 (p177) 「なくに」 10-010(p138) ぬべし 10-019(p163-164) 【たり:完了】【り】(助動詞) 「なくは・ずは」 10-010(p136-138), <の> 主格格助詞「の」・「が」の限定性 09-005 (p111-112) 10-012 (p142) 「たり:完了」・「り」の用法 否定命令文「な~そ」と否定助動詞 10-026 (p192-193) 10-018 (p161) 「ず」の関係 10-010(p130-140) 【の】(格助詞) 11-002(p197) 「四段/サ変」以外への接続の必 「な+動詞連用形」による上代の否 【のみ】(副助詞) 11-003(p200) 要上生まれた「たり」 定命令文 10-010(p133) 【のみ】(終助詞) 11-006(p208) 10-018 (p163) 【など】(副助詞) 11-003(p201) <は> タリ活用 02-001(p16), 【なへに】(接続助詞) 【は】(係助詞) 11-004(p203) 04-002 (p29-30), 04-003 (p31),11-005 (p207) 【は】(終助詞) 11-006(p209) 06-011 (p78-79) 「なまし・てまし」 【ば】(係助詞) 11-004(p202) <ち> 10-012 (p144-145), 10-013 (p149) 【ば】(接続助詞) 11-005(p205) 中国語(漢字)の時制明示不可能 【なむ】(係助詞) 11-004(p202) 【ばかり】(副助詞) 11-003(p201) 性 10-014(p152-153) 【なむ】(終助詞) 11-006(p210) ハ行転呼 08-002-3(p92), <つ> ならく 10-026(p179-180) 08-002-4 (p92-94) 【つ】(造語成分) 11-002(p200) 【ならし】(助動詞) 09-007(p115) **撥音便** 05-004E(p51), 【つ】(接続助詞) 11-005(p205) 「ならし」の語源 10-023(p175) 05-004J-4(p58-59), 【つつ】(接続助詞) 11-005(p205) 【なり:断定】【たり:断定】(助動詞) 07-005 (p85-88), 10-020 (167-168), 10-021 (p170), 【づつ】(副助詞) 11-003(p201) 09-007 (p115) 【つ】【ぬ】(助動詞) 09-005(p111) 断定助動詞「なり」・「たり」の用法 10-023 (173-175), 「つ」「ぬ」の用法 10-019(p163) 10-025 (p176-177) 10-026 (p187-192), 「つ」「ぬ」の語源学的相違 【なり:推量】【めり】(助動詞) 10-026 (p188-190), 10-019 (p164) 09-006 (p112-113) 10-026 (p190-192) つべし 10-019(p163-164) 「なり:推量」・「めり」の用法 撥音無表記 07-005 (p85-88), 妻問婚 10-012(p143) 10-020 (p164-168) 10-020 (167-168), 10-021 (p170), 「なり」の「推量」vs.「断定」見分け **くて>** 10-023 (173-175), 【て】(接続助詞) 11-005(p207) **法** 10-026 (p177-193) 10-026 (p187-192), 【で】(格助詞) 11-002(p199) 「AなるB」の表現 10-026 (p188-190), 【で】(接続助詞) 11-005 (p206) 10-026 (p180-181) 10-026 (p190-192) 【てしか】(終助詞) 11-006(p208) ラ変動詞+「なり」 【はや】(終助詞) 11-006(p208) 「てまし・なまし」 10-026 (p187-188) 【ばや】(終助詞) 11-006(p208) 10-012 (p144-145), 10-013 (p149) 形容詞型活用語+「なり」 **反語** 05-004G(p54-55) 10-026 (p188-190) 【ても】(接続助詞) 11-005(p206) **反実仮想** 10-012(p141-148) < 2> 否定助動詞「ず」+「なり」 <ひ> 【と】(格助詞) 11-002(p199) 10-026 (p190-192) 非活用語 01-001(p11) 【と】(接続助詞) 11-005(p206) ナリ活用 02-001(p16), 否定命令文「な~そ」と否定助動詞 【ど】(接続助詞) 11-005(p205) 04-002 (p29-30), 04-003 (p31), 「ず」の関係 10-010(p130-140) 動詞(概説) 01-002(p12-13), 06-011 (p78-79) 品詞 01-001(p11), 06-001 (p70) <に> 01-002 (p11-14), 01-003 (p14) 動詞活用形 06-002(p70-74) 【に】(格助詞) 11-002(p198) <ふ> 【とて】(格助詞) 11-002(p200) 【に】(接続助詞) 11-005(p206) 副詞 01-001(p14), 03-004(p23) 【とも】(接続助詞) 11-005(p205) 形容動詞&断定助動詞「なり」連用 副助詞(全用法) 【ども】(接続助詞) 11-005(p205) 形の「に」 10-026 (p185-187) 11-003 (p200-202) <な> 【にしか】(終助詞) 11-006(p208) 武家の負け惜しみ表現

【な】(造語成分) 11-002(p200)

【な】(終助詞) 11-006(p209)

10-003 (p119-120)

【にて】(格助詞) 11-002(p199)

<^> 未然形(識別法) 02-002(p17) 【やは】(係助詞) 11-004(p203) 【へ】(格助詞) 11-002(p198) 未然形(用法詳説) 【やは】(終助詞) 11-006(p208) 【べかし】(助動詞) 09-007(p116) 05-001 (p33-36) <よ> 【べし】(助動詞) 09-006(p114) 【よ】(終助詞) 11-006(p209) <む> 「べし」の用法 10-021(p168-170) 【む】【むず】(助動詞) 【よ】(間投助詞) 11-007(p210) 「べし」の音便形 10-021(p170) 09-004 (p108) **拗音** 08-002-5 (p94-96) ジンマシンムズムズン(「じ」・「む」・ ジンマシンムズムズン(「じ」・「む」・ 用言 05-004(p47) 「まじ」・「むず」+「べし」)の関係 「まじ」・「むず」+「べし」)の関係 四段活用 06-002(p71), 10-006 (p122-126) 10-006 (p122-126) 06-003 (p75) 有意志/無意志の「じ」・「む」・「ま 有意志/無意志の「じ」・「む」・ 【より】(格助詞) 11-002(p199) <ら> じ」・「むず」+「べし」 「まじ」・「むず」+「べし」 10-007 (p126) 10-007 (p126) ラ行変格活用 03-003(p22), 【べらなり】(助動詞) 「む」「むず」の「おねだり型命令文」 04-002 (p29-30), 05-004J-3, 09-006 (p115) 10-008 (p126-129) 4(p58-59), 06-002(p73),「べし」派生語としての中古限定表 「む」・「むず」の「婉曲」 06-011 (p78-79) 現「ベみ」と「べらなり」 ラ変動詞連体形接続の二態 10-009 (p130) 10-022 (p170-171) <め> 10-023 (p173-176) **変格活用** 06-002(p70, 72-73) **名詞** 01-002(p11-12) 【らし】(助動詞) 09-006(p113) 命令形(識別法) 02-007(p20) 「らし」の用法 10-023(p171-173) <ほ> 補助動詞 01-002(p12-13), 【らむ】(助動詞) 09-006(p113) 命令形(用法詳説) 01-004(p14), 06-012(p79-80) 05-006 (p68-69) 「らむ」と「けむ」とはうりふたつ 補助動詞と助動詞の定義 【めり】【なり:推量】(助動詞) 10-016 (p155-156) 09-001 (p99-100) 09-006 (p112-113) 「らむ」の来歴と終止形接続の理由 古典「補助動詞」一覧 「めり」・「なり:推量」の用法 10-016 (p156-158) 10-020 (p164-168) 「らむ」と「けむ」の具体的用法 12-002 (p220-224) 【ほど】(副助詞) 11-003(p202) <も> 10-016 (p158) 【ほどに】(接続助詞) 「原因推量らむ」の「疑問詞省略」語 【も】(係助詞) 11-004(p203) 【も】(接続助詞) 11-005(p206) 法(詩文型「らむ」) 11-005 (p207) 本動詞 06-012(p79) 【も】(終助詞) 11-006(p209) 10-016 (p158-160) <ま> 【もが】(終助詞) 11-006 (p209) 平安末期までの「可能」の「る・ら 【まし】(助動詞) 【ものか】(終助詞) 11-006(p208) る」は疑否専表現 10-005(p122) 09-004 (p108-109) 【ものから】(接続助詞) <り> 【まじ】(助動詞) 11-005 (p204) 【り】【たり:完了】(助動詞) 【ものの】(接続助詞) 09-005 (p111-112) 09-006 (p113-114) ジンマシンムズムズン(「じ」・「む」・ 11-005 (p206) 「り」・「たり:完了」の用法 【ものゆゑ】(接続助詞) 「まじ」・「むず」+「べし」)の関係 10-018 (p161) 「り」の来歴と接続上の注意点 10-006 (p122-126) 11-005 (p205) 有意志/無意志の「じ」・「む」・「ま 【ものを】(接続助詞) 10-018 (p161-162) じ」「むず」+「べし」 11-005 (p204) <る> 10-007 (p126) 【ものを】(終助詞) 11-006(p209) 【る】【らる】(助動詞) 「ましかば~まし」の「反実仮想」 <や> 09-004 (p106-107) 10-012 (p141-148) 「自発」の「る・らる」/「使役」の 【や】(係助詞) 11-004(p203) 「まし」による「願望」 【や】(接続助詞) 11-005(p207) 「す・さす」が「尊敬」の意になるの 10-013 (p148-149) 【や】(終助詞) 11-006(p209) **は何故?** 10-001(p117-118) 【まで】(副助詞) 11-003(p201) 【や】(間投助詞) 11-007(p210) 平安末期までの「可能」の「る・ら 【まほし】【まうし】(助動詞) る」は疑否専表現 10-005(p122) 【やうなり】(助動詞) 09-004 (p109) 09-007 (p115-116) <*h>>* 「まほし」と「まうし」と「あらまほし」 「比況」の「様(やうなり)」・「同(ごと 歴史的仮名遣い 08-002(p90-98), 10-11 (p140-141) し)」は「格助詞」がお好き TEST (p341-344) <み> 10-024 (p175-176) 連語 01-002(p12-13), 01-003 (p14), 01-004 (p14) 【み】(接続助詞) 11-005(p204) 【やな】(終助詞) 11-006(p209)

連体形係り結び 02-005(p18-19), 05-004E(p50-51), 05-004F(p51-52), 05-004G(p53-55), 05-005H(p56),05-005I (p56-57) 連体形(識別法) 02-005(p18-19) 連体形接続語句が連用形に接続 する理由 05-002E(p39), 05-002F-2(p40-41), 05-003C-3 (p45) 連体形接続助詞 05-004K (p59-60) 連体形接続助動詞 05-004J (p57-59) 連体形による準体法 05-004B(p48), 05-004C(p49), 05-004D(p50), 10-012(p148), 10-026 (p178, 179, 192) 連体形による連体法 05-004A (p48)

連体形の終止形化現象

05-004G(p53), 06-002(p74) 連体詞 01-002(p12-13)

古典「連体詞」一覧

12-003 (p225-226)

連用形(識別法) 02-003(p17) 連用形(概説) 05-002(p36)

「連用形+~そ」による否定命令文

10-010 (p131, 134)

連用形による動詞の名詞化

05-002E (p39)

連用形による助動詞・助詞への接

続 05-002F(p39-42)

連用形の対偶中止法

05-002C (p38)

連用形の対偶否定法

05-002D (p38)

連用形の中止法

05-002B (p37-38),

10-10-5A (p139)

連用形の副詞法(連用法)

05-002A(p37)

<ゐ・ヰ>

ゐ・中文字 08-001(p90),

08-002 (p97-98)

<ゑ・ヱ>

ゑ・ヱ文字 08-001(p90),

08-002 (p97-98)

くを>

【を】(格助詞) 11-002(p197)

【を】(接続助詞) 11-005(p204)

【を】(終助詞) 11-006 (p209) 【を】(間投助詞) 11-007 (p210)

> 歌よみ心得 ---索引---

> > <あ>

赤染衛門(あかぞめゑもん)

03-006 (p301)

挙げ句 00-001(p238),

00-004 (p244), 02-001 (p274)

在原業平(ありはらのなりひら)

01-004 (p249), 03-006 (p299)

在原行平(ありはらのゆきひら)

03-006 (p299)

<<\r\>

幽玄体(いうげんてい)

02-001 (p274)

『伊勢物語』(いせものがたり)

00-003 (p240), 01-004 (p248-250),

03-006 (p299), 03-006 (p301)

一句 00-001 (p238)

一首 00-001 (p238)

一条天皇(いちでうてんわう)

00-003 (p241), 01-005 (p252),

02-012 (p290), 03-003 (p294)

和泉式部(いづみしきぶ)

02-006 (p281)

『犬筑波集』(いぬつくばしふ)

00-004 (p244)

『今物語』(いまものがたり)

01-012 (p272)

院政期 00-004(p243)

<う>

歌物語 01-004(p248-250)

『宇治拾遺物語』(うぢしふゐもの

がたり) 00-003 (p241)

歌 00-002 (p238)

歌合せ 03-006(p299-303)

謡い(うたい) 00-001(p239)

歌枕 01-006 (p253-256),

01-008 (p261)

<え>

『栄花物語』(えいぐゎものがたり)

03-006 (p301)

縁語 01-008(p257),

01-010 (p265-268), 02-004 (p277,

278), 03-001 (p291)

<お>

凡河内躬恒(おほしかふちのみつ

ね) 00-003(p240), 03-004(p298),

03-005 (p299)

念人(おもひびと) 03-006(p300)

<か>

講師(かうじ) 03-006(p300)

係り結び 01-011(p268-271)

柿本人麻呂(かきのもとのひとま

ろ) 01-012 (p271-272)

隠し題 03-001(p291-293)

掛詞(かけことば) 01-008(p257),

01-009 (p263-265), 01-010 (p267,

268), 02-010 (p285)

歌仙(三十六句鎖連歌)

00-004 (p243)

歌僧 03-003 (p295)

歌体(かたい) 00-004(p242)

勝(かち) 03-006(p300)

仮名序(古今集) 01-004(p249,

250), 01-008 (p260)

上の句 00-001 (p238),

00-004 (p242-243)

歌謡 00-002 (p239)

片歌 00-002(p239)

歌徳説話 00-003(p240-241),

01-012 (p272), 02-009 (p284)

唐歌(からうた) 00-002(p238),

00-003 (p240), 03-004 (p297)

方人(かたうど) 03-006(p300,

302)

漢詩文 00-002(p238),

00-003 (p240-242), 01-004 (p249),

01-008 (p262), 03-001 (p292, 293),

03-004 (p297), 03-005 (p299)

冠辞(枕詞) 01-007 (p256)

換喩 02-003 (p275-276)

くき>

季語 00-004(p244)

擬人法 02-002(p274-275)

紀貫之(きのつらゆき)

00-003 (p240-241),

01-004 (p249-250),

01-008 (p260-261), 02-008 (p283),

03-004 (p298), 03-005 (p299)

紀友則(きのとものり)

00-003 (p240), 03-004 (p298),

03-005 (p299)

逆喩 02-011(p286-288) 『玉葉和歌集』(ぎょくえふわかし ふ) 03-003(p296) 『金葉和歌集』(きんえふわかしん

『金葉和歌集』(きんえふわかしふ) 00-004(p244), 02-003(p275), 03-003(p295)

<<>

句切れ 01-002(p246-247), 02-005(p279) 『菅家後集』(くわんけごしふ) 00-003(p242) 『菅家文草』(くわんけもんざふ) 00-003(p242)

<け>

敬語の排除 02-003 (p276) 結番(けちばん) 03-006 (p302) 結句 00-001 (p238) 『源氏物語』(げんじものがたり) 00-003 (p241), 01-005 (p252) 兼題 03-005 (p298), 03-006 (p301)

<=>

『古今和歌集』(こきんわかしふ)

00-001 (p238), 00-003 (p240, 241, 242), 01-004 (p249), 01-007 (p256), 01-008 (p260), 02-007 (p282, 283), 02-011 (p288), 03-001 (p291, 292), 03-003 (p293, 294), 03-004 (p297, 298), 03-005 (p298-299), 03-006 (p299,

心(こころ・しん) 00-004(p242) 『古今著聞集』(ここんちょもんじ

ふ) 02-009 (p284)

301, 302–303)

小式部内侍(こしきぶのないし)

02-006 (p281)

『後拾遺和歌集』(ごしふゐわかし

ふ) 03-003 (p294)

腰折れ歌 00-004(p242)

『後撰和歌集』(ごせんわかしふ)

01-005 (p252), 03-003 (p294),

03-005 (p299), 03-006 (p301)

言霊(ことだま) 02-003 (p276)

詞書き(ことばがき)

01-003 (p247-248),

 $01\text{--}004\,(\text{p}248\text{--}249)\,,\ \ \, 02\text{--}004\,(\text{p}277)\,,$

02-008 (p283), 03-003 (p294)

後鳥羽院(ごとばゐん)

02-011 (p286-287), 03-003 (p295), 03-006 (p302)

籠め題(こめだい)

03-001 (p291-292)

<5>

『在民部卿家歌合』(ざいみんぶきゃうけうたあはせ) 03-006 (p299) 錯綜(さくそう) 02-012 (p288-290) 左注 01-003 (p247), 02-012 (p290)

『三五代集』(さんじふごだいしふ) 03-003(p295)

『三十六人撰』(さんじふろくにんせん) 01-005(p252)

三蹟(さんせき) 02-012(p290) 散文的縁語 01-010(p265-266)

<し>

字余り 01-001 (p245-246), 01-011 (p271)

『詞花和歌集』(しかわかしふ)

03-003 (p295)

敷島の道 00-002(p238),

00-004 (p243)

「シク活用形容詞終止形+名詞」の

上代語法 01-012(p272)

視差(変位・パララックス)

02-007 (p282-283)

時差(タイムラグ)

02-008 (p283-284)

字足らず 01-001(p245-246),

01-011 (p269)

七五調 01-001(p245)

十三代集 03-003 (p294)

『拾遺抄』(しふゐせう)

03-003 (p294)

『拾遺和歌集』(しふゐわかしふ)

01-005 (p252), 01-012 (p271),

03-003 (p294), 03-005 (p299),

03-006 (p302)

下の句 00-001 (p238),

00-004 (p242-243)

「終止形」による「連体形」代用表現

01-012 (p271-273)

衆議判(しゅぎはん)

03-006 (p300)

『続古今和歌集』(しょくこきんわか

しふ) 03-003 (p296)

『続後拾遺和歌集』(しょくごしふゐ

わかしふ) 03-003 (p296)

『続後撰和歌集』(しょくごせんわか

しふ) 03-003 (p296)

『続拾遺和歌集』(しょくしふゐわか

しふ) 03-003 (p296)

『続千載和歌集』(しょくせんざいわ

かしふ) 03-003 (p296)

序詞(じょことば)

01-008 (p256-262)

白川院(しらかわゐん)

03-003 (p295)

心(しん・こころ) 00-004(p242)

『新葉和歌集』(しんえふわかしふ)

(准勅撰) 03-003(p296)

新儀非拠達磨歌(しんぎひきょだる

まうた) 02-011(p288)

『新古今和歌集』(しんこきんわかし

\$\) 01-005 (p252, 253),

02-001 (p273-274),

02-007 (p282-283),

02-011 (p286-288), 03-003 (p294),

03-003 (p295), 03-006 (p302-303)

『新後拾遺和歌集』(しんごしふゐ

わかしふ) 03-003 (p296)

『新後撰和歌集』(しんごせんわか

しふ) 03-003 (p296)

『新拾遺和歌集』(しんしふゐわか

しふ) 03-003 (p296)

『新続古今和歌集』(しんしょくこき

んわかしふ) 03-003 (p296)

『新千載和歌集』(しんせんざいわ

かしふ) 03-003 (p296)

『新勅撰和歌集』(しんちょくせんわ

かしふ) 03-003 (p296)

<す>

菅原道真(すがはらのみちざね)

00-003 (p240, 242), 02-002 (p275)

墨滅歌(すみけちうた)

03-001 (p292)

末(すゑ) 00-001(p238)

末や如何に 00-004(p242)

<せ>

制詞 01-005(p253)

清少納言(せいせうなごん)

02-011 (p287)

旋頭歌(せどうか) 00-002(p239)

蝉丸(せみまる) 01-012(p272),

02-007 (p282)

遷移(グラデーション)

02-009 (p284-285), 02-012 (p290)

千句(一千句鎖連歌)

00-004 (p243)

『千五百番歌合せ』(せんごひゃく

ばんうたあはせ) 03-006(p302)

『千載和歌集』(せんざいわかしふ) 01-005 (p252, 253), 02-001 (p273-274), 03-003 (p295) 川柳 00-001 (p238),

00-002 (p239), 00-004 (p244-245)

<そ>

双本歌(そうほんか)

00-002 (p239)

くた>

躰(たいてい) 00-004 (p242) 題詠 03-005 (p298-299) 体言止め 02-001 (p273-274) 当座(たうざ) 03-005 (p298), 03-006 (p301)

対置法 02-006(p280-281) 大宰権帥(だざいのごんのそち)

02-002 (p275)

畳み掛け 02-004(p277-278) **短歌** 00-001(p238), 00-002(p239), 00-004(p243, 244, 245)

短連歌 00-004(p243)

<5>

持(ぢ) 03-006(p300) 『竹馬狂吟集』(ちくばきゃうぎんしふ) 00-004(p244) 中古三十六歌仙 01-005(p252) 長歌 00-002(p239) 長連歌(鎖連歌) 00-004(p243) 勅撰和歌集 00-003(p240), 00-004(p244), 03-002(p293),

<つ>

対句 02-006(p280) 筑波の道 00-004(p242-243) 『津守集』(つもりしふ) 03-003(p296)

03-003 (p293-297)

くて>

躰(てい・たい) 00-004(p242) 『天徳四年内裏歌合』(てんとくよねんだいりうたあはせ)

03-006 (p301)

<<>>

頭韻 02-004(p277-278) 韜晦趣味(とうかいしゅみ)

02-011 (p286-288)

倒置法 02-005 (p278-280)

頭辞(枕詞) 01-007(p256)

『土佐日記』(とさにっき)

00-003 (p240, 241), 01-004 (p250)

頓呼法(とんこほう)

02-003 (p275-276)

<な>

長歌 00-002(p239) 梨壺の五人 03-003(p294),

03-005 (p299)

<は>

俳諧連歌 00-001(p238),

00-004 (p243-244)

俳句 00-001(p238),

 $00-002\,(\mathrm{p}239)\,,\ \ \, 00-004\,(\mathrm{p}244-245)\,,$

02-001 (p274)

『白氏文集』(はくしもんじふ)・白楽

天(白居易) 01-005(p252),

01-008 (p261)

八代集 03-003 (p294)

パララックス(視差・変位)

02-007 (p282-283)

判詞(はんし) 03-006(p300, 302) 判者(はんじゃ) 03-006(p300,

302)

<ひ>

披講(ひかう) 03-006(p300)

左方(先手) 03-006(p300)

百韻(百句鎖連歌) 00-004(p243)

百首歌 03-006 (p302)

屏風歌 03-004(p297-298)

屏風絵 03-004(p297)

<ふ>

『風雅和歌集』(ふうがわかしふ)

03-003 (p296)

部立(ぶだて) 00-004(p244), 03-002(p293), 03-003(p295)

藤原摂関政治 00-003 (p240)

藤原公任(ふぢはらのきんたふ)

01-005 (p252), 01-012 (p271),

02-003 (p275), 03-003 (p294)

藤原定家(ふぢはらのさだいへ・て

いか) 01-005 (p252-253),

01-008 (p258, 259), 02-001 (p273),

02-005 (p280), 02-011 (p288),

03-001 (p292), 03-004 (p298)

藤原時平(ふぢはらのときひら)

00-003 (p240), 02-002 (p275)

藤原俊成(ふぢはらのとしなり・しゅ

んぜい) 00-004(p244),

01-005 (p252), 02-001 (p273, 274),

02-011 (p288), 03-003 (p295)

藤原行成(ふぢはらのゆきなり・こ

うぜい) 02-012(p290)

藤原義孝(ふぢはらのよしたか)

02-012 (p289-290)

物名(ぶつめい・もののな)

03-001 (p291-292)

<^>

返歌 01-005(p251)

くほ>

放縦(license)

01-009 (p263-265), 01-012 (p273),

02-012 (p288)

発句(ほっく) 00-001(p238),

00-004 (p244), 02-001 (p274)

本歌取り 01-005 (p250-253)

本説取り 01-005 (p250-253)

<ま>

枕詞(まくらことば)

01-006 (p253-254), 01-007 (p256),

01-008 (p260-261)

『枕草子』(まくらのさうし)

02-011 (p287)

負(まけ) 03-006(p300)

正岡子規(まさおかしき)

03-005 (p298-299)

松尾芭蕉(まつをばせう)

00-004 (p244-245), 01-006 (p253)

前書き 01-003(p247)

万句(一万句鎖連歌)

00-004 (p243)

『万葉集』(まんえふしふ)

00-002 (p239), 01-007 (p256),

01-012 (p271), 02-003 (p276),

02-008 (p283), 03-003 (p293-294),

03-005 (p298, 299)

<み>

右方(後手) 03-006(p300)

(藤原氏)御子左家(みこひだりけ)

02-001 (p273)

三十一文字(みそひともじ)

00-001 (p238)

『御堂関白記』(みだうくわんぱくき)

01-008 (p262)

見立て 02-010(p285-286)

源俊頼(みなもとのとしより)

02-003 (p275), 03-003 (p295)

御火焼の翁(みびたきのおきな)

00-004 (p243)

壬生忠岑(みぶのただみね)

00-003 (p240), 02-011 (p288),

03-004 (p298), 03-005 (p299),

03-006 (p301)

<む>

村上天皇(むらかみてんわう)

03-006 (p301)

紫式部(むらさきしきぶ)

00-003 (p241), 01-005 (p252)

<も>

持(もち) 03-006(p300)

本(もと) 00-001(p238)

元歌 01-005(p250)

本や如何に 00-004(p242)

物名(もののな・ぶつめい)

03-001 (p291-292)

<や>

「やさし蔵人」 01-012(p272)

大和歌・倭歌(やまとうた)

00-002 (p238), 00-003 (p240)

日本武尊(やまとたけるのみこと)

00-004 (p243)

『大和物語』(やまとものがたり)

03-006 (p301)

山部赤人(やまべのあかひと)

01-012 (p271, 272)

<ゆ>

行方不明猫を呼び戻すまじない歌

01-008 (p259-260)

<よ>

呼び掛け法 02-003(p275-276) 世吉(四十四句鎖連歌)

00-004 (p243)

<り>

離合(りごう) 03-001(p292-293)

<れ>

連歌 00-001(p238),

00-002 (p239), 00-004 (p242-244),

03-003 (p295)

<わ>

和歌 00-001(p238),

00-002(p238-239), 00-004(p243)

和歌所(わかどころ)

03-003 (p294)

くを>

『小倉百人一首』(をぐらひゃくにん

いっしゅ) 01-005 (p250, 252),

01-006 (p254), 01-008 (p258),

01-011 (p269), 02-005 (p280),

02-012 (p290), 03-001 (p292),

03-004 (p298), 03-006 (p302)

折り句 03-001(p292)

暗記用語呂合せ

—索引—

《W》=和歌編、無印=文法編

<あ>

アイウエ四段;イエ一段&ウづい て二段の上下ペア:カサナラへん

06-002 (p74)

あたらシク、じょうごシクシク、こころシク、こころシク、こころなクよう、ク・シクも

ウ・シウ 03-004(p23)

ア未然は四段、ナ・ラ変; イ未然は イル上一の他は上二; エ未然は

下二、下一蹴ず、か、為ず;オ未

然は力変・・・ウ未然何も無し

06-002 (p74)

あわや益意の古き家、心得所あの

み上(他は嫌) 08-002(p97-98)

<い>

イ・ウ・撥・促=音便(誘発、即、音

便) 07-001 (p80)

家老ひ、ヘボい絵を、あわわ

08-002-2 (p91)

いろはにほへとちりぬるをわかよ たれそつねならむうゐのおくやま けふこえてあさきゆめみしゑひも

せす 08-001(p89)

<う>

ウケよくてよして 07-003 (p83)

<お>

己が絵に唐よりデートにてしてとて

夏 11-002(p197, 373)

おぼえられたまひつべきなり

09-003 (p105)

<か>

《かけことはたくてんつけはかくる

こと》 W01-009 (p264)

(かさならはまった)あわや外して

ヤイユエヨーおん 08-002-5 (p96)

彼はヤワ者か、カモにしか、ノミ手 しか・・・悲し一が、早々貸しやな。

物を貸そ一ぞ。よもや鼻モゲなむ

がな 11-006(p207, 381)

くき>

儀式四連足りて同意しなし給ふ

07-002 (p82)

期待体現かな敬意 07-002(p82)

<<>

クッシャロコ 01-001(p11)

くわんぐわん 08-002-5 (p96)

<さ>

サムライ侍り聞こえ申す、玉を給ふ

る奉る 09-003(p103)

<し>

《字余りは歌によくある事なれど字 足らず歌ぞ珍かなる》

W01-001 (p246)

蕁麻疹ズンズン、蹴る危険なるらし

混じらんべし 09-003(p104)

<す>

ずむけりなる、。ことぞなんどもば こそいざ 02-001(p16),

06-002 (p71), 06-003 (p75)

<t=>

《濁音も、濁点抜けば、清音なり・・・ 清音も、脈絡次第で、濁音なり・・・

されは、よみかなは、たくおんぬき

て、かくかよし》W01-009(p264)

《畳み掛け只見掛けだけ中身欠け》

W02-004 (p278)

くち>

地理平予測足りて動揺

07-004 (p84)

<つ>

「釣り足りぬ!」—「マジ借り!」ばっかり、目障―り! 09-003(p103)

<<>>

兎に角も三郎急で大丈夫。婦女子

関連攻めど、けど 01-001(p11)

くな>

《などなくも、あるがごとくに読むも

あるらむ》 W01-011(p271)

<の>

蚤ダニ等さえ下ばかり包まで擦ら

し(って)程だも(ん)して~がな

11-003 (p200, 375)

馬鹿は蚊なんぞこそはモヤモヤは

嫌かも 11-004(p202, 376)

花よ美味にでどれじだり

07-005 (p85)

<ひ>

日々見たり酔うて動揺

07-003 (p83)

<ほ>

ぼいんぞっこんかっぱさった

08-002-5 (p95)

<ま>

MYSTIR=未然(M)·連用(Y)·終止

(S) •連体(T) •已然(I) •命(R)

06-002 (p71)

<み>

見舞う星、用足し、名足りが如しの 体 09-003(p105)

<も>

物から物を拝みつつ、物故ながら 共々バッド、つうてもデートがてら に物の間も空にして、って程に無 いにゃ 11-005(p204, 378)

<ゆ>

揺ら揺らルルう、指し示す 09-003 (p102)

<わ>

我死なば世にも在らねば知らねど も身こそ身罷れ名こそ猶在れ 05-005C(p65)

くを>

親こそ酔うな 11-007(p210, 384)

短歌·俳句·古文 —索引—

「」=文法編 《》=和歌編 <あ>

「飽かなくにまだきも月の隠るるか 山の端にげて入れずもあらなむ」 『古今和歌集』雑上・八八四・在原業 平(p127)

《秋風になびく浅茅の末ごとにおく 白露のあはれ世の中》『新古今和 歌集』一八・雑歌下・一八五〇・伝 蝉丸(p282)

「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ」『新古今集』秋上・四一三・藤原顕輔(p39) 《秋深き/秋深し・・・・隣は何をする 人ぞ》松尾芭蕉(p246)

《明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな》 『後拾遺和歌集』恋二・六七二・藤原道信(p290)

《浅茅生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき》『後撰和歌集』恋一・五七七・源等(p258)「朝な朝な上がるひばりになりてしか都に行きてはや帰り来む」『万葉集』二〇・四四三三・安倍沙美麻呂(p41)

《朝ぼらけ有り明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪》『古今和歌集』冬・三三二・坂上是則(p255) 《朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木》『千載和歌集』冬・四二〇・藤原定頼(p274)

《あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む》 『拾遺和歌集』恋三・七七八・柿本人麻呂(p259, 271)

「あだなりと名にこそ立てれ桜花年 にまれなる人も待ちけり」『伊勢物 語』十七(p61-62)

「梓弓ま弓槻弓年を経てわがせし がごとうるはしみせよ」『伊勢物語』 二四(p28)

《青柳のみどりのいとをくりおきて 夏へて秋ははたおりぞ鳴く》『古今 著聞集』(p284)

《天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の影も隠らひ 照る月の 光も見えず白雲も い行きはばかり時じくぞ雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は》『万葉集』三・三一七・長歌・山部赤人(p239)《雨降らで月も照らなむ今宵なむいざ心みむ我や思ふと》之人冗悟(p384)

「あらざらむこの世の果ての思ひ 出にいまひとたびの逢ふこともが な」和泉式部(p238)

「嵐のみ吹くめる宿に花すすき穂 に出でたりとかひやなからむ」『蜻 蛉日記』藤原道綱母(p46)

《嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり》『後拾遺和歌集』秋下・三六六・能因法師(p254) 《有り明けの月だにあれやほととぎすただ一声の行く方も見む》『後拾遺和歌集』夏・一九二・藤原頼道(p255)

《ありし日を浮かべかなしきよすが さへ日々に消え行く今そ悲しも》之 人冗悟(p384)

《有馬山猪名の笹原風吹けばいで そよ人を忘れやはする》『後拾遺和 歌集』恋二・七〇九・藤原堅子 (p258) <い>

「いかでさることは知りしぞ」『枕草子』一六一・清少納言(p57) 《いかにても見しがと思ふ人ならで見しが無念の人にあふかも》之人 冗悟(p383)

「泉には手、足さしひたして、雪には降り立ちて跡つけなど・・・」『徒然草』一三七・吉田兼好(p39) 「一日にても出家の功徳、世に勝れめでたかんなるものを・・・」』『栄花物語』「ころものたま」赤染衛門(p166)

《いでかてに一人かも寝む雨の夜は月のあなたも袖そほつらむ》之 人冗悟(p378)

「いと夜深く侍りける鳥の声は、孟 嘗君のにや」『枕草子』一三六・清 少納言(p56)

「家にありたき木は、松、桜」『徒然 草』百三九・吉田兼好(p160) 「家の作りやうは、夏をむねとすべ し」『徒然草』五五・吉田兼好 (p44-45)

《いま来むといひしばかりに長月の有り明けの月を待ちいでつるかな》 『古今和歌集』恋四・六九一・素性法師(p280)

《今の世の中、色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなき言のみいでくれば・・・》『古今和歌集』仮名序(p260)

「今ははや恋ひ死なましをあひ見むと頼めしことぞ命なりける」『古今和歌集』恋・十二・六十三・清原深養父(p142)

「いみじうあはれに、心苦しう、見すてがたき事などを・・・」『枕草子』 ーニ四・清少納言(p37)

「いみじうぞあるや」『枕草子』三 五・清少納言(p53)

いろはにほへとちりぬるをわかよ たれそつねならむうゐのおくやま けふこえてあさきゆめみしゑひも せす(p89, 163)

<う>

《憂かりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを》『千載和歌集』恋二・七〇八・源俊頼(p275)

《美しき傾城艶めく大奥に光る源氏 の頭領/投了の声》之人冗悟 (p266)

《うたかたの うきよにうける うつ せみの いくよいくばく うたはかは らず》之人冗悟(p303)

「うづもれぬ名をながき世に残さむこそ、あらまほしかるべけれ」『徒然草』三八・吉田兼好(p44) 「海は荒るれども、心はすこし凪ぎぬ」『土佐日記』一月九日・紀貫之(p63)

「梅が香を袖に移してとどめてば春 は過ぐともかたみならまし』『古今 和歌集』春上・四六・読み人知らず (p34)

「梅の花咲き散る園にわれ行かむ 君が使ひを片待ちがてら」『万葉 集』十八・四〇四一・よみ人しらず (p42)

《恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ》 『後拾遺和歌集』恋四・八一五・相模(p270)

「うるはしみ我が思ふ君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも」『万葉集』二〇・四四五一・大伴家持(p28)

<え>

「えもいはずぞあさましきや」『枕草 子』八八・清少納言(p54) 《燕子楼中霜月夜秋来只為一人長》 (p261)

<お>

「翁、かぐや姫に言ふやう、『わが子の仏、変化の人と申しながら・・・」『竹取物語』二(p128) 《起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとてながめ暮らしつ》 『伊勢物語』二「西の京の女」 (p248)

《奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき》『古今和歌集』 秋上・二一五・猿丸大夫(p290) 《音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ》『金葉和歌集』恋下・四六九・一宮紀伊(p270)

《おどろけばひとりかたしくそでの はにけふもきぬらしわがなみだか な》之人冗悟(p267) 「思ひ出でてしのぶ人あらむほどこ そあらめ・・・」『徒然草』三〇・吉田 兼好(p46)

「おほかたの儀式などは、内裏に参り給はましに変はることなし」『源氏物語』「竹河」紫式部(p148) 《大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりせるかも》『万葉集』三・二三五・柿本人麻呂(p276) 「大伴御行の大納言は、・・・」『竹取物語』・六(p130)

<か>

「母様のことを悪く言ふと、たたくぞよ」歌舞伎『傾城浅間獄』(p46) 《かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを》『後拾遺和歌集』恋一・六一二・藤原実方(p257)

「神楽こそ、なまめかしく、おもしろ けれ」『徒然草』一六・吉田兼好 (p37)

「風の上にありかさだめぬちりの身はゆくへも知らずなりぬべらなり」 『古今和歌集』十八・雑下・九八九・よみ人しらず(p43)

《風をいたみ岩うつ波のおのれの みくだけて物を思ふころかな》『詞 花和歌集』恋上・ニーー・源重之 (p259)

「かたはに、見苦しからぬ若人」『源 氏物語』「夕顔」紫式部(p38)

「形見こそ今はあたなれこれなくは 忘るる時もあらましものを」『古今和 歌集』恋・十四・七四六・よみ人しら ず (p142)

《神代よりありけむものから今もなほ苦しき恋に人悩むらむ》之人冗悟(p378)

《唐衣着つつ慣れにし妻しあれば 遙々来ぬる旅をしぞ思ふ》『古今和 歌集』羈旅・四一〇・在原業平 (p292)

くき>

《昨日と言ひ今日とくらしてあすか 川流れて早き月日なりけり》『古今 和歌集』冬・三四一・春道列樹 (p283)

《君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな》『後拾遺 和歌集』恋二・六六九・藤原義孝 (p289) 「行事の蔵人のいときびしうもてな して・・・」『枕草子』九二・清少納言 (p129)

「清盛は嫡男たるによってその跡を継ぐ」『平家物語』一・鱸(p176)

<<>

「首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻欠けうげながら抜けにけり」『徒然草』五三・吉田兼好(p46-47)「くらければ、いかでかは見えむ」 『枕草子』六三・清少納言(p55)《来るをしも誰か嘆かむ人の子の去ぬる後の世などか苦しき》之人 冗悟(p377)

<tt>

「今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」『古今和歌集』春上・六三・在原業平(p137)

《源氏読まざる歌詠みは遺恨のことなり》藤原俊成(p252)

「嫌疑の者やある」『枕草子』四五・ 清少納言(p52)

<=>

「《東風吹かば匂ひ遣せよ梅の花主なしとて春な忘れそ》」『拾遺集』 雑春・一〇〇六・菅原道真(p63, 275)

「こと物は食はで、ただ仏の御おろしをのみ食ふか・・・」『枕草子』八七・清少納言(p55)

《ことならば雲より風になりてしか よにちりもせでつつむ道もがな》之 人冗悟(p382)

《来ぬ人の心知る夜の月を憂み空もとどろにかみ鳴りぬかも》之人冗悟(p382)

《来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身も焦がれつつ》『新 勅撰和歌集』恋三・八四九・藤原定家(p259)

「この翁は、かぐや姫のやもめなるを嘆かしければ」『竹取物語』五「火鼠の皮衣」(p70)

「この草子、目に見え心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて・・・」『枕草子』三一九・清少納言(p55)

《「このはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ」と仰せられければ・・・》『古今著聞集』(p284)

《このよをばわがよとぞおもふもち づきのかけたることもなしとおもへ ば》藤原道長(p261)

「《恋すてふわが名はまだき立ちに けり人知れずこそ思ひそめしか》」 『拾遺集』恋・・六ニー・壬生忠見 (p61, 269, 301)

「こよなうこそおとろへにけれこの 影のやうにや痩せて侍る・・・」『源 氏物語』十二・三・紫式部(p128) 「これは、身のためも人の御ためも、 よろこびには侍らずや」『枕草子』 八二・清少納言(p55)

《これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂の関》『後撰和 歌集』雑一・一〇八九・蝉丸(p290)

<さ>

「坂上田村麻呂と云ふ人、近衛の 将監とありける時」『今昔物語』十 一・三二(p177)

「桜花今日こそかくもにほふともあな頼みがた明日の夜のこと」『伊勢物語』九十(p67)

「さしたることなくて人のがり行くは・・・」『徒然草』百七十・吉田兼好(p34)

「佐渡国には、まことに金の侍るなり・・・」『宇治拾遺物語』巻四・二・五四(p127-128)

「五月五日は、くもりくらしたる・・・」 『枕草子』一〇・清少納言(p50) 「里に宿直物とりにやるに、男二人 まかれ・・・」『枕草子』一〇八・清少納言(p54)

「さば、こは誰がしわざにか」『枕草子』一三八・清少納言(p56) 「《さびしさに宿を立ち出でてながむればいづこも同じ秋の夕暮れ》」 『後拾遺和歌集』秋上・三三三・良暹

「佐保山のははそのもみぢ散りぬ べみ夜さへ見よと照らす月影」『古 今和歌集』秋下・二ハー・よみ人し らず(p171)

法師(p24, 273)

<し>

《字余りは歌によくある事なれど字 足らず歌ぞ珍かなる》之人冗悟 (p246)

「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろきことなり」『徒然草』六・吉田兼好(p51)

「しづかさや岩にしみ入る蝉の声」 『奥の細道』松尾芭蕉(p39) 「忍びて来る人見知りて吠ゆる犬は、打ちも殺しつべし」『枕草子』 (能因本二五) (p128)

「しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく」『伊勢物語』十五(p129)

《忍ぶれど色に出にけりわが恋は ものや思ふと人のとふまで》『拾遺 和歌集』恋一・六二二・平兼盛 (p301)

「十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくてたけばかりに・・・」『枕草子』一八九・清少納言(p49) 《白玉は人に知らえず知らずともよし我し知れらば知らずともよし》『万葉集』六・一〇一八・旋頭歌・元興寺の僧(p239)

<す>

「すさまじきもの。昼吠ゆる犬・・・」 『枕草子』二五・清少納言(p50) 「雀の子を犬君が逃がしつる」『源 氏物語』「若紫」紫式部(p192) 《捨て猫が 昨日は五匹今朝二匹 人の情ぞ けざやかなる》之人冗悟 (p245)

《住江の岸による波よるさへや夢 の通ひ路人目よくらむ》『古今和歌 集』恋二・五五九・藤原敏行(p259)

<せ>

「《瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ》」『詞花和歌集』恋上・二二九・崇徳院(p26, 259)

「前裁の草木まで心のままならず作りなせるは・・・」『徒然草』一〇・吉田兼好(p48)

くそ>

「そこにものし給ふは、いづれより のまらうどにかおはす・・・」『庚子 道の記』武女(p167)

《袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ》『古今和歌集』春上・二・紀貫之(p283) 《そま人は宮木ひくらしあしひきの山の山彦よびとよむなり》『古今和歌集』巻十・物名・一一〇一・紀貫之(p291)

「それは隆円に賜へ・・・」『枕草子』 九三・清少納言(p80)

<た>

「大事を思ひ立たむ人は、・・・」『徒 然草』五九・吉田兼好(p165) 「高光る我が日の皇子の万代に国 知らさまし島の宮はも」『万葉集』 ニ・一七一(p147)

《滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ》『拾 遺和歌集』雑上・一〇三五・藤原公 任(p270)

《田子の浦ゆうち出でて見れば真 白にそ不尽の高嶺に雪は降りける》『万葉集』三・三一七・山部赤人 (p239)

「誰そ叩く手枕絶たる蔀戸をしのに しとどに時雨濡らしそ」之人冗悟 (p131)

《立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む》『古 今和歌集』離別・三六五・在原行平 (p258)

「立つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつつ人をはかるべらなる」『土佐日記』一月十八日・紀貫之(p171) 《誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに》『古今和歌集』 雑上・九〇九・藤原興風(p255)

くち>

「地の動き、家のやぶるる音・・・」 『方丈記』五・鴨長明(p64)

<>>

《月見れば千々にものこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど》 『古今集』秋上・一九三・大江千里 (p262, 269)

《月を無み人やは訪はむ闇夜には 衣返して夢にかも見む》之人冗悟 (p379)

《筑波嶺の峰より落つるみなの河 恋ぞ積もりて淵となりぬる》『古今 和歌集』恋三・七七六・陽成天皇 (p259)

「常に聞きたきは琵琶、和琴」『徒然 草』一六・吉田兼好(p40, 160)

<と>

《永久に床旧る幸の難きとて憎からぬ身に逢はじものかも》之人冗悟 (p382)

《永久に雪と桜は降りつつも今年限りの春ならむかも》之人冗悟 (p382)

《年並みを泣きみ笑ひみ流れつつ よすが絶やさじうみ果つるとも》之 人冗悟(p379)

《とどめおきて誰をあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり》 『後拾遺和歌集』十・哀傷・五六八・和泉式部(p281)

《訪はれじや訪はじや人に問はさじ とあだ心なく雨は降りつつ》之人冗 悟(p379)

「飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて・・・」『徒然草』一二一・吉田兼好(p38)

「共に見る人もしあらばあるまじき 花の終はりの果てぬ涙よ」之人冗 悟(p58)

<な>

《長からむ心も知らず黒髪の乱れて今朝は物をこそ思へ》『千載和歌集』恋三・八〇三・待賢門院堀河(p270)

《夏祭り一人人波渡る夜の明けぬ間ばかり憂きものはなし》之人冗悟(p376)

「などやいく金あらなくに歌舞伎町、 身のみにて足る女にもあらなくに」 之人冗悟(p138)

《名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな》『後 撰和歌集』恋三・七〇〇・藤原定方(p258)

《難波江の蘆のかりねの一夜ゆゑ みをつくしてや恋ひわたるべき》 『千載和歌集』恋三・八〇七・皇嘉 門院別当(p259)

《難波潟みじかき葦のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや》 『新古今和歌集』恋一・一〇四九・ 伊勢(p258)

<に>

《二条の后の御息所ときこえける時、 正月三日・・・》『古今和歌集』春上・ 八・文屋康秀(p247)

《新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる》 (日本武尊)—《日日並べて夜には 九夜日には十日を》(御火焼の翁) (p243)

<は>

《果てしなき道のこの世にあるもの かたゆむ歩みに道ぞ遠かる》之人 冗悟(p376) 《果ててなほ恨むこととてなき身に は逢はぬものゆゑいとどいとほし》 之人冗悟(p379)

《花さそふ嵐の庭の雪ならでふり ゆくものはわが身なりけり》『新勅 撰和歌集』雑一・一〇五二・藤原公 経(p285)

《花の色は移りにけりないたづらに わが身世にふるながめせしまに》 『古今和歌集』春下・一一三・小野小 町(p290)

「花のごと世の常ならば過ぐしてし昔はまたも返り来なまし」『古今集』 春下・九八・よみびとしらず(p142) 《花見るに今更気付く齢かな》之人 冗悟(p380)

「春来れば桜匂ふは常なれど同じき春に又遭はめやも」之人冗悟 (p64)

《春の日の光にあたる我なれどか しらの雪となるぞわびしき》『古今 和歌集』春上・八・文屋康秀(p247) 《春の夜の夢ばかりなる手枕にか ひなく立たむ名こそ惜しけれ》『千 載和歌集』雑上・九六四・周防内侍 (p270)

<ひ>

「《久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ》」『古今集』春下・ 八四・紀友則(p159, 270)

《人の世のよすがこよなみ一夜だに越すはいたはし夢の浮き橋》之 人冗悟(p277)

《人はみなかくやは人を思ひけむ 焦がれ死にして人に尋ねむ》之人 冗悟(p378)

「一重梅をなむ軒近く・・・」『徒然草』 一三九・吉田兼好(p51)

《人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は》『続後 撰和歌集』雑中・一二〇二・後鳥羽 天皇(p290)

<ふ>

《吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ》『古今和 歌集』秋下・二四九・文屋康秀 (p292)

「冬ながら空より花の散りくるは雲 のあなたは春にやあるらむ」『古今 和歌集』冬・三三〇・清原深養父 (p58) 「降る雪や明治は遠くなりにけり」 中村草田男(p150)

<^>

「弁などは、いとをかしき官に思ひたれど・・・」『枕草子』四八・清少納言(p54)

<ほ>

《ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有り明けの月ぞ残れる》『千載和歌集』夏・一六一・藤原実定(p255)

<ま>

《松島や雄島の磯にあさりせし海 人の袖こそかくは濡れしか》『後拾 遺和歌集』恋四・八二七・源重之 (p251)

「まれまれかの高安(たかやす)に 来て見れば・・・」『伊勢物語』二三 (p117-118)

<み>

《御垣守衛士のたく火の夜は燃え 昼は消えつつ物をこそ思へ》『詞花 和歌集』恋上・二二五・大中臣能宣 (p259, 269)

《みかの原わきて流るるいづみ川 いつみきとてか恋しかるらむ》『新 古今和歌集』

恋一·九九六·藤原兼輔(p258, 270)

《見せばやな雄島の海人の袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず》 『千載和歌集』恋四・八八六・殷富門 院大(p251)

《陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに 乱れそめにし我ならなくに》『古今 和歌集』恋四・七二四・源融(p259, 290)

「身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影ははなれじ」『源氏物語』十二・三・紫式部(p128) 《みるめなき人に焦がれて我死なばよすが定めの波になりにしか》 之人冗悟(p382)

《見渡せば花も紅葉もなかりけり浦 の苫屋の秋の夕暮れ》『新古今和 歌集』秋上・三六三・藤原定家 (p277)

《見渡せば山もと霞む水無瀬川夕 べは秋と何思ひけむ》『新古今和歌 集』春上・三六・後鳥羽天皇(p286)

<む>

《昔、男ありけり。奈良の京ははなれ・・・》『伊勢物語』二 (p248)

<め>

「めなもみといふ草あり・・・」『徒然草』九六・吉田兼好(p52)

<も>

《もろともに乗らむ船もがうみわた るよにもしづまぬかいぞゆかしき》 之人冗悟(p384)

《文字には殊なる魂の宿るらむ。読みもせでうちある書のなほぞゆかしき》之人冗悟(p380)

<や>

「安らはで寝なましものを小夜更け て傾くまでの月を見しかな」『後拾 遺集』恋二・六八〇・赤染衛門 (p149)

「柳原の辺に、強盗法印と号する僧 ありけり・・・」『徒然草』四六・吉田 兼好(p52)

《八重葎茂れる宿のさびしきに人こ そ見えね秋は来にけり》『拾遺和歌 集』秋・一四〇・恵慶法師(p269) 《山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり》『古今 和歌集』秋下・三〇三・春道列樹 (p278)

「《山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば》」『古今集』冬・三一五・源宗于(p39, 268)「山深みけ近き鳥の音はせで物おそろしきふくろふの声」西行法師(p26

《病にはあらぬ娘の赤不浄知りもせじとや子等のささめき》之人冗悟 (p266)

「山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる」『徒然草』一九・吉田兼好(p37)

「やや、ものうけたまはる。 今さら に何かは御殿籠る・・・」『栄花物 語』二(p127)

<ゐ>

「院の殿上には誰々かありつる」 『枕草子』一〇八・清少納言(p52) <ゆ>

《雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきてをらまし》『古 今和歌集』冬・三三六・紀友則 (p293) 「行く春や鳥啼き魚の目は泪」『奥の細道』松尾芭蕉(p37 《行く蛍送りし空に夜の雨いづこばかりと思ひやらるる》之人冗悟 (p376)

《夢にだも逢はむ思ひぞあだなれ や覚めて見る夜のしじま悲しも》之 人冗悟(p376)

《由良の門を渡る舟人梶緒絶えゆく へも知らぬ恋の道かな》『新古今和 歌集』恋一・一〇七一(p259)

•曾禰好忠)

<よ>

「四日、風吹けば、え出でたたず」 『土佐日記』一月四日・紀貫之(p63) 「夜泣きすとただ盛り立てよ末の代 に清く盛りふる事もこそあれ」『平 家物語』六(p129)

「世のしれものかな。かくあやふき 枝の上にて、安き心ありてねぶる らむよ」『徒然草』四一・吉田兼好 (p44)

「《世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる》」『千載 集』雑中・一一五一・藤原俊成(p180, 270)

「世の中を憂しと恥しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」『万葉集』五・八九三・山上憶良(p139) 「世の人の心まどはすこと、色欲にはしかず」『徒然草』八・吉田兼好(p48)

「よろづのことよりも、わびしげなる 車に・・・」『枕草子』二三七・清少納 言(p128)

「よをこめてとりのそらねははかる ともよにあふさかのせきはゆるさ じ」清少納言(p56)

<わ>

《わが庵は都の辰巳しかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり》『古今和歌集』雑下・九八三・喜撰法師(p263)

「わかき人々出で来て、をとこやある・・・」『枕草子』八七・清少納言 (p53)

《わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし》『千載和 歌集』恋二・七六〇・二条院讃岐 (p258, 270) 「わかれても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし」『源氏物語』十二・三・紫式部(p128) 「我が山へ帰りのぼらむも、人目はづかし・・・」『宇治拾遺物語』巻六・六・八十八(p128)

《忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな》『拾遺和歌集』恋四・八七〇・右近(p290) 《わたの原漕ぎ出でてみればひさかたの雲ゐにまがふ沖つ白波》 『詞花和歌集』雑下・三八二・藤原忠通(p250)

《わたの原八十島かけて漕ぎ出で ぬと人には告げよ海人の釣り舟》 『古今和歌集』羈旅・四〇七・小野 篁(p250)

《わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ》 『後撰和歌集』恋五・九六〇・元良親王(p258)

「我死なば世にも在らねば知らね ども身こそ身罷れ名こそ猶在れ」之 人冗悟(p65)

<を>

《をかしげなる女ごども、わかき人、わらはべなむ見ゆる》『源氏物語』若紫・一・紫式部(p269) 《小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびの行幸待たなむ》『拾遺和歌集』雑秋・一一二八・藤原忠平(p254)

「《男もすなる日記といふものを、 女もしてみむとて、するなり》」『土 佐日記』十二月二十一日・紀貫之 (p43, 143, 249)

— about **the author of this book (本書の著者**について) —

Jaugo Noto is a professional educator in linguistics, who makes it his business to enable students to see, do, or be what he's been through and what he can see through, in ways other humans have never imagined or even thought possible. His field of business activity ranges from modern English to ancient Japanese, developing not so much on paper or in the flesh as on the WEB currently.

之人冗悟(のと・じゃうご)は語学教育の専門家。彼本人の実践・予見の体験を、学生にも認識・実践・体得させること(それも、他者が想像もせず、不可能とさえ思っていた方法で可能ならしめること)を仕事とする彼の活動の幅は、現代英語から古典時代の日本語まで多岐に渡る。現在、紙本執筆や生身の授業よりインターネット上での事業展開が主力。

— about **ZUBARAIE** LLC. (合同会社ズバライエについて) —

ZUBARAIE LLC. was established in Tokyo, Japan, on July 13th (Friday), 2012, as a legal vehicle for Jaugo Noto to perform such services as education, translation, publication and other activities to help enlighten people.

こうどうがいしゃ Zubaraie
合同会社ズバライエは、2012年7月13日(金曜日)、日本国の東京にて、之人冗悟が教育・翻訳・出版その他の啓蒙活動を遂行するための法的枠組として設立された。

「古文・和歌マスタリング・ウェポン」

ISBN 978-4-9906908-2-3

Copyright ©2011-2013 by Jaugo Noto (之人冗悟)

1st edition published from ZUBARAIE LLC. 2013/02/11

*作中の「古歌」・「古文」のうち作者明示あるものは(著者"之人冗悟"の自作を含め)「作者名」明記の上で御随意に引用されたし。作者明示なき古文は全て著者の自作なれど「汎用例」として随時(非商用&非体系的という条件で)引用許可。巻末確認テストは門外不出。作中に散りばめられた「ナンセンス語呂合わせ」もまた立派&アッパラパーな"之人冗悟一流の著作物"につき(学習者脳内復唱以外)の公的場面での引用には「jargon á la Jaugo Noto(jalajan: のと・じゃうご意味不明語)」みたいな断わり書き or 合いの手(クじゃ6じゃんり)を入れることをお忘れなく。

= also from the same **author** 之人元语(**Jaugo Noto**) = **B**eneath **U**mbrella of **Z**ubaraie LLC.

『でんぐリングリッシュ:英·和 対訳版』ISBN 978-4-9906908-0-9

日本の初学者&再挑戦者に贈る、英語を真にモノにするための心得(英文/和訳見開き対訳本)。 ・・・本書一冊では効果半減:『英文解剖編』との併用により、真の英文解釈力の開眼を図るべし。

『でんぐリングリッシュ: 英文 解剖編』ISBN 978-4-9906908-1-6

同書の全英文を、解剖学的解釈の詳細な構造図で「**可視化**」した古今未曾有の英文読解指南書。 英語がこの形で「見える」ようになることこそ、全学習者の理想形・・・よーく見て、マネぶべし。

★本書★『古文•和歌^{Mastering Weapon}』ISBN 978-4-9906908-2-3

大学入試で出題される古文と和歌の知識を完全網羅。暗記必須事項は抱腹絶倒の語呂合わせで、 重要事項の全ての暗記+確認は巻末穴埋めテストで、調べ物は詳細な索引で、完全サポート。

☆! 併読推奨! ☆『**古文単語千五百** マスタリング・ウェポン』ISBN 978-4-9906908-3-0 充実の語義解説で大学入試古文にも和歌・古文書解釈にも不自由を感じぬ完璧な古語力を養成。 入試得点力に直結する受験生の福音書にして、日本語・日本文化への目からウロコの知識の宝庫。

☆ 「古文単語」及び「古文・和歌」MWの「例文集」をお望みの方は、こちらをどうぞ ↓ ☆

『ふさうがたり(Fusau Tales)扶桑語り: 古文·英文·現代和文対釈』ISBN 978-4-9906908-4-7 『古文単語千五百』の全見出語1500(+平安助動詞37&平安助詞77全用法)で書かれた22編の 擬古文歌物語で『古文・和歌マスタリングウェポン』の説く古典読解法の実践を図る英和古対釈本。

Greeting and invitation from *author Jaugo Noto* **筆者・之人冗悟**(のと・じゃうご)よりの御挨拶&御招待

Thank you very much for taking (even *READING!*) this book. 本書を手に取って(更には読んで!)いただき、感謝します。

If you found it interesting, you could find it much more so by visiting **the WEB site presented by this author**: 「面白い!」と感じたなら、**筆者提供の WEB サイトを訪問すれば**もっと興味深いものが見つかるはずですよ:

<扶桑語り(Fusau Tales) interactive lesson> 扶桑語り(ふさうがたり) 双方向型授業 on theWEB http://fusaugatari.com ...↓教材見本はこちら↓ http://fusaugatari.com/sample/dochi/1000001/index.html

<ancient Japanese literature in general>
(古い時代の) 日本文学全般紹介サイト
http://fusau.com

・・・本書および WEB コンテンツの提供元は、筆者が代表社員の **合同会社**(Limited Liability Company:LLC.) **ZUBARAIE** (**ズバライエ**) でした(・・・*日本の古文のみならず、英語のコンテンツもありますよ*) cf: http://furu-house.com/sample (**←英語構文 WEB レッスン**)